# BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

# 八登崇之(Takayuki YATO; aka. "ZR" v2.3 [2020/10/10]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザマニュアル bxjscls-manual.pdf を参照してください。

## 目次

1	はじめに	3
2	オプション	10
3	和文フォントの変更	39
4	フォントサイズ	40
5 5.1	<b>レイアウト</b> ページレイアウト	46 47
6	改ページ(日本語 T <sub>E</sub> X 開発コミュニティ版のみ)	61
7	ページスタイル	62
8.1 8.2 8.3 8.4 8.5 8.6	文書のマークアップ 表題 章・節 リスト環境 パラメータの設定 フロート キャプション	66 66 71 83 91 92 94
g	フォントコマンド	95

10	相互参照	97
10.1	目次の類	97
10.2	参考文献	103
10.3	索引	104
10.4	脚注	106
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	108
12	いろいろなロゴ	112
13	amsmath との衝突の回避	113
14	初期設定	113
付録 A	和文ドライバの仕様 圏	118
付録 B	和文ドライバ:minimal 🕾	119
B.1	補助マクロ	119
B.2	(u)pT <sub>E</sub> X 用の設定	121
B.3	pdfT <sub>E</sub> X 用の処理	126
B.4	X <sub>H</sub> T <sub>E</sub> X 用の処理	127
B.5	後処理(エンジン共通)	128
付録 C	和文ドライバ:standard 轡	131
C.1	準備	131
C.2	和文ドライバパラメタ	131
C.3	共通処理 (1)	132
C.4	pT <sub>E</sub> X 用設定	140
C.5	pdfTEX 用設定:CJK + bxcjkjatype	143
C.6	X <sub>H</sub> T <sub>E</sub> X 用設定:xeCJK + zxjatype	145
C.7	LuaT <sub>E</sub> X 用設定:LuaT <sub>E</sub> X-ja	148
C.8	共通処理 (2)	151
付録 D	和文ドライバ:modern 🕙	152
D.1	フォント設定	152
D.2	fixltx2e 読込	153
D.3	和文カテゴリコード	153
D.4	完了	153
付録 E	和文ドライバ:pandoc 圏	153
E.1	準備	154
E.2	和文ドライバパラメタ	154
	相文トライハハラメダ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	104

E.4	lang 変数	156
E.5	geometry 変数	158
E.6	CJKmainfont 変数	159
E.7	Option clash 対策	159
E.8	paragraph のマーク	159
E.9	全角空白文字	160
E.10	hyperref 対策	160
E.11	Pandoc 要素に対する和文用の補正	160
E.12	完了	161
付録 F	補助パッケージ一覧 圏	161
付録 G	補助パッケージ:bxjscompat 醤	162
G.1	準備	162
G.2	X <sub>H</sub> T <sub>E</sub> X 部分	162
G.3	LuaT <sub>E</sub> X 部分	163
G.4	完了	164
付録 H	補助パッケージ:bxjscjkcat 鬱	164
H.1	準備	165
H.1 H.2	準備	165 165
	和文カテゴリコードの設定	
H.2	和文カテゴリコードの設定	165
H.2 H.3	和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い	165 166
H.2 H.3 H.4	和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 初期設定	165 166 173
H.2 H.3 H.4 H.5	和文カテゴリコードの設定         ギリシャ・キリル文字の扱い         初期設定         完了         補助パッケージ: bxjspandoc 響	165 166 173 174
H.2 H.3 H.4 H.5	和文カテゴリコードの設定         ギリシャ・キリル文字の扱い         初期設定         完了         補助パッケージ: bxjspandoc 響         準備	165 166 173 174
H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I	和文カテゴリコードの設定         ギリシャ・キリル文字の扱い         初期設定         完了         補助パッケージ: bxjspandoc          準備         パッケージオプション	165 166 173 174 174
H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1	和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 完了 補助パッケージ: bxjspandoc 響 準備 パッケージオプション	165 166 173 174 174 174
H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3	和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 完了 補助パッケージ: bxjspandoc 響 準備 パッケージオプション パッケージ読込の阻止	165 166 173 174 174 174 175
H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4	和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 完了 補助パッケージ: bxjspandoc 巻 準備 パッケージオプション パッケージ読込の阻止 fixltx2e パッケージ	165 166 173 174 174 174 175
H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4 I.5	和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 完了 補助パッケージ: bxjspandoc 圏 準備 パッケージオプション パッケージ読込の阻止 fixltx2e パッケージ cmap パッケージ microtype パッケージ	165 166 173 174 174 174 175 175
H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4 I.5 I.6	和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 完了 補助パッケージ: bxjspandoc 圏 準備 パッケージオプション パッケージ読込の阻止 fixltx2e パッケージ cmap パッケージ microtype パッケージ	165 166 173 174 174 174 175 175 175
H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4 I.5 I.6 I.7	和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 完了 補助パッケージ: bxjspandoc 巻 準備 パッケージオプション パッケージ就込の阻止 fixltx2e パッケージ cmap パッケージ microtype パッケージ Unicode 文字変換対策	165 166 173 174 174 174 175 175 175 175

# 1 はじめに

この文書は「BXJS ドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

```
⟨article⟩ bxjsarticle.cls 短いレポート (章なし) ⟨report⟩ bxjsreport.cls 長いレポート (章あり) ⟨book⟩ bxjsbook.cls 書籍用 ⟨slide⟩ bxjsslide.cls スライド用
```

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる 「pIATeX  $2_{\epsilon}$  新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラス に関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対する解説である。

これは  $\LaTeX$  Project の classes.dtx と株式会社アスキーの jclasses.dtx に基づいてもともと奥村晴彦により作成されたものです。現在は日本語  $T_{EX}$  開発コミュニティにより GitHub で管理されています。

### https://github.com/texjporg/jsclasses

[2002-12-19] いろいろなものに収録していただく際にライセンスを明確にする必要が生じてきました。アスキーのものが最近は modified BSD ライセンスになっていますので、私のものもそれに準じて modified BSD とすることにします。

[2016-07-13] 日本語 T<sub>F</sub>X 開発コミュニティによる管理に移行しました。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upIATFX 対応パッチを取り込みました。

ここでは次のドキュメントクラス (スタイルファイル) を作ります。

[2017-02-13] forum:2121 の議論を機に、jsreport クラスを新設しました。従来のjsbookの report オプションと比べると、abstract 環境の使い方および挙動がアスキーのjreport に近づきました。

```
⟨article⟩ jsarticle.cls 論文・レポート用 ⟨book⟩ jsbook.cls 書籍用 ⟨report⟩ jsreport.cls レポート用 ⟨jspf⟩ jspf.cls 某学会誌用 ⟨kiyou⟩ kiyou.cls 某紀要用
```

以下では実際のコードに即して説明します。

minijs は、jsclasses に似た設定を行うパッケージです。

- 1 %<\*minijs>
- 2 %% if jsclasses loaded, abort loading this package
- 3 \ifx\@jsc@uplatextrue\@undefined\else
- 4 \PackageInfo{minijs}{jsclasses does not need minijs, exiting}
- 5 \expandafter\endinput
- 6 \fi
- 7 %% "fake" jsarticle
- 8 \expandafter\def\csname ver@jsarticle.cls\endcsname{}
- 9 %</minijs>

\bxjs@clsname 文書クラスの名前です。エラーメッセージ表示などで使われます。

- 10 %<\*class>
- 11 %% このファイルは日本語文字を含みます.
- 12 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
- 13 % <book > \def \bxjs@clsname {bxjsbook}
- 14 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
- 15 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}

\ifjsc@needsp@tch [2016-08-22] 従来 jsclasses では,pLAT<sub>E</sub>X や LAT<sub>E</sub>X の不都合な点に対して,クラスファ イル内で独自に対策を施していました。しかし、2016年以降、コミュニティ版 pIATeX が次 第に対策コードをカーネル内に取り込むようになりました。そこで、新しい pIATeX カーネ ルと衝突しないように、日付が古い場合だけパッチをあてる場合があります。この処理に使 用するフラグを定義します。

- 16 \newif\ifjsc@needsp@tch
- 17 \jsc@needsp@tchfalse

#### ■BXJS クラス特有の設定 ※

長さ値の指定で式を利用可能にするため calc を読み込む。

18 \RequirePackage{calc}

クラスオプションで key-value 形式を使用するため keyval を読み込む。

19 \RequirePackage{keyval}

クラスの本体ではこの他に geometry パッケージが読み込まれる。

TODO: 依存パッケージの情報。

互換性のための補助パッケージを読み込む。

- 20 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
- 21 \let\jsAtEndOfClass\@gobble
- 22 \RequirePackage{bxjscompat}%
- 23 }{}

\jsDocClass [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等:\jsArticle=bxjsarticle, \jsBook=bxjsbook, \jsReport=bxjsreport, \jsSlide=bxjsslide.

- 24 \let\jsArticle=a
- $25 \left| \text{jsBook=b} \right|$
- $26 \left| \text{let} \right|$
- 27 \let\jsSlide=s
- 28 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
- 29 %<book>\let\jsDocClass\jsBook
- 30 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
- 31 % <slide > \let \ js Doc Class \ js Slide

\jsEngine [暗黙文字トークン] エンジン (TrX の種類) の種別: j = pTrX 系、x = XrTrX、p = pdfTfX(含 DVI モード)、1 = LuaTfX、J = NTT jTfX、0 = Omega 系、n =以上の何 れでもない。

```
32 \let\jsEngine=n
               33 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
               34 \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
               35 \edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}%
                   \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
               37 \bxjs@test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}
               38 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
               39 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=0}
               40 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
               41 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
               42 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=1}
\ifjsWithupTeX 〔スイッチ〕エンジンが(内部漢字コードが Unicode の)upTrX であるか。
               43 \newif\ifjsWithupTeX
               45 \jsWithupTeXtrue
               46 \fi\fi
               47 \let\if@jsc@uplatex\ifjsWithupTeX
\ifjsWithpTeXng [スイッチ] エンジンが pTpX-ng であるか。
               48 \newif\ifjsWithpTeXng
               49 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}
 \ifjsWitheTeX 〔スイッチ〕エンジンが\varepsilon-TpX 拡張をもつか。
               50 \newif\ifjsWitheTeX
               51 \bxjs@test@engine\eTeXversion{\jsWitheTeXtrue}
                 非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。
               ※NTT jT<sub>E</sub>X と Omega 系。
               52 \let\bxjs@tmpa\relax
               53 \ifx J\jsEngine \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
               54 \ifx O\jsEngine \def\bxjs@tmpa{Omega}\fi
               55 \ifx\bxjs@tmpa\relax \expandafter\@gobble
               57 \ClassError\bxjs@clsname
                    {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
               58
                    {It's a fatal error. I'll quit right now.}
               60 \expandafter\@firstofone
               61 \fi{\endinput\@@end}
                 LuaT<sub>F</sub>X の場合、本クラス用の Lua モジュールを用意する。
               62 \ifx 1\jsEngine
               63 \directlua{ bxjs = {} }
               64 \fi
\bxjs@protected \varepsilon-TFX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。
               65 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected
               66 \else \let\bxjs@protected\@empty
```

67\fi

\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。

- $68 \fightharpoonup 68 \fightha$
- 69 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}
- 70 \else
- 71 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand\*}
- 72 \fi

\ifjsInPdfMode 〔スイッチ〕pdfT<sub>F</sub>X / LuaT<sub>F</sub>X が PDF モードで動作しているか。

- ※ LuaTrX 0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。
- 73 \newif\ifjsInPdfMode
- 74 \@nameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}
- 75 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine
- 76 \let\PackageWarningNoLine\PackageInfo % suppress warning
- 77 \RequirePackage{ifpdf}
- 78 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa
- 79 \Onameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}
- $80 \left| \text{ifjsInPdfMode} \right|$

\ifbxjs@TUenc 〔スイッチ〕IATFX の既定のフォントエンコーディングが TU であるか。

※ 2017 年 1 月以降の LATEX カーネルにおいて「Unicode を表す LATEX 公式のフォントエ ンコーディング」である"TU"が導入され、これ以降の LATeX を XaTeX または LuaTeX で動かしている場合は、既定のエンコーディングが TU になる。それ以外の場合は、既定の エンコーディングは OT1 である。

- 81 \newif\ifbxjs@TUenc
- 82 \def\bxjs@tmpa{TU}\edef\bxjs@tmpb{\f@encoding}
- 83 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
- 84 \bxjs@TUenctrue
- 85 \fi

\ifbxjs@old@hook@system

〔スイッチ〕IATFX の新しいフック管理システムが未導入であるか。

※カーネルの 2020/10/01 版で導入された。

- 86 \newif\ifbxjs@old@hook@system

TrX の if-文 (\if XXX……〈真\\else〈偽〉\fi) を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。

- 88 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%
- 89 #1\expandafter\@firstoftwo
- 90 \else\expandafter\@secondoftwo
- 91 \fi}

\bxjs@cslet \bxjs@cslet{\名前 1\}\制御綴:

- 92 \def\bxjs@cslet#1{%
- 93 \expandafter\let\csname#1\endcsname}

\bxjs@csletcs \bxjs@csletcs{ $\langle$ 4前 1 $\rangle$ }{ $\langle$ 4前 2 $\rangle$ }:

- 94 \def\bxjs@csletcs#1#2{%
- $95 \qquad \texttt{\expandafter\endsname} + \texttt{\expandafter$

```
が空の場合は,を入れない。完全展開可能。
                  96 \def\bxjs@catopt#1#2{%
                  97 #1\if\relax#1\relax\else\if\relax#2\relax\else,\fi\fi#2}
      \bxjs@ifplus \@ifstar の + 版。
                  98 \def\bxjs@ifplus#1{\@ifnextchar+{\@firstoftwo{#1}}}
\bxjs@gset@tempcnta calc の整数式を用いて \@tempcnta の値を設定する。
                  99 \let\c@bxjs@tempcnta\@tempcnta
                  100 \def\bxjs@gset@tempcnta{\setcounter{bxjs@tempcnta}}
    \jsSetQHLength \jsSetQHLength\CS{〈長さ式〉}: \setlength の変種で、通常の calc の長さ式の代わ
                  りに、「Q/H/trueQ/trueH/zw/zh の単位付きの実数」が記述できる(この場合は式は使え
                  ない)。
                 101 \def\jsSetQHLength#1#2{%
                 102
                      \begingroup
                        \bxjs@parse@qh{#2}%
                 103
                 104
                        \ifx\bxjs@tmpb\relax
                         \setlength\@tempdima{#2}%
                 105
                 106
                         \xdef\bxjs@g@tmpa{\the\@tempdima}%
                        \verb|\else \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb|
                 107
                 108
                        \fi
                      \endgroup
                 109
                 110
                      #1=\bxjs@g@tmpa\relax}
    \bxjs@parse@qh #1 が Q/H/trueQ/trueH/zw/zh で終わる場合、単位用の寸法値マクロ \bxjs@unit@XXX が
                  定義済なら、\bxjs@tmpb に #1 に等しい寸法の表現を返し、そうでないならエラーを出す。
                  それ以外では、\bxjs@tmpb は \relax になる。
                  ※(u)pIATeX の場合はこれらの和文単位はエンジンでサポートされる。しかし和文フォント
                  の設定が完了するまでは zw/zh の値は正しくない。
                 111 \if j\jsEngine \def\bxjs@parse@qh@units{zw,zh}
                 112 \else \def\bxjs@parse@qh@units{trueQ,trueH,Q,H,zw,zh}
                 113 \fi
                 114 \def\bxjs@parse@qh#1{%
                      \let\bxjs@tmpb\relax
                 115
                      \@for\bxjs@tmpa:=\bxjs@parse@qh@units\do{%
                 116
                        \ifx\bxjs@tmpb\relax
                 117
                         \end{form} $$ \operatorname{hxjs@next}_{\text{bxjs@tmpa}_{\#1}}% $
                 118
                         \expandafter\bxjs@parse@qh@a\csname bxjs@unit@\bxjs@tmpa\expandafter
                 119
                             \endcsname\bxjs@next
                 120
                        \fi}}
                 121
                 122 \def\bxjs@parse@qh@a#1#2#3{%
                      \bxjs@next#3\\@nil#2\\@nil\\@nnil\}
                 125 \def\bxjs@parse@qh@b#1#2#3{%
                 126 \ifx\@nnil#2\@nnil\else
```

 $\bxjs@catopt \bxjs@catopt{\langle文字列 1}}{\langle 文字列 2}: 2 つの文字列を , で繋いだ文字列。ただし片方$ 

```
\f x#3\relax
                      127
                      128
                              \ClassError\bxjs@clsname
                      129
                               {You cannot use '\bxjs@tmpa' here}{\@ehc}%
                              \def\bxjs@tmpb{0pt}%
                      130
                      131
                              \@tempdimb#3\relax \@tempdimb#1\@tempdimb
                      132
                              \edef\bxjs@tmpb{\the\@tempdimb}%
                      133
                       134
                             \fi
                           \fi}
                      135
                       今の段階では Q/H だけが使用可能。
                           \def\bxjs@unit@Q{0.25mm}\let\bxjs@unit@H\bxjs@unit@Q
\bxjs@begin@document@hook BXJS クラス用の文書本体開始時フック。
                       137 \@onlypreamble\bxjs@begin@document@hook
                       138 \let\bxjs@begin@document@hook\@empty
                      139 \AtBeginDocument{\bxjs@begin@document@hook}
  \bxjs@post@option@hook \ProcessOptions 直後に実行されるフック。
                       140 \@onlypreamble\bxjs@post@option@hook
                      141 \let\bxjs@post@option@hook\@empty
 \bxjs@pre@jadriver@hook 和文ドライバ読込直前に実行されるフック。
                      142 \@onlypreamble\bxjs@pre@jadriver@hook
                      143 \let\bxjs@pre@jadriver@hook\@empty
        \jsAtEndOfClass このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)
                      144 \def\jsAtEndOfClass{%
                      145 \qquad \texttt{\expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-h@@k\endcsname} \\
                         一時的な手続き用の制御綴。
                       146 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo
                      147 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@a
                      148 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@b
                      149 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@c
                      150 \verb|\conlypreamble\bxjs@tmpdo@d|
                         LuaTFX の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリ
                       コードを一時的に11に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。
                       ※現在のLuaIATFXでは、漢字のカテゴリコードは最初から11になっているので、この処
                       理は特段の意味を持たない。しかし、昔は12になっていて、この場合、日本語文字のコン
                        トロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを11に変更する必要がある。
                      151 \if l\jsEngine
                      152 \def\bxjs@tmpdo#1{%
                          \xdef\bxjs@pre@jadriver@hook{%
                      153
                             \bxjs@pre@jadriver@hook
                      154
                             \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}%
                      156 \catcode`#1=11\relax}
                      157 \@tfor\bxjs@tmpa:=和西暦\do
```

158 {\expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@tmpa}

159 \fi

\jsInhibitGlue は \inhibitglue が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何もしない。

- 160 \bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%
- 161 \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了させる。

- 162 \if@compatibility
- 163 \ClassError\bxjs@clsname
- 164 {Something went chaotic!\MessageBreak
- 165 (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak
- I cannot go a single step further...}
- 167 {If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak
- then there'll still be hope....}
- 169 \expandafter\@firstofone
- 170 \else \expandafter\@gobble
- 171 \fi{\typeout{Farewell!}\endinput\@@end}

## 2 オプション

これらのクラスは \documentclass{jsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{jsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

172 \newif\if@restonecol

\if@titlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

173 \newif\if@titlepage

\ifCopenright \chapter, \part を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要するに片起こし、奇数ページ起こしになります。

174 %<book|report>\newif\if@openright

\ifCopenleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。

175 %<book|report>\newif\if@openleft

\if@mainmatter 真なら本文、偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。

BXJS では report 系でも定義されることに注意。

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

#### 177 \newif\if@enablejfam \@enablejfamfalse

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積  $1 \,\mathrm{m}^2$ ,縦横比  $1:\sqrt{2}$  の長方形の辺の長さを  $\mathrm{mm}$ 単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては mm 単位に切り捨てたもの が A1, A2, …です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。 JIS では B0 判の面積が  $1.5\,\mathrm{m}^2$  ですが、 ISO で は B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。 したがって ISO の B0 判 は  $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$  です。このため, $\mathrm{ET}_{\mathrm{F}}\mathrm{X}\,2_{arepsilon}$  の  $\mathrm{b5paper}$  は  $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$  です が、pIATFX 2εの b5paper は 257 mm × 182 mm になっています。ここでは pIATFX 2εに ならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形, 182mm×230mm), a4var (A4 変形, 210mm×283mm) を追加しま した。

BXJS クラスではページレイアウト設定に geometry パッケージを用いる。用紙サイズ設 定は geometry に渡すオプションの指定と扱われる。

```
178 \@onlypreamble\bxjs@setpaper
179 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
180 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
181 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
182 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
183 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
184 \DeclareOption{b4paper}{\bxjs@setpaper{b4j}}
185 \DeclareOption{b5paper}{\bxjs@setpaper{b5j}}
186 \DeclareOption{b6paper}{\bxjs@setpaper{b6j}}
187 \DeclareOption{a4j}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
188 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
189 \DeclareOption{b4j}{\bxjs@setpaper{b4j}}
190 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{b5j}}
191 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
192 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
193 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
194 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
195 \verb|\DeclareOption{executive paper}{\bxjs@setpaper{executive paper}}|
geometry の用紙サイズのオプション名を全てサポートする。
196 \def\bxjs@tmpb#1#2{\DeclareOption{#1}{\bxjs@setpaper{#2}}}
197 \@for\bxjs@tmpa:={%
a0,a1,a2,c0,c1,c2,c3,c4,c5,c6,ansia,ansib,ansic,ansid,ansie%
199 }\do{\edef\bxjs@next{%
```

200 \noexpand\bxjs@tmpb{\bxjs@tmpa paper}{\bxjs@tmpa paper}%
201 }\bxjs@next}
202 \bxjs@tmpb{screen}{screen}
ただし b?paper は JIS の B 列に従う。
203 \@for\bxjs@tmpa:={0,1,2,3}\do{\edef\bxjs@next{%
204 \noexpand\bxjs@tmpb{b\bxjs@tmpa paper}{b\bxjs@tmpa j}%
205 }\bxjs@next}

B?paper で ISO の B 列を指定できるようにする。

- 206 \@for\bxjs@tmpa:={0,1,2,3,4,5,6}\do{\edef\bxjs@next{%
- 207 \noexpand\bxjs@tmpb{A\bxjs@tmpa paper}{a\bxjs@tmpa paper}%
- % \noexpand\bxjs@tmpb{B\bxjs@tmpa paper}{b\bxjs@tmpa paper}% \$\$209 }\bxjs@next}

Pandoc では用紙サイズ指定について「後ろに paper を付けた名前のオプション」を指定する。これに対処するため、後ろに paper をつけた形を用意する。さらに、「用紙サイズをcustom とすると何も設定しない」ようにするため custompaper というオプションを用意する。

- 211 \DeclareOption{b5varpaper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
- 212 \DeclareOption{screenpaper}{\bxjs@setpaper{screen}}
- 213 \DeclareOption{custompaper}{}

## ■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

- $214 \neq 14$
- $215 \ensuremath{\,\backslash\,} 0$ landscapefalse
- 216 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}
- ■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったので、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

217 \newif\if@slide

BXJSではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。 ※この \if@slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

- $218 \% < !slide > \@slidefalse$
- 219 %<slide>\@slidetrue

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の

20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的 なドキュメントクラスと同様にポイント数から10を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設 しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag\* を新設しました。

\Optsize は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は \jsUnusualPtSize (=-20) k  $\neq$   $\delta$ .

- 220 \newcommand{\@ptsize}{0}
- 221 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}
- 222 \def\jsUnusualPtSize{-20}

\bxjs@setbasefontsize 基底フォントサイズを実際に変更する。

- 223 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%
- Q単位の長さ指定をサポートするため \jsSetQHLength を使う。
- ※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、LATeX はクラス ファイルの読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で \jQ をサポートする ことは原理的に不可能である。
- 224 \jsSetQHLength\@tempdima{#1}%
- \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}%
- 226 \ifdim\@tempdima=10pt \long\def\@ptsize{0}%
- 227 \else\ifdim\@tempdima=10.95pt \long\def\@ptsize{1}%
- \else\ifdim\@tempdima=12pt \long\def\@ptsize{2}%
- 229 \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}

**TODO**: 恐らく 14pt と base=14.4pt 等の関係も全く等価であるべき。

- 230 \def\bxjs@setjbasefontsize#1{%
- 231 \setkeys{bxjs}{jbase=#1}}

\ifjsc@mag は「\mag を使うか」を表すスイッチ。

\ifjsc@mag@xreal は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。

- 232 \newif\ifjsc@mag
- 233 \newif\ifjsc@mag@xreal
- 234 %\let\jsc@magscale\@undefined
- 235 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}
- 236 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}
- 237 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}} 238 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}
- 239 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
- 240 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
- 241 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}

```
242 \DeclareOption{20pt}{\bxjs@setbasefontsize{20pt}}
243 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
244 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
245 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
246 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
247 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
248 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
249 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}
250 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
251 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
252 \DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}
253 \DeclareOption{12ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{12pt}}
   JS クラス互換の magstyle 設定オプション。
254 \ensuremath{\texttt{DeclareOption\{usemag\}\{\text{\textbx}js@magstyle\textbx}\}} \\
255 \DeclareOption{nomag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@nomag}
256 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal}
```

**■トンボオプション** トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は pIATEX  $2_{\varepsilon}$  本体 で行います (plcore.dtx 参照)。オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ \hour, \minute は pIATEX  $2_{\varepsilon}$  本体で宣言されています。

取りあえず、 $pT_EX$  系の場合に限り、JS クラスのトンボ関連のコードをそのまま活かしておく。正常に動作する保証はない。

```
257 \if j\jsEngine
258 \hour\time \divide\hour by 60\relax
259 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
260 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
261 \DeclareOption{tombow}{%
262
     \tombowtrue \tombowdatetrue
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
263
264
     \@bannertoken{%
        \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
265
        \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
266
     \maketombowbox}
267
268 \verb|\DeclareOption{tombo}{{\{}\%}
     \tombowtrue \tombowdatefalse
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
270
271
     \maketombowbox}
272 \fi
```

■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これ もアスキー版のままです。

273 \if j\jsEngine

- 274 \DeclareOption{mentuke}{%
- 275 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 276 \setlength{\Qtombowwidth}{\zQ}\%
- 277 \maketombowbox}
- 278\fi
- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- 279 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse}
- 280 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue \@mparswitchtrue}
- 281 \DeclareOption{vartwoside}{\@twosidetrue \@mparswitchfalse}
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- 282 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
- 283 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
- ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 284 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
- 285 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
- ■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれをopenright と表すことにしてあります。openany で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] openright は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは LATEX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、jsclasses では新たに openleft も追加しました。

- 286 % book | report > \DeclareOption { openright } { \Qopenright true \Qopenleft false }
- $288 \label{localized} $$288 \cdots = \cdots =$
- ■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。
- eqnarray  $IAT_{EX}$  の eqnarray 環境では & でできるアキが大きすぎるようですので,少し小さくします。また,中央の要素も \displaystyle にします。
  - 289  $\def\eqnarray{%}$
  - 290 \stepcounter{equation}%
  - 291 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
  - 292 \global\@eqnswtrue
  - 293 \m@th
  - 294 \global\@eqcnt\z@
  - 295 \tabskip\@centering
  - 296 \let\\\@eqncr
  - 297 \$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
  - 298 \hskip\@centering\$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}\$\@eqnsel

```
&\global\@eqcnt\@ne \hfil\displaystyle{{}##{}}\hfil
299
300
         &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
301
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
302
            \tabskip\z@skip
303
         \cr
  leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出
力されます。森本さんにしたがって訂正しました。
304 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
305 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}%}
306 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
307
     \def\eqnarray{%
308
       \stepcounter{equation}%
       \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
309
310
       \global\@eqnswtrue\m@th
       \global\@eqcnt\z@
311
       \tabskip\mathindent
312
313
       \left| \cdot \right| = \ensuremath{\mbox{Qeqncr}}
       \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
314
       \ifvmode
315
         \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
316
317
       \addtolength\abovedisplayskip{\parskip}%
318
319
       \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
       \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
320
321
       \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
       $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
322
323
       \bgroup
         \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
324
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil\displaystyle{{}##{}}\hfil
325
326
         &\global\@eqcnt\tw@
           $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
327
328
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
       \tabskip\z@skip\cr
329
330
       }}
■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。
 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。
331 % \DeclareOption{openbib}{%
332 %
       \AtEndOfPackage{%
333 %
        \renewcommand\@openbib@code{%
           \advance\leftmargin\bibindent
334 %
335 %
           \itemindent -\bibindent
336 %
           \listparindent \itemindent
337 %
           \parsep \z@}%
```

\renewcommand\newblock{\par}}}

338 %

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォントしか使えません。AMSFonts や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん使うと "Too many math alphabets …"というエラーが起こってしまいます。disablejfamオプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので、数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので、この新ドキュメントクラスでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメントクラスの仕様に合わせることにしました。

\bxjs@enablejfam 〔暗黙文字トークン〕enablejfam オプションの状態:

339 %\let\bxjs@enablejfam\@undefined

enablejfam オプションの処理。

- 340 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
- 341 \def\bxjs@kv@enablejfam@false{\let\bxjs@enablejfam=f}
- $342 \end{tabular} and the constant of the co$
- $343 \ensuremath{\mbox{define@key{bxjs}{enablejfam}[true]{\%}}$
- 344 \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

JS クラスとの互換のため disable jfam オプションを定義する。

 $345 \ensuremath{\tt DeclareOption{disablejfam}{\tt let\bxjs@enablejfam=f}}$ 

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せにより、enablejfam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。 [2016-07-13] \ifdraft を定義するのをやめました。

\ifjsDraft draft オプションが指定されているか。

 $\times$  JS クラスの \ifdraft が廃止されたので、BXJS クラスでも \ifdraft を 2.0 版で廃止した。

- $346 \neq f$
- 347 \DeclareOption{draft}{\jsDrafttrue \overfullrule=5pt }
- 348 \DeclareOption{final}{\jsDraftfalse \overfullrule=Opt }

■和文フォントメトリックの選択 このクラスファイルでは、和文 TFM として東京書籍印刷の小林肇さんの作られた JIS フォントメトリック(jis, jisg)を標準で使うことにしますが、従来の min10, goth10 などを使いたいときは mingoth というオプションを指定します。また、winjis オプションで winjis メトリック(OTF パッケージと同じ psitau さん

作;ソースに書かれた Windows の機種依存文字が dvips, dvipdfmx などで出力出来るよう になる)が使えます。

[2018-02-04] winjis オプションはコッソリ削除しました。代替として, 同等なものをパッ ケージ化 (winjis.sty) して、GitHub にはコッソリ置いておきます。

BXJS クラスではここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用 dvips や dviout で用紙設定を自動化するにはオプション papersize を与えます。

BXJS クラスでは geometry パッケージがこの処理を行う。

\ifbxjs@papersize 〔スイッチ〕papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプ ションで無効にできる。

- ※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。
- 349 \newif\ifbxjs@papersize
- 350 \bxjs@papersizetrue
- 351 \DeclareOption{nopapersize}{\bxjs@papersizefalse}
- 352 \DeclareOption{papersize}{\bxjs@papersizetrue}
- ■英語化 オプション english を新設しました。

※\if@english は非ユニークで衝突耐性がない。

- 353 \newif\if@english
- 354 \@englishfalse
- 355 \DeclareOption{english}{\@englishtrue}
- ■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していまし たが、新しくjsreport クラスも作りました。どちらでもお好きな方を使ってください。

BXJS では当初から bxjsreport クラスが用意されている。

■jslogo パッケージの読み込み IATrX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読 み込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおり の動作となります。デフォルトは jslogo で、すなわちパッケージを読み込みます。

BXJS クラスでは、nojslogo を既定とする。

```
356 \newif\if@jslogo \@jslogofalse
357 \DeclareOption{jslogo}{\@jslogotrue}
358 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}
```

#### ■複合設定オプション 湾

TODO: \bxjs@invscale を書く場所を決める。(JS クラスと同じにはできなそう。)

\bxjs@invscale

\bxjs@invscale は T<sub>E</sub>X における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば \bxjs@invscale\dimX{1.3} は \dimX=1.3\dimX の逆の演算を行う。

※局所化の \begingroup ~ \endgroup について、以前は \group ~ \egroup を使っていたが、これだと数式モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

※元の長さが128 pt 以上の場合でも動作するように修正した。

```
359 \mathchardef\bxjs@isc@ll=128
360 \mathchardef\bxjs@isc@sl=259
361 \def\bxjs@isc@sl@h{65539 }
362 \def\bxjs@invscale#1#2{%
     \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax
363
       \ifdim\@tempdima<\bxjs@isc@ll\p@
364
         \@tempcnta\@tempdima \multiply\@tempcnta\@cclvi
365
         \divide\@tempcnta\@tempdimb \multiply\@tempcnta\@cclvi
366
367
         \@tempcnta\@tempdima \divide\@tempcnta\@tempdimb
368
369
         \multiply\@tempcnta\p@ \let\bxjs@isc@sl\bxjs@isc@sl@h
       \fi
370
371
       \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb
       \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@
372
373
       \@tempdimb\@tempcnta\@ne
       \advance\@tempcnta\@tempcntb \advance\@tempcnta\@tempcntb
374
       \advance\@tempcnta\bxjs@isc@sl \@tempdimc\@tempcnta\@ne
375
       \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%
376
         \@tempcntb\@tempdimb \advance\@tempcntb\@tempdimc
377
378
         \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@
         \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima
379
           \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne
380
         \else \@tempdimb=\@tempcntb\@ne \fi}%
381
382
       \xdef\bxjs@gtmpa{\the\@tempdimb}%
     \endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}
383
```

複合設定オプションとは、「エンジンやドライバや和文ドライバの設定を含む、複数の設定を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断される場合に用意される。

pandoc オプションは、Pandoc で IATEX 用の既定テンプレートを用いて他形式から IATEX (および PDF) 形式に変換する用途に最適化した設定を与える。

 $384 \verb|\DeclareOption{pandoc}{{\%}}$ 

和文ドライバを pandoc に、エンジン指定を autodetect-engine に変更する。

※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。

- 385 \g@addto@macro\bxjs@post@option@hook{%
- 386 \bxjs@oldfontcommandstrue
- 387 \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}%
- 388 \let\bxjs@engine@given=\*}%

ドライバオプションを dvi=dvipdfmx 相当に変更する。

※これは実際のドライバ設定で上書きできる(オプション宣言順に注意)。

TODO: できない気がする…。

- 389 \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
- 390 \bxjs@dvi@opttrue}

#### ■エンジン・ドライバオプション 彎

\bxjs@engine@given オプションで明示されたエンジンの種別。

 $391 \, \text{\ensuremath{\mbox{Nlet}\mbox{bxjs@engine@given}\mbox{\ensuremath{\mbox{Qundefined}}}}$ 

\bxjs@engine@opt 明示されたエンジンのオプション名。

392 %\let\bxjs@engine@opt\@undefined

エンジン明示指定のオプションの処理。

- %0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は ...latex に限定する。xetex や pdftex は一般的な IATFX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。
- 393 \DeclareOption{autodetect-engine}{%
- 394 \let\bxjs@engine@given=\*}
- 395 \DeclareOption{latex}{%
- 396 \def\bxjs@engine@opt{latex}%
- 397 \let\bxjs@engine@given=n}
- 398 \DeclareOption{platex}{%
- 399 \def\bxjs@engine@opt{platex}%
- 400 \let\bxjs@engine@given=j}
- 401 \DeclareOption{uplatex}{%
- 402 \def\bxjs@engine@opt{uplatex}%
- 403 \let\bxjs@engine@given=u}
- 404 \DeclareOption{xelatex}{%
- 405 \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%
- 406 \let\bxjs@engine@given=x}
- 407 \DeclareOption{pdflatex}{\%
- 408 \def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
- 409 \let\bxjs@engine@given=p}
- 410 \DeclareOption{lualatex}{%
- 411 \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
- 412 \let\bxjs@engine@given=l}
- $413 \verb|\DeclareOption{platex-ng}{{\sharp}}$
- 414 \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
- 415 \let\bxjs@engine@given=g}

```
416 \DeclareOption{platex-ng*}{%
                  417
                       \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
                        \let\bxjs@platexng@nodrv=t%
                       \let\bxjs@engine@given=g}
                  419
\bxjs@driver@given オプションで明示されたドライバの種別。
                  420 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
                  421 \let\bxjs@driver@@dvimode=0
                  422 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
                  423 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2
                  424 \let\bxjs@driver@@xetex=3
                  425 \let\bxjs@driver@@dvips=4
                  426 \let\bxjs@driver@@none=5
  \bxjs@driver@opt 明示された「ドライバ指定」のオプション名。
                  427 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined
                  428 \DeclareOption{dvips}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvips}
                  431 \DeclareOption{dviout}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                  433
                  434 \DeclareOption{xdvi}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                  436
                  437 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
                  439
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}
                  440 \DeclareOption{nodvidriver}{\%
                        \def\bxjs@driver@opt{nodvidriver}%
                  441
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none}
                  443 \DeclareOption{pdftex}{%
                  444
                        \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                  446 \DeclareOption{luatex}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                  448
                  449 \DeclareOption{xetex}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}
                  451
                     dvipdfmx-if-dvi は互換性のためのオプションで、dvi=dvipdfmx と同値である。
                   ※ 2.0 版より dvipdfmx-if-dvi は非推奨となった。
                  452 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{%
                  453
                       \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                        {The old option 'dvipdfmx-if-dvi' is DEPRECATED\MessageBreak
                  454
                         and may be abolished in future!\MessageBreak
                  455
                         You should write 'dvi=dvipdfmx' instead}%
                  456
                        \setkeys{bxjs}{dvi=dvipdfmx}}
                  457
```

### ■その他の BXJS 独自オプション 彎

**TODO**: 互換用オプションを分離する(2.0版で?)。

\ifbxjs@bigcode

upT<sub>F</sub>X で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」 を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、この ファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、既定を真とした上で、オプションで 指定することとする。

- ※ 2.0 版より、既定値を常に真とする。
- 459 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodetrue

nobigcode / bigcode オプションの定義。

- 460 \DeclareOption{nobigcode}{%
- \bxjs@bigcodefalse}
- 462 \DeclareOption{bigcode}{%
- \bxjs@bigcodetrue}

\ifbxjs@oldfontcommands \allowoldfontcommands を既定で有効にするか。

464 \newif\ifbxjs@oldfontcommands

nooldfontcommands、oldfontcommands オプションの定義。

- ※oldfontcommands オプションの名前は memoir クラスに倣った。ちなみに KOMA-Script では enabledeprecatedfontcommands であるがこれはチョットアレなので避けた。
- $465 \verb|\DeclareOption{nooldfontcommands}{{\%}}$
- \bxjs@oldfontcommandsfalse}
- $467 \verb|\DeclareOption{oldfontcommands}{{\%}}$
- \bxjs@oldfontcommandstrue}

## ■JS クラスのオプションで無効なもの 營 ltjsclasses に倣って警告を出す。

- 469 \DeclareOption{winjis}{%
- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- 471 {This class does not support `winjis' option}%
- 472 }
- 473 \DeclareOption{mingoth}{%
- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- {This class does not support `mingoth' option}% 475
- 476 }
- 477 \DeclareOption{jis}{%
- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- 479 {This class does not support `jis' option}%
- 480 }

#### ■keyval 型のオプション 湾

```
481 \DeclareOption*{%
                             \def\bxjs@next{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}%
                             \expandafter\bxjs@next\expandafter{\CurrentOption}}
                         未知のキーに対してエラー無しで無視する\setkeys。
      \bxjs@safe@setkeys
                         ※ネスト不可。
                        484 \def\bxjs@safe@setkeys#1#2{%
                             \let\bxjs@save@KV@errx\KV@errx \let\KV@errx\@gobble
                             \left\{ 1\right\} 
                        486
                             \let\KV@errx\bxjs@save@KV@errx}
                        \bxjs@declare@enum@option{(オプション名)}{(enum 名)}
\bxjs@declare@enum@option
                           "〈オプション名〉=〈値〉"のオプション指定に対して、\[bxjs@(enum 名)] を \[bxjs@(enum
                         名〉00(値)] に等値する (後者の制御綴が未定義の場合はエラー)、という動作を規定する。
                        488 \@onlypreamble\bxjs@declare@enum@option
                        489 \def\bxjs@declare@enum@option#1#2{%
                             \define@key{bxjs}{#1}{%
                        490
                               \expandafter\ifx\csname bxjs@#2@@##1\endcsname\relax
                        491
                                 \bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                        492
                               \else \bxjs@csletcs{bxjs@#2}{bxjs@#2@@##1}%
                        493
                               fi}
                        494
                         \bxjs@declare@bool@option{\オプション名\}{\スイッチ名\}
\bxjs@declare@bool@option
                           "(オプション名)=(真偽値)"のオプション指定に対して、\if[bxjs@(スイッチ名)]を設定
                         する、という動作を規定する。
                        495 \@onlypreamble\bxjs@declare@bool@option
                        496 \def\bxjs@declare@bool@option#1#2{%
                        497
                             \define@key{bxjs}{#1}[true]{%
                               \expandafter\ifx\csname bxjs@#2##1\endcsname\relax
                        498
                        499
                                 \bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                               \else \@nameuse{bxjs@#2##1}%
                        500
                        501
                               fi}
        \bxjs@set@keyval \bxjs@set@keyval\{\langle key \rangle\}\{\langle value \rangle\}\{\langle error \rangle\}
                           \bxjs@kv@\key\@\value\ が定義済ならそれを実行し、未定義ならエラーを出す。
                        502 \def\bxjs@set@keyval#1#2#3{%}
                             \expandafter\let\expandafter\bxjs@next\csname bxjs@kv@#1@#2\endcsname
                             \ifx\bxjs@next\relax
                        504
                               \bxjs@error@keyval{#1}{#2}%
                        505
                               #3%
                        506
                        507
                             \else \bxjs@next
                             fi
                        509 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
```

その他のオプションは keyval の機構を用いて処理する。

```
510 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
                    \ClassError\bxjs@clsname
               511
                     {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
               512
      \jsScale 〔実数値マクロ〕和文スケール値。
               513 \def\jsScale{0.924715}
\bxjs@base@opt 明示された base オプションの値。
               514 %\let\bxjs@base@opt\@undefined
                  base オプションの処理。
               515 \define@key{bxjs}{base}{%
               516 \edef\bxjs@base@opt{#1}%
                    \bxjs@setbasefontsize{#1}}
               518 \define@key{bxjs}{fontsize}{\setkeys{bxjs}{base=#1}}
\bxjs@jbase@opt 明示された jbase オプションの値。
               519 %\let\bxjs@jbase@opt\@undefined
                  jbase オプションの処理。
               520 \define@key{bxjs}{jbase}{\edef\bxjs@jbase@opt{#1}}
               521 \define@key{bxjs}{jafontsize}{\setkeys{bxjs}{jbase=#1}}
\bxjs@scale@opt 明示された scale オプションの値。
               522 \% \text{let}\ cale@opt\@undefined
                  scale オプションの処理。
               523 \define@key{bxjs}{scale}{%
               524 \edef\bxjs@scale@opt{#1}%
                    \let\jsScale\bxjs@scale@opt}
               526 \end{fine} \begin{tabular}{l} bxjs} {jafontscale} {\tt setkeys} \begin{tabular}{l} bxjs} {scale=\#1} {\tt setkeys} \end{tabular}
                  noscale オプションの処理。
               527 \DeclareOption{noscale}{\setkeys{bxjs}{scale=1}}
\bxjs@param@mag mag オプションの値。
               528 \let\bxjs@param@mag\relax
                  mag オプションの処理。
               529 \define@key{bxjs}{mag}{\edef\bxjs@param@mag{#1}}
                  paper オプションの処理。
               530 \define@key{bxjs}{paper}{\edef\bxjs@param@paper{#1}}
\bxjs@jadriver 和文ドライバの名前。
               531 \let\bxjs@jadriver\relax
               532 %\let\bxjs@jadriver@opt\@undefined
                  ja オプションの処理。
```

※jadriver は 0.9 版で用いられた旧称。

```
※単なる ja という指定は無視される (Pandoc 対策)。
              533 \define@key{bxjs}{jadriver}{\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}}
              534 \define@key{bxjs}{ja}[\relax]{%
                  \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}\fi}
    \jsJaFont 和文フォント設定の名前。
              536 \let\jsJaFont\@empty
                 jafont オプションの処理。
              537 \define@key{bxjs}{jafont}{\edef\jsJaFont{#1}}
   \jsJaParam 和文ドライバパラメタの文字列。
              538 \let\jsJaParam\@empty
                 japaram オプションの処理。
              539 \end{fine@key{bxjs}{japaram}{\end{fine@key{bxjs}{japaram}{}}} \label{fine}
\bxjs@magstyle magstyle 設定値。(古いイマイチな名前。)
              540 \let\bxjs@magstyle@mag=m
              541 \let\bxjs@magstyle@real=r
              542 \det bxjs@magstyle@xreal=x
               (新しい素敵な名前。)
               ※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、\bxjs@magstyle@xreal の方を優先
               させる。
              543 \verb|\let\bxjs@magstyle@usemag\bxjs@magstyle@mag
              544 \verb|\let\bxjs@magstyle@nomag\bxjs@magstyle@real|
              545 \expandafter\let\csname bxjs@magstyle@nomag*\endcsname\bxjs@magstyle@xreal
              \bxjs@magstyle@default は既定の値を表す。
              546 \verb|\let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@usemag|
              547 \ifx 1\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
              549 \fi\fi
              550 \ifjsWithpTeXng
              551 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
              552 \fi
              553 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                magstyle オプションの処理。
              554 \define@key{bxjs}{magstyle}{%
                   \expandafter\let\expandafter\bxjs@magstyle\csname
                   bxjs@magstyle@#1\endcsname
                  \ifx\bxjs@magstyle\relax
              557
              558
                    \ClassError\bxjs@clsname
                     {Invalid value '#1' for option magstyle}\@ehc
              559
              560
                    \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
              561
                  \fi}
```

```
\bxjs@geometry geometry オプションの値。
                562 \let\bxjs@geometry@class=c
                563 \let\bxjs@geometry@user=u
                564 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                   geometry オプションの処理。
                565 \define@key{bxjs}{geometry}{%
                     \expandafter\let\expandafter\bxjs@geometry\csname
                566
                567
                      bxjs@geometry@#1\endcsname
                568
                     \ifx\bxjs@geometry\relax
                       \ClassError\bxjs@clsname
                569
                570
                        {Invalid value '#1' for option geometry}\@ehc
                       \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                571
                572
                     \fi}
\ifbxjs@fancyhdr 〔スイッチ〕fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。
                573 \newif\ifbxjs@fancyhdr \bxjs@fancyhdrtrue
                   fancyhdr オプションの処理。
                574 \let\bxjs@kv@fancyhdr@true\bxjs@fancyhdrtrue
                575 \let\bxjs@kv@fancyhdr@false\bxjs@fancyhdrfalse
                576 \define@key{bxjs}{fancyhdr}[true]{%
                     \bxjs@set@keyval{fancyhdr}{#1}{}}
\ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。
                578 \newif\ifbxjs@dvi@opt
                   DVI モードのドライバとドライバ種別との対応。
                579 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
                580 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvips
                581 \let\bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode
                582 \let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode
                583 \let\bxjs@dvidriver@@nodvidriver=\bxjs@driver@@none
                   dvi オプションの処理。
                584 \define@key{bxjs}{dvi}{%
                     \expandafter\let\expandafter\bxjs@tmpa\csname
                      bxjs@dvidriver@@#1\endcsname
                586
                     \ifx\bxjs@tmpa\relax
                587
                588
                       \ClassError\bxjs@clsname
                        {Invalid value '#1' for option dvi}\@ehc
                589
                590
                     \else
                 \bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
                       \def\bxjs@driver@opt{#1}%
                591
                592
                       \let\bxjs@driver@given\@undefined
                       \bxjs@dvi@opttrue
                593
                594
                     \fi}
```

\ifbxjs@layout@buggyhmargin 〔スイッチ〕bxjsbook の左右マージンがアレか。

```
※layout が v1 の場合はアレになる。
                                                                                              595 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                                                                〔スイッチ〕 abstract 環境を chapterabstract にするか。
ifbxjs@force@chapterabstract
                                                                                                 %bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
                                                                                              596 \newif\ifbxjs@force@chapterabstract
                                                                                              597 % <book > \bx js@force@chapterabstracttrue
                                                                                                       layout オプションの処理。
                                                                                              598 \@namedef{bxjs@kv@layout@v1}{%
                                                                                              599 % <book > \bxjs@layout@buggyhmargintrue
                                                                                              600 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                                                                                              601 }
                                                                                              602 \@namedef{bxjs@kv@layout@v2}{%
                                                                                              603 \ \% \ bxjs@layout@buggyhmarginfalse
                                                                                              604 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
                                                                                              606 \define@key{bxjs}{layout}{%
                                                                                                              \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}
                       \bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。
                                                                                              608 %\let\bxjs@textwidth@limit@opt\@undefined
                                                                                              609 \define@key{bxjs}{textwidth-limit}{%
                                                                                                             \edef\bxjs@textwidth@limit@opt{#1}}
                              \bxjs@textwidth@opt textwidth の指定値。
                                                                                              611 %\let\bxjs@textwidth@opt\@undefined
                                                                                              612 \define@key{bxjs}{textwidth}{\edef\bxjs@textwidth@opt{#1}}
                                                                                              613 \define@key{bxjs}{line_length}{\setkeys{bxjs}{textwidth=#1}}
          \bxjs@number@of@lines@opt number-of-lines の指定値。
                                                                                              614 %\let\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined
                                                                                              615 \define@key{bxjs}{number-of-lines}{\edef\bxjs@number@of@lines@opt{#1}}
                                                                                              616 \end{fine} \end{fine} \hfill $$ \end{fine} \h
                          \bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。パラグラフのマーク。
                                                                                              617 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined
                                                                                              618 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%
                                                                                                           \edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}
                    \ifbxjs@whole@zw@lines 〔スイッチ〕whole-zw-lines の指定値。
                                                                                              620 \newif\ifbxjs@whole@zw@lines \bxjs@whole@zw@linestrue
                                                                                              621 \let\bxjs@kv@wholezwlines@true\bxjs@whole@zw@linestrue
                                                                                              622 \verb|\label{lem:condition}| 1000 
                                                                                              623 \define@key{bxjs}{whole-zw-lines}[true] {\bxjs@set@keyval{wholezwlines}{#1}{}}
                              \ifbxjs@jaspace@cmd 〔スイッチ〕jaspace-cmd の指定値。
                                                                                              624 \newif\ifbxjs@jaspace@cmd \bxjs@jaspace@cmdtrue
                                                                                              625 \let\bxjs@kv@jaspacecmd@true\bxjs@jaspace@cmdtrue
```

```
626 \verb|\label{lem:cond}| bxjs@kv@jaspacecmd@false\bxjs@jaspace@cmdfalse| \\
                                     627 \define@key{bxjs}{jaspace-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
                                     628 \end{\{https://define@key{bxjs}{xkanjiskip-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{\#1}{\}}}}
   \ifbxjs@fix@at@cmd 〔スイッチ〕fix-at-cmd の指定値。
                                     629 \newif\ifbxjs@fix@at@cmd \bxjs@fix@at@cmdtrue
                                     630 \let\bxjs@kv@fixatcmd@true\bxjs@fix@at@cmdtrue
                                     631 \let\bxjs@kv@fixatcmd@false\bxjs@fix@at@cmdfalse
                                     \ifbxjs@hyperref@enc [スイッチ] hyperref-enc の指定値。
                                     633 \newif\ifbxjs@hyperref@enc \bxjs@hyperref@enctrue
                                     634 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@true\bxjs@hyperref@enctrue
                                     635 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@false\bxjs@hyperref@encfalse
                                     636 \define@key{bxjs}{hyperref-enc}[true]{\bxjs@set@keyval{hyperrefenc}{#1}{}}
   \bxjs@everyparhook everyparhook の指定値。
                                     637 \chardef\bxjs@everyparhook@none=0
                                     638 \chardef\bxjs@everyparhook@compat=1
                                     639 \chardef\bxjs@everyparhook@modern=2
                                     640 \if j\jsEngine
                                     641 \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat
                                     642 \else
                                     644\fi
                                     645 \def\bxjs@kv@everyparhook@none{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@none}
                                     646 \def\bxjs@kv@everyparhook@compat{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat}
                                     647 \def\bxjs@kv@everyparhook@modern{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern}
                                     648 \end{fine} \label{lem:condition} $$ \end{fine} \end{fine} \end{fine} $$ \end{fine} $$ \end{fine} $$ \end{fine} $$ \end{fine} \end{fine} $$ \end{fine} 
 \bxjs@label@section label-section の指定値。
                                     649 \chardef\bxjs@label@section@none=0
                                     650 \chardef\bxjs@label@section@compat=1
                                     651 \chardef\bxjs@label@section@modern=2
                                     652 \verb|\label@section\bxjs@label@section@compat| \\
                                     653 \def\bxjs@kv@labelsection@none{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@none}
                                     654 \def\bxjs@kv@labelsection@compat{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@compat}
                                     656 \define@key{bxjs}{label-section}{\bxjs@set@keyval{labelsection}{#1}{}}
            \ifbxjs@usezw 〔スイッチ〕use-zw の指定値。
                                     657 \newif\ifbxjs@usezw \bxjs@usezwtrue
                                     658 \bxjs@declare@bool@option{use-zw}{usezw}
                                     659 \DeclareOption{nozw}{\setkeys{bxjs}{use-zw=false}}
                                     660 \DeclareOption{zw}{\setkeys{bxjs}{use-zw=true}}
 \ifbxjs@disguise@js 〔スイッチ〕disguise-js の指定値。
                                     661 \newif\ifbxjs@disguise@js \bxjs@disguise@jstrue
                                     662 \bxjs@declare@bool@option{disguise-js}{disguise@js}
```

```
663 \DeclareOption{nojs}{\setkeys{bxjs}{disguise-js=false}}
664 \DeclareOption{js}{\setkeys{bxjs}{disguise-js=true}}

\ifbxjs@precisetext [スイッチ] precise-text の指定値。
665 \newif\ifbxjs@precisetext
666 \bxjs@declare@bool@option{precise-text}{precisetext}
667 \DeclareOption{noprecisetext}{\setkeys{bxjs}{precise-text=false}}
668 \DeclareOption{precisetext}{\setkeys{bxjs}{precise-text=true}}

\ifbxjs@simplejasetup [スイッチ] simple-ja-setup の指定値。
669 \newif\ifbxjs@simplejasetup \bxjs@simplejasetuptrue
670 \bxjs@declare@bool@option{simple-ja-setup}{simplejasetup}
671 \DeclareOption{nosimplejasetup}{\setkeys{bxjs}{simple-ja-setup=false}}
```

#### ■オプションの実行

I $\Delta T_{EX}$  の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に { } が含まれると正常に処理ができない。これに対処する為  $\mathbb{C}$ removeelement の実装に少し手を加える (仕様は変わらない)。

672 \DeclareOption{simplejasetup}{\setkeys{bxjs}{simple-ja-setup=true}}

※クラスに \DeclareOption\* がある場合は \@unusedoptions は常に空のままであることを利用している。

```
673 \let\bxjs@org@removeelement\@removeelement
```

674 \def\@removeelement#1#2#3{%

675 \def\reserved@a{#2}%

676 \ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty

677 \else \bxjs@org@removeelement{#1}{#2}{#3}%

678 \fi}

デフォルトのオプションを実行します。multicols や url を  $\RequirePackage$  するのはやめました。

```
679 %<article>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,notitlepage,final}
```

- 680 %<book>\ExecuteOptions{a4paper,twoside,onecolumn,titlepage,openright,final}
- 681 %/ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,titlepage,openany,final}
- 682 %<slide>\ExecuteOptions{36pt,a4paper,landscape,oneside,onecolumn,titlepage,final}
- 683 \ProcessOptions\relax
- 684 \bxjs@post@option@hook

後処理

 $685 \footnote{1}{1}$ 

 $\label{lem:color:maybeblue} $$ \end{maybeblue} \ \end{maybeblue} $$ \end{maybeblue} $$$ 

687\fi

688 \if@landscape

690 \setlength\paperheight{\paperwidth}

691 \setlength\paperwidth {\@tempdima} 692 \fi

#### ■グローバルオプションの整理 灣

グローバルオプションのトークン列に { } が含まれていると、やはり後のパッケージの読込処理で不具合を起こすようである(\ProcessOptions\* がエラーになる)。従って、このようなオプションは除外することにする。

```
693 \def\bxjs@tmpdo{%
    \def\bxjs@tmpa{\@gobble}%
    \expandafter\bxjs@tmpdo@a\@classoptionslist,\@nil,%
    \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa}
697 \def\bxjs@tmpdo@a#1,{%
    \ifx\@nil#1\relax\else
698
      \bxjs@tmpdo@b#1{}\@nil
      700
701
      \expandafter\bxjs@tmpdo@a
702
    \fi}
703 \def\bxjs@tmpdo@b#1#{\bxjs@tmpdo@c}
704 \def\bxjs@tmpdo@c#1\@nil{%
   \ifx\@nil#1\@nil \@tempswatrue \else \@tempswafalse \fi}
706 \bxjs@tmpdo
```

papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性があるため、グローバルオプションから外す。

707 \@expandtwoargs\@removeelement

708 {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist

709 \@expandtwoargs\@removeelement

710 {10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist

711 \@expandtwoargs\@removeelement

712 {noscale}\@classoptionslist\@classoptionslist

■使用エンジンの検査・自動判定 ユーザが uplatex オプションの有無により指定したエンジンが、実際に使われているものと一致しているかを検査し、一致しない場合はエラーメッセージを表示します。

[2016-11-09] pIATeX/ upIATeX を自動判別するオプション autodetect-engine を新設しました。upIATeX の場合は,グローバルオプションに uplatex を追加することで,自動判定に応じて otf パッケージにも uplatex オプションが渡るようにします。

ここのコードを削除。

[2016-11-11] pLATEX の場合は、オプション uplatex が指定されていれば必ずエラーを出します。autodetect-engine が有効になっていてもエラーを出しますが、これは otf パッケージにuplatex オプションが渡ってしまうのを防ぐためです。

```
714 \let\bxjs@jadriver\bxjs@jadriver@opt
715 \fi
  エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するか
を検査する。
716 \let\bxjs@tmpb\jsEngine
717 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng
   \let\bxjs@tmpb=g
719 \fi\fi
720 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX
721 \let\bxjs@tmpb=u
722 \fi\fi
723 \ifx p\bxjs@tmpb\ifjsInPdfMode\else
724 \let\bxjs@tmpb=n
725 \fi\fi
(この時点で \bxjs@tmpb は \bxjs@engine@given と同じ規則で分類したコードをもって
いる。)
726 \ifx *\bxjs@engine@given
727 \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb
エンジン指定が autodetect-engine であり、かつ実際のエンジンが (u)pLATpX だった場
合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。
   \ifx j\bxjs@engine@given
729
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,platex}
   \else\ifx u\bxjs@engine@given
730
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
731
732 \fi\fi
733 \fi
734 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else
    \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else
736
      \ClassError\bxjs@clsname
737
       {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc
738 \fi
739 \fi
  エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに uplatex を追加する。
740 \ifjsWithpTeXng
741 \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
742 \fi
■ドライバ指定 響 ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合
するかを検査する。
743 \@tempswatrue
744 \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
745 \ifjsInPdfMode
```

正規化前の和文ドライバの値を \bxjs@jadriver に設定する。

713 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else

```
\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
746
747
        \@tempswafalse
748
       \fi
     \else\ifx x\jsEngine
749
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else
750
        \@tempswafalse
751
      \fi
752
753
     \else
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
754
        \@tempswafalse
755
       \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
756
        \@tempswafalse
757
      fi\fi
758
       \verb|\ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@dvipdfmx\else| \\
759
760
        \@tempswafalse
761
      \fi\fi
    \fi\fi
762
763 \fi
764 \if@tempswa\else
    \ClassError\bxjs@clsname
766
      {Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
767\fi
  DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。
768 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
769 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
770 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
771 \else \@tempswatrue
772 fi\fi\fi
773 \if@tempswa
 ドライバオプションがない場合は警告を出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする (0.3 版との互換性のため)。
    \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else
775
      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
      {No driver option is given}
776
    \fi\fi
dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオ
 プションに XXX を追加する。)
    \ifbxjs@dvi@opt
778
779
      \edef\bxjs@next{%
780
        \let\noexpand\bxjs@driver@given
781
         \csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
        \noexpand\g@addto@macro\noexpand\@classoptionslist
782
          {,\bxjs@driver@opt}%
783
784
      }\bxjs@next
    \fi
785
786 \fi
```

エンジンが  $pT_EX$ -ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、エンジンオプションが platex-ng\* (\*付) の場合、および既に dvipdfmx が指定されている場合を除く。

\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx

787 \ifjsWithpTeXng

```
\let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
    \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
790
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
791
   \fi\fi
792
793 \fi
   ドライバが nodvidriver であった場合の処理。DVI ウェア依存の処理を全て無効化する。
794 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none
795 \bxjs@papersizefalse
796 \fi
■その他の BXJS 特有の後処理 營 \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は
minimal に変える。ただしエンジンが (u)pTFX である場合は standard に変える。
※ (u)pT<sub>F</sub>X 以外で ja を省略するのは 2.0 版より非推奨となった。
797 \def\bxjs@@minimal{minimal}
798 \ifx\bxjs@jadriver\relax
799
    \ifx j\jsEngine
      \def\bxjs@jadriver{standard}
800
801
    \else
      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
802
       {The option 'ja' is MISSING!!\MessageBreak
803
        So 'ja=minimal' is assumed as fallback, but\MessageBreak
804
        such implicit setting is now DEPRECATED!\MessageBreak
805
        You should write 'ja=minimal' explicitly,\MessageBreak
806
807
        if it is intended}
      \let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal
808
    \fi
809
810 \fi
  エンジンオプションがない場合はエラーを出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする。
811 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else
    \ifx\bxjs@engine@given\@undefined
812
813
      \ClassError\bxjs@clsname
       814
815
       {When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak
        engine option.\MessageBreak\@ehc}
817 \fi\fi
```

新しい  $LuaT_{EX}$  (0.87 版以降) では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されていた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag\* であり、エラーの場合は既定値に置き換えられる。)

818 \ifx\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@mag\else

```
819
             \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
         820
               \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
         821
               \ClassError\bxjs@clsname
                {The engine does not support 'magstyle=usemag'}%
         822
                {LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak
         823
                 The default value 'nomag*' is used instead.\MessageBreak \Oehc}
         824
             \fi
         825
         826 \fi
           base、jbase、scale の値を用いて和文スケール値を解決する。
          ※\bxjs@param@basefontsize と \jsScale へのオプション値の反映は既に実施されてい
          ることに注意。jbase 非指定の場合はこのままでよい。
         827 \ifx\bxjs@jbase@opt\@undefined\else
         828 \ifx\bxjs@base@opt\@undefined
         jbase 指定済で base 未指定の場合は、\jsScale の値を採用して和文基底サイズを決定
          する。
               \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@jbase@opt}%
         829
               \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
         830
               \bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}%
         831
         832
             \else
         jbase と base がともに指定済の場合は、それらの値から和文スケール値を決定する。
               \ifx\bxjs@scale@opt\@undefined\else
         833
         834
                 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
         835
                  {Redundant 'scale' option is ignored}%
         836
               \fi
               \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@jbase@opt}%
         837
               \@tempdimb=\bxjs@param@basefontsize\relax
         838
               \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdimb}%
         839
               \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
         840
               \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdima}%
         841
         842
             \fi
         843 \fi
\Cjascale 和文クラス共通仕様(※ただし ZR 氏提唱)における、和文スケール値の変数。
         844 \let\Cjascale\jsScale
```

8bit 欧文  $T_{EX}$  の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を通用させるため。)

```
845 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
846 \@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100
847 \catcode\@tempcnta\active
848 \advance\@tempcnta\@ne
849 \repeat
850 \fi
```

js オプション指定時は、jsarticle (または jsbook) クラスを読込済のように振舞う。 ※「2 つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に 異常ではない。

- 851 \ifbxjs@disguise@js
- 852 % <book | report > \def \bx js@js@clsname{jsbook}
- 853 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}
- $\label{lem:cls} $$854 $$ \end{figure} $$ \en$

855 \fi

color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。

856 \g@addto@macro\@classoptionslist{,nosetpagesize}

oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。

- 857 \ifbxjs@oldfontcommands
- 858 \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}

859 \fi

■papersize スペシャルの出力 dvi ファイルの先頭に dvips の papersize special を書き込むことで、出力用紙サイズを設定します。これは dvipdfmx や最近の dviout にも有効です。 どうやら papersize special には true 付の単位は許されず、かつ単位は常に true なものと扱われるようです。そこで、後で出てくる(☆)の部分、「\mag にあわせてスケール」よりも手前で実行しておくことになります。

トンボの付いたときの用紙サイズは無意味ですが、いわゆる「ノビ」サイズという縦横 1 インチずつ長い用紙に出力することを考えて、1 インチずつ加えました。ところが pIPTEX  $2\varepsilon$  はトンボ出力幅を両側に 1 インチとっていますので、1 dvips 使用時に

-0 -0.5in, -0.5in

というオプションを与えて両側 0.5 インチのトンボにするといいでしょう。

[2003-05-17] トンボをプレビューに使うことを考えて1インチを2インチにしました。

[2016-07-11] memoir クラスのマニュアルによると、トンボを含めた用紙の寸法は \stockwidth、\stockheight と呼ぶようですので、これを使うことにしました。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth, \stockheight を定義するようにしました。

[2020-10-04] LATEX  $2\varepsilon$  2020-10-01 でカーネルの \shipout コードが拡張され \AtBeginDvi の実行タイミングが変化したので、この時点で発行する \special の中身を展開しておくようにしました。こうしないと、用紙サイズ設定を間違ってしまいます (Issue #72)。

BXJS では出力用紙サイズ記録は geometry パッケージが行う。

また、JS クラスと異なり、\stockwidth、\stockheight は常に定義される。

- 860 \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- 861 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup
- 862 \expandafter\ifx\csname iftombow\expandafter\endcsname\csname iftrue\endcsname
- 863 % \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- \setlength{\stockwidth}{\paperwidth}
- \setlength{\stockheight}{\paperheight} 865
- \advance \stockwidth 2in 866
- \advance \stockheight 2in
- 868 \fi

#### ■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

- 869 %<slide>\def\n@baseline{13}%
- 870 %<!slide>\ifdim\bxjs@param@basefontsize<10pt \def\n@baseline{15}%
- 871 %<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi

#### ■拡大率の設定

\bxjs@magstyle の値に応じてスイッチ jsc@mag と jsc@mag@xreal を設定する。

- 872 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
- 873 \jsc@magtrue
- 874 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal
- 875 \jsc@mag@xrealtrue
- 876 \fi\fi

サイズの変更は TrX のプリミティブ \mag を使って行います。9 ポイントについては行送 りも若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていた ところを \inv@mag in に直しましたので、geometry パッケージと共存できると思います。 なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

設定すべき \mag 値を (基底サイズ)/(10 pt) × 1000 と算出。BXJS クラスでは、\mag を 直接指定したい場合は、geometry 側ではなくクラスのオプションで行うものとする。

- 877 \ifx\bxjs@param@mag\relax
- 878 \@tempdima=\bxjs@param@basefontsize
- \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25 879
- 880 \divide\@tempdima16384\relax \@tempcnta\@tempdima\relax
- $\verb|\def|\bxjs@param@mag{\the}|\def|\def|$ 881
- 882 \else
- 883 % mag 値が直接指定された場合
- 884 \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@param@mag}

```
\ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
885
886% 有効な mag 値の範囲は 1--32768
     \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
     \advance\@tempcnta100000
888
     \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4#5\@nil{\@tempdima=#2#3#4.#5\p@}
889
     \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
     \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}
891
892 \fi
893 \@tempcnta\bxjs@param@mag \advance\@tempcnta100000
894 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4\@nil{\@tempdima=#2#3.#4\p@}
895 \ensuremath{\tt NS}\ \text{$0.11}
896 \edge{\tt trip@pt\dtempdima}
897 \let\jsBaseFontSize\bxjs@param@basefontsize
```

[2016-07-08] \jsc@mpt および \jsc@mmm に、それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

\mag する場合 (現状はこれが既定) にコードの変更を低減するために、以下では必要に応じて、\jsc@mpt を \p0? と書く。その上で、\mag する場合は?を無視して \p0 と解釈させ、\mag しない場合は?を英字扱いにして \p0? という制御綴を\jsc@mpt と同値にする。※ (多分 2.0 版あたりで) JS クラスに合わせるため \p0? 表記を止める予定。

```
898 \newdimen\jsc@mpt
899 \newdimen\jsc@mmm
900 \ifjsc@mag
901
    \jsc@mmm=1mm
    \catcode`\?=9 % \p@? read as \p@
903
904 \else
     \jsc@mpt=\jsc@magscale\p@
905
906
    \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
907
    \catcode`\?=11 \let\p@?\jsc@mpt
908 \fi
909 \chardef\bxjs@qmcc=\catcode`\?\relax
910 \g@addto@macro\bxjs@pre@jadriver@hook{\catcode`\?=12\relax}
```

ここで  $pT_EX$  の zw に相当する単位として用いる長さ変数  $\setminus jsZw$  を作成する。約束により、これは  $\setminus jsScale \times ($ 指定フォントサイズ) に等しい。

nozw 非指定時は \zw を \jsZw と同義にする。

```
911 \newdimen\jsZw

912 \jsZw=10\jsc@mpt \jsZw=\jsScale\jsZw

913 \ifbxjs@usezw

914 \providecommand*\zw{\jsZw}

915 \fi
```

\zwspace 全角幅の水平空き。

916 \def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}

```
917 \ifjsc@mag@xreal
     \RequirePackage{type1cm}
918
     \let\jsc@invscale\bxjs@invscale
 ムニャムニャムニャ……。
920
     \ifbxjs@TUenc
       \verb|\color= TU/lmr/m/n/10\endcsname\relax| \\
921
922
       \verb|\expandafter\expandafter\expandafter \ext{$$\csname OT1/cmr/m/n/10\endcsname\relax}|
923
924
     \verb|\expandafter\leq OMX/cmex/m/n/10\endcsname=\end{|} relax
925
     \let\jsc@get@external@font\get@external@font
926
     \def\get@external@font{%
927
       \jsc@preadjust@extract@font
928
       \jsc@get@external@font}
929
     \def\jsc@fstrunc#1{%
930
931
       \edef\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%
       \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.****\@nil}
932
933
     \def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@nil{%
       \fint 15*\else
934
935
         \edef\jsc@tmpa{#1%
         \finum#2#3>\z@ .#2\ifnum#3>\z@ #3\fi\fi}%
936
       \fi}
937
     \def\jsc@preadjust@extract@font{%
938
       \let\jsc@req@size\f@size
939
       \dimen@\f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
940
       \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
941
       \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
942
       \let\f@size\jsc@ref@size}
944
     \def\execute@size@function#1{%
       \let\jsc@cref@size\f@size
945
946
       \let\f@size\jsc@req@size
       \csname s@fct@#1\endcsname}
947
     \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
948
     \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
       \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
950
       \edef\jsc@tmpa{{#1}{#2}{#3}{#4}{\strip@pt\@tempdimc}}
951
       \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
952
953
     \def\gen@sfcnt{%
       \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
954
       \empty@sfcnt}
955
     \def\genb@sfcnt{%
956
957
       \edef\mandatory@arg{%
         958
       \empty@sfcnt}
959
     \ifbxjs@TUenc\else
960
```

そして、magstyle が nomag\* の場合は、NFSS にパッチを当てる。

\DeclareErrorFont{OT1}{cmr}{m}{n}{10}

961

962 \fi 963 \fi

[2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている \smallskip の, 単位 pt を \jsc@mpt に置き換えた \jsc@smallskip を定義します。これは \maketitle で用いられます。\jsc@medskip と \jsc@bigskip は必要ないのでコメントアウトしています。

\jsc@smallskip

 $\verb|\jsc@medskip| 964 \\ \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}|$ 

 $\verb|\jsc@bigskip| 965 \% \end{|} $$ $$ \end{|} $$ $$ \end{|} $$ is $$ \end{|} $$ \end{|} $$ \end{|} $$ is $$ \end{|} $$ \e$ 

966  $\def \jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}$ 

\jsc@smallskipamount

\jsc@medskipamount 967 \newskip\jsc@smallskipamount

\jsc@bigskipamount

- 968 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt
- 969 %\newskip\jsc@medskipamount
- 970 %\jsc@medskipamount =6\jsc@mpt plus 2\jsc@mpt minus 2\jsc@mpt
- 971 %\newskip\jsc@bigskipamount
- 972 %\jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt

\paperwidth, \paperheight を\mag にあわせてスケールしておきます (☆)。 [2016-07-11] 新しく追加した\stockwidth, \stockheight も\mag にあわせてスケールします。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth,\stockheight が定義されています。

■pagesize スペシャルの出力 [2003-05-17] dvipdfm(x) の pagesize スペシャルを出力します。

[2004-08-08] 今の dvipdfmx は dvips 用スペシャルを理解するようなので外しました。

- $973 \% \setminus ifpapersize$
- 974 % \setlength{\@tempdima}{\paperwidth}
- 975 % \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}
- 976 % \iftombow
- 977 % \advance \@tempdima 2truein
- 978 % \advance \@tempdimb 2truein
- 979 % \fi
- 980 % \AtBeginDvi{\special{pdf: pagesize width \the\@tempdima\space height \the\@tempdimb}}
- 981 % \fi

# 3 和文フォントの変更

和文フォントの設定は和文ドライバの管轄。

\@ 欧文といえば、IATFX の \def\@{\spacefactor\@m} という定義 (\@m は 1000) では

I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

[2016-07-14] 2015-01-01 の I $\Delta$ TeX で、auxiliary files に書き出されたときにスペースが食われないようにする修正が入りました。これに合わせて {} を補いました。

# BXJS クラスでの変更点:

- fix-at-cmd オプションが偽の場合は再定義しない。
- 固定の 3000 でなく実際のピリオドの sfcode 値を使う。
- 「防御的な \@」での不具合を防ぐため、大文字直後の \@ は標準と同等の動作にする。

```
982 \chardef\bxjs@periodchar=`\.
```

- 984 \ifnum\spacefactor<\@m \spacefactor\@m
- 985 \else \spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar
- 986 \fi}
- 987 \ifbxjs@fix@at@cmd
- 988  $\def\0{\bxjs0SE{}}$
- 989 \fi

# 4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など)の実際の挙動の設定は、三つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って、たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い, 行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では 10 と同義の  $IAT_{EX}$  の内部命令 C を使っています。この C の類は次のものがあり、C 本体で定義されています。

\@vpt	5	\@vipt	6	\@viipt	7
\@viiipt	8	\@ixpt	9	\@xpt	10
\@xipt	10.95	\@xiipt	12	\@xivpt	14.4

ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して、段落の字下げ \parindent, 和文文字間のスペース \kanjiskip, 和文・欧文間のスペース \xkanjiskip を変更しています。

\kanjiskip は pIATeX  $2\varepsilon$  で Opt plus .4pt minus .5pt に設定していますが,これは そもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに,プラスになったりマイナスになったりするのは,追い出しと追い込みの混在が生じ,統一性を欠きます。なるべく追

<sup>983 \</sup>bxjs@protected\def\bxjs@SE{%

い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが, ごくわずかなマイナスは許すことにしました。

\xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あるいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けても空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅(1zw)に直します。 [2008-02-18] english オプションで \parindent を 1em にしました。

\set@fontsize \fontsize 命令(\large 等でなく)でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行されるように、\@setfontsize ではなく \set@fontsize に対してパッチを当てるように変更。

```
990 \def\bxjs@tmpa{\def\set@fontsize##1##2##3}
```

991 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%

992 \set@fontsize{#1}{#2}{#3}%

993 % 末尾にコードを追加

994 \expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{\%}

995 \size@update

996 \jsFontSizeChanged}%

997 }

\jsFontSizeChanged フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。\jsZw を再設定している。その後でユーザ定義用のフック \jsResetDimen を実行する。

998 \newcommand\*\jsFontSizeChanged{%

999 \jsZw=\f@size\p@

1000 \jsZw=\jsScale \jsZw

1001 \ifdim\parindent>\z@

1002 \if@english \parindent=1em

1003 \else \parindent=1\jsZw

1004 \fi

 $1005 \fi\relax$ 

1006 \jsResetDimen}

\jsResetDimen ユーザ定義用のフック。

1007 \newcommand\*\jsResetDimen{}

\jsc@setfontsize クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した \jsc@setfontsize を\@setfontsize の 変わりに用いることにします。

 $1008 \fightharpoonup 1008 \f$ 

1010 **\else** 

1011 \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%

1012 \@setfontsize#1{#2\jsc@mpt}{#3\jsc@mpt}}

1013 % microtype 対策

1014 \ifjsWitheTeX\if j\jsEngine\else

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、\emergencystretchに訴えます。

これはフォントサイズ非依存なので \Cwd で書くのが適当だが、\Cwd はまだ定義されていない。

#### 1022 \emergencystretch 3\jsZw

#### \ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

# \narrowbaselines \widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対して、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。 TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

別行立て数式に入るときに \narrowbaselines が呼ばれるが、このコードでは「数式中で \normalsize などのサイズ命令(\@currsize の実体)が呼ばれた」ことになり警告が出る。JS クラスでは、\@setfontsize 中の \@nomath 実行を消して「そもそもサイズ命令で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないので、BXJS クラスの実装では、\narrowbaselines の時だけ警告が出ないようにする。

```
1023 \newif\ifnarrowbaselines
```

 $1024 \if@english$ 

 $1025 \quad \verb|\narrowbaselinestrue|$ 

1026 **\fi** 

 $1027 \ensuremath{\mbox{\sc lines}}\xspace \ens$ 

 $1028 \quad \verb|\narrowbaselinestrue|$ 

 $1029 \quad \verb|\skip0=\abovedisplayskip|$ 

1030 \skip2=\abovedisplayshortskip

 $1031 \quad \verb"\skip4=\belowdisplayskip"$ 

 $1032 \quad \verb|\skip6=\belowdisplayshortskip| \\$ 

1033 % 一時的に警告を無効化する

1034 \let\bxjs@save@nomath\@nomath

1035 \let\@nomath\@gobble

1036 \@currsize\selectfont

1037 \let\@nomath\bxjs@save@nomath

1038 \abovedisplayskip=\skip0

- 1039 \abovedisplayshortskip=\skip2
- 1040 \belowdisplayskip=\skip4
- \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
- 1042 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}

microtype パッケージを読み込んだ場合、\normalsize 等のフォントサイズ変更命令の 定義の中に if 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは microtype が邪悪 なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

1043 \def\bxjs@if@narrowbaselines{%

- \ifnarrowbaselines\expandafter\@firstoftwo
- \else \expandafter\@secondoftwo 1045
- 1046 \fi
- 1047 }

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アス キーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが,ここでは 16 ポイントにしま した。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント (アスキーのものの 0.961 倍) である こともあり、行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際、 $16/9.25 \approx 1.73$  であり、和 文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75)に近づきました。

microtype 対策のため if 文を避ける。

1048 \renewcommand{\normalsize}{%

- \bxjs@if@narrowbaselines{% 1049
- 1050 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt
- }{%else 1051
- \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}%
- 1053 }%

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip), 数式の下のアキ (\belowdisplayshortskip) の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T<sub>F</sub>X Q&A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調 節してみることにしました。

- \abovedisplayskip 11\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@? 1055
- \belowdisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

最後に, リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を, \@listi にコピーしてお きます。\@listI の設定は後で出てきます。

#### 1058 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

1059 %</class>

1060 %<\*class|minijs>

1061 %% initialize

1062 \normalsize

1063 %</class|minijs>

1064 %<\*class>

\Cdp ラメータに実際の値を設定します。たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅 (1zw) です。

\Cwd [2017-08-31] 基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1) から「漢」(JIS コー

\Cvs ド 0x3441) へ変更しました。

 $\Chs$ 

\Cwd 等の変数は pTpX 系以外では未定義なのでここで定義する。

1065 \ifx\Cht\@undefined \newdimen\Cht \fi

1066 \ifx\Cdp\@undefined \newdimen\Cdp \fi

1067 \ifx\Cwd\@undefined \newdimen\Cwd \fi

1068 \ifx\Cvs\@undefined \newdimen\Cvs \fi

1069 \ifx\Chs\@undefined \newdimen\Chs \fi

規約上、現在の \jsZw の値が \Cwd である。BXJS では \Cht と \Cdp は単純に \Cwd の 88% と 12% の値とする。

 $1070 \verb|\cht{0.88\jsZw}|$ 

 $1071 \setlength\Cdp{0.12\jsZw}$ 

1072 \setlength\Cwd{1\jsZw}

 $1073 \stlength\Cvs{\baselineskip}$ 

 $1074 \stlength\Chs{1\jsZw}$ 

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば  $16 \times 0.9 = 14.4$  ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ  $4 \pm 2$ , $2 \pm 1$  ポイントでしたが,ここではゼロ(\z0)にしました。

microtype 対策のため if 文を避ける。後の \footnotesize も同様。

```
1075 \newcommand{\small}{%
```

1076 \bxjs@if@narrowbaselines{%

1077 %<!kiyou> \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%

1078 % kiyou> \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%

1079 }{%else

1080 %<!kiyou> \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%

1081 %<kiyou> \jsc@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%

1082 }%

1083 \abovedisplayskip 9\p@? \@plus3\p@? \@minus4\p@?

```
\abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
                        1084
                        1085
                                    \belowdisplayskip \abovedisplayskip
                                    \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
                                    \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                        1087
                         1088
                                                           \topsep \z@
                         1089
                                                           \parsep \z@
                         1090
                                                           \itemsep \parsep}}
\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は,元はそれぞれ3\pm 1,2\pm 1 ポイン
                             トでしたが、ここではゼロ(\z0)にしました。
                        1091 \newcommand{\footnotesize}{%
                        1092 \bxjs@if@narrowbaselines{%
                        1093 %<!kiyou>
                                                        \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
                        1094 %<kiyou>
                                                       \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
                        1095 }{%else
                         1096 %<!kiyou>
                                                        \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
                        1097 %<kiyou>
                                                       \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
                        1098
                                   ጉ%
                                    \abovedisplayskip 6\p0? \@plus2\p0? \@minus3\p0?
                        1099
                                    \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
                        1100
                                    \belowdisplayskip \abovedisplayskip
                        1101
                                    \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
                        1102
                                    \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                        1103
                        1104
                                                          \topsep \z@
                                                           \parsep \z@
                        1105
                        1106
                                                           \itemsep \parsep}}
                         それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
   \scriptsize
                           ます。特に注意すべきは \large で、これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い、
                           行送りを \normalsize と同じにすることによって, 節見出しが複数行にわたっても段間で
            \large
                           行が揃うようにします。
            \Large
                               [2004-11-03] \HUGE を追加。
            \LARGE
              \label{local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_loc
                        1108 \newcommand{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
               \Huge _{1109} \if@twocolumn
               \HUGE 1110 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
                        1111 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large{11.111}{\n@baseline}}
                        1112 \else
                        1113 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{17}}
                        1114 % kiyou \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large{11.111}{17}}
                        1115 \fi
                        1116 %<!kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
                        1117 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large{12.222}{21}}
                        1118 \verb|\newcommand{\LARGE}{\jsc@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}|
                        1119 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
                        1120 \newcommand{\Huge}{\jsc@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
                         1121 \newcommand{\HUGE}{\jsc0setfontsize\HUGE{30}{40}}
```

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは, 行列や 場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送り が変わるような大きいものを使わず、行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがい いでしょう。

1122 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく、\headfont という命令で定めること にします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが, 通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。『pIstTeX 2arepsilon 美文書作 成入門』(1997年)では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが, \fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

- 1123 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}
- 1124 \newcommand{\headfont}{\sffamily}
- 1125 % \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}

# 5 レイアウト

#### ■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが, 2zw にしました。 \columnseprule このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

- 1126 %<!kiyou>\setlength\columnsep{2\Cwd}
- 1127 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}
- 1128 \setlength\columnseprule{\z0}

# ■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら, \lineskip より近づかないようにし \normallineskip ます。元は Opt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

 $\verb|\lineskiplimit| 1129 \verb|\lineskip{1 ineskip{1 ineskip$ 

\normallineskiplimit 1130 \setlength\normallineskip{1\jsc@mpt}

1131 \setlength\lineskiplimit{1\jsc@mpt}

1132 \setlength\normallineskiplimit{1\jsc@mpt}

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

#### \renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の2倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行 送りの伸縮はしないのが一般的です。

1133 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが,ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

1134 \setlength\parskip{\z0}

 $1135 \setminus if@slide$ 

1136 \setlength\parindent{0\p0}

1137 \else

1138 \setlength\parindent{1\Cwd}

1139 \fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう \@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

\@highpenalty 1140 \@lowpenalty 51

1141 \@medpenalty 151

1142 \@highpenalty 301

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

1143 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。

1144 % \brokenpenalty 100

# 5.1 ページレイアウト

BXJS ではページレイアウトの処理は geometry パッケージが担当している。

# ■準備 🏖

\bxjs@bd@pre@geometry@hook begin-document フックのコード内で、geometry パッケージが挿入するコードの直前で実行されるフック。

1145 \@onlypreamble\bxjs@bd@pre@geometry@hook

1146 \let\bxjs@bd@pre@geometry@hook\@empty

現状ではここで \mag を設定している。

\topskip も指定する。

1147 \ifjsc@mag

1148 \mag=\bxjs@param@mag

1149 **\fi** 

1150 \setlength{\topskip}{10\p@?}

\jsSetQHLength のための和文単位の定義。

 $1151 \ensurement{$1151 \ensurement{$151 \ensurement{$151 \ensurement{$151$ \ensure$ 

1152 \def\bxjs@unit@zw{\jsZw}\let\bxjs@unit@zh\bxjs@unit@zw

```
\bxjs@param@paper が長さ指定({W}{H})の場合、geometry の形式(papersize={W,H})
                  に変換する。
                 1153 \def\bxjs@tmpdo{\futurelet\bxjs@tmpa\bxjs@tmpdo@a}
                 1154 \def\bxjs@tmpdo@a{%
                      \ifx\bxjs@tmpa\bgroup \expandafter\bxjs@tmpdo@b
                      \else \expandafter\bxjs@tmpdo@c \fi}
                 1157 \def\bxjs@tmpdo@b#1#2#3\@nil{\edef\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}}
                 1158 \def\bxjs@tmpdo@c#1\@nil{\bxjs@tmpdo@d#1,,\@nil}
                 1159 \def\bxjs@tmpdo@d#1,#2,#3\@nil{%
                      \ifx\@nil\ale \edef\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}\fi}
                 \bxjs@layout@paper geometry の用紙設定のオプション。
                 1162 \edef\bxjs@layout@paper{%
                      \ifjsc@mag truedimen,\fi
                 1164
                      \if@landscape landscape,\fi
                 1165
                      \bxjs@param@paper}
     \bxjs@layout geometry のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。
                 1166 %<*article|report>
                 1167 \def\bxjs@layout@base{%
                      headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
                 1169
                      headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
                 1170 }
                 1171 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                 1172 hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
                      vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                 1174 }
                 1175 %</article|report>
                 1176 %<*book>
                 1177 \def\bxjs@layout@base{%
                      headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                 1179 }
                 1180 \ifbxjs@layout@buggyhmargin
                 1181 % アレ
                 1182 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                     hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
                      vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                 1184
                 1185 }
                 1186 \else
                                                   %---
                 1187% 非アレ
                 1188 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                 1189
                      hmargin=18\jsc@mmm,%
                      vscale=0.83, vmarginratio=1:1,%
                 1190
                 1191 }
                 1192 \fi
                                                   %---
                 1193 %</book>
                 1194 %<*slide>
                 1195 \def\bxjs@layout@base{%
```

```
1197 }
                   1198 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                         hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
                         vscale=0.944, vmarginratio=1:1,%
                   1200
                   1201 }
                   1202 %</slide>
                       textwidth オプションの設定を反映する。
                   1203 %<*!book>
                   1204 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else
                         \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}
                         \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout width=\the\@tempdima,}
                   1206
                   1207 \fi
                   1208 %</!book>
                   1209 \ifx\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined\else
                         \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@number@of@lines@opt}
                   1211 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout lines=\the\@tempcnta,}
                   1212 \fi
          \fullwidth 〔寸法レジスタ〕ヘッダ・フッタ領域の横幅。
                   1213 \newdimen\fullwidth
\bxjs@textwidth@limit 〔寸法値マクロ〕bxjsbook における、\textwidth 上限の値。
   \jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕\bxjs@textwidth@limit の全角(\Cwd)単位での値。
                   1214 %<*book>
                   1215 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}
                   1216 \@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd
                   1217 \ifx\bxjs@textwidth@limit@opt\@undefined\else
                        \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@textwidth@limit@opt}
                   1219
                        \@tempdima=\@tempcnta\Cwd
                   1220 \fi
                   1221 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else
                   1222 \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}
                   1223 \fi
                   1224 \edef\bxjs@textwidth@limit{\the\@tempdima}
                   1225 \ifdim\@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd\else
                         \bxjs@invscale\@tempdima{\strip@pt\Cwd}
                         \long\edef\jsTextWidthLimit{\strip@pt\@tempdima}
                   1228 \fi
                   1229 %</book>
\bxjs@preproc@layout geometry の前処理。
                       geometry は \topskip が標準の行高(\ht\strutbox) より小さくならないようにする
                     自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避(無効化)して
                     いる。
                   1230 \def\bxjs@preproc@layout{%
                   1231 \edef\bxjs@save@ht@strutbox{\the\ht\strutbox}\ht\strutbox=10\jsc@mpt}
```

1196

noheadfoot,%

# \bxjs@postproc@layout geometry の後処理。

1232 \def\bxjs@postproc@layout{%

geometry のドライバを再設定する。

- 1233 \ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else
- 1234 \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver
- 1235 \fi

\ht\strutbox の値を元に戻す。

1236 \ht\strutbox=\bxjs@save@ht@strutbox\relax

\textwidth の値を補正する。

- 1237 \ifbxjs@whole@zw@lines
- 1238 \@tempdimb=\textwidth
- 1239 \if@twocolumn \@tempdima=2\Cwd \else \@tempdima=1\Cwd \fi
- 1240 \advance\textwidth.005pt\relax
- 1241 \divide\textwidth\@tempdima \multiply\textwidth\@tempdima
- 1242 \advance\@tempdimb-\textwidth
- 1243 \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb
- 1244 \advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb
- 1245 \fi
- 1246 \fullwidth=\textwidth

bxjsbook の場合は、geometry が設定した \textwidth は \fullwidth として扱い、その値から実際の \textwidth を導出する。

# 1247 **%<\*book>**

- 1248 \@tempdima=\bxjs@textwidth@limit\relax
- 1249 \ifbxjs@whole@zw@lines
- 1250 \advance\@tempdima.005pt\relax
- 1251 \divide\@tempdima\Cwd \multiply\@tempdima\Cwd
- 1252 \fi
- 1253 \ifdim\textwidth>\@tempdima
- 1254 \textwidth=\@tempdima
- 1255 \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
- 1256 \fi
- 1257 %</book>

# \textheight 関連の調整。

- 1258 \@tempdimb=\textheight
- 1259 \advance\textheight-\topskip
- $1261 \verb| \divide\textheight\baselineskip \multiply\textheight\baselineskip \eqno(1) | 1261 extheight\baselineskip \eqno(1) | 1261 exth$
- 1262 \advance\textheight\topskip
- 1263 \advance\@tempdimb-\textheight
- 1264 \advance\topmargin0.5\@tempdimb

# \headheight 関連の調整。

- 1265 \@tempdima=\topskip
- 1266 \advance\headheight\@tempdima

# marginpar 関連の調整。

```
1268
      \setlength\marginparsep{\columnsep}
      \setlength\marginparpush{\baselineskip}
      \setlength\marginparwidth{\paperwidth-\oddsidemargin-1truein%
1270
          -\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep}
1271
     \ifbxjs@whole@zw@lines
1272
        \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
1273
1274
 連動する変数。
      \maxdepth=.5\topskip
      \stockwidth=\paperwidth
1276
1277
      \stockheight=\paperheight
1278 }
```

\jsGeometryOptions geometry パッケージに渡すオプションのリスト。

※geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。

1279 \edef\jsGeometryOptions{%

1280 \bxjs@layout@paper,\bxjs@layout}

# ■geometry パッケージを読み込む 彎

```
ムニャムニャ。
```

```
1281 \def\bxjs@geometry@name{geometry}
```

1282 \ifbxjs@old@hook@system

1283 \let\bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook\AtBeginDocument

1284 \else

1285 \def\bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{%

1286 \AddToHook{begindocument}[\bxjs@geometry@name]}

1287 \fi

geoemtry=class の場合に、実際に geometry パッケージを読みこむ。

 ${\tt 1288 \ \ \ } bxjs@geometry\ \ bxjs@geometry\ \ \ \ }$ 

geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。

```
1289 \ifbxjs@papersize
```

1290 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx

1291 \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}

 $1292 \qquad \verb{\else\ifx<page-header>} bxjs@driver@given\bxjs@driver@dvimode$ 

1293 \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}

1294 \fi\fi

1295 \let\bxPapersizeSpecialDone=t

1296 **\else** 

```
1298 \fi
                                                        ここで geometry を読み込む。
                                                  ※geometry の begin-document フックにおいて、LuaT<sub>F</sub>X の旧版互換を有効にする。
                                               1299 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook
                                               1300 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\bxjs@bd@pre@geometry@hook}
                                               1301 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\ImposeOldLuaTeXBehavior}
                                               1302 \bxjs@preproc@layout
                                               1303 \edef\bxjs@next{%
                                                            \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}%
                                               1306 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\RevokeOldLuaTeXBehavior}
\bxjs@geometry@driver geometry が用いるドライバの名前。
                                                   ※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、\bxjs@postproc@layout において書
                                                   き戻す処理を入れている。
                                               1307 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver
                                               1308 \bxjs@postproc@layout
                                                       geometry のドライバ自動判別に対する前処理。
                                               1309 \g@addto@macro\bxjs@bd@pre@geometry@hook{%
                                                  BXJS2.0 版より、geometry の 4.x 版のサポートは廃止された。
                                                                \@ifpackagelater{geometry}{2010/02/12}{}{%else
                                               1310
                                                                     \PackageError\bxjs@clsname
                                               1311
                                               1312
                                                                       {Your 'geometry' package is too old (< v5.0)}%
                                                                       {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                               1313
                                                                     \let\Gm@driver\relax}%
                                               1314
                                                   エンジンが platex-ng の時は geometry のドライバを pdftex にする。
                                                                \ifjsWithpTeXng
                                               1315
                                               1316
                                                                     \ifx\Gm@driver\@empty
                                               1317
                                                                          \def\Gm@driver{pdftex}%
                                                                     \fi
                                               1318
                                               1319
                                                                 fi
               \setpagelayout ページレイアウト設定のためのユーザ命令。
                                               1320 \def\setpagelayout{%
                                                           \bxjs@ifplus{\bxjs@setpagelayout@a\tw@}{%else
                                               1321
                                               1322
                                                                \@ifstar{\bxjs@setpagelayout@a\@ne}{\bxjs@setpagelayout@a\z@}}}
                                               1323 \def\bxjs@setpagelayout@a#1#2{%
                                                           \ifcase#1% modify
                                               1324
                                                                \def\bxjs@next{\ifjsc@mag truedimen,\fi #2}%
                                               1325
                                                           \or% reset(*)
                                               1326
                                                                \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,#2}%
                                               1327
                                                            \or% semireset(+)
                                                                \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout@base,#2}%
                                               1329
                                               1330
                                                           \fi
```

\PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}

```
1331 \bxjs@preproc@layout
1332 \edef\bxjs@next{%
1333 \noexpand\geometry{\bxjs@next}%
1334 }\bxjs@next
1335 \bxjs@postproc@layout}
```

# ■geometry パッケージを読み込まない 彎

geometry=user の場合の処理。

1336 \else\ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@user

この場合はユーザが何らかの方法(例えば geometry を読み込む)でページレイアウトを 設定する必要がある。もし、本体開始時に \textwidth がカーネル設定の値(.5\maxdimen) のままになっている場合はエラーを出す。

※\jsUseMinimalPageLayout は動作テスト用。

```
1337 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                        \ifdim\textwidth=.5\maxdimen
1338
1339
                                 \ClassError\bxjs@clsname
1340
                                     {Page layout is not properly set}%
                                     {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
1341
1342
                        \fi}
1343 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
1344
                         \setlength{\textwidth}{6.5in}%
                        \setlength{\textheight}{8in}}
               \setpagelayout はとりあえず無効にしておく。
1346 \let\bxjs@geometry@driver\relax
1347 \def\setpagelayout{%
                        \bxjs@ifplus{\bxjs@pagelayout@a}{%else
1348
1349
                                 \@ifstar{\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}}
1350 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
                         \ClassError\bxjs@clsname
1351
                             {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak
                                 because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}
1353
1354 %
1355 \fi\fi
```

#### ■JS クラスと共通処理の開始 彎

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- zw の代わりに \jsZw を用いる。
- article/report/book/slide の切り分けの処理が異なる。

※ diff が崩壊するのを避けるためオリジナルのコードを無効化した状態で挿入しておく。

1356 %<\*jsclasses>

#### ■縦方向のスペース

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値 \topskip にすると、本文中に ∫ のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のペー ジより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

> [2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで、元は12pt でしたが、新ドキュメントクラ スでは \topskip と等しくしていました。ところが、fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようですので,2倍に増やしました。代わりに,版面の上下 揃えの計算では \headheight ではなく \topskip を使うことにしました。

> [2016-08-17] 圏点やルビが一行目に来た場合に下がるのを防ぐため、\topskip を 10pt から 1.38zw に増やしました。\headheight は従来と同じ 20pt のままとします。

1357 \setlength\topskip{1.38zw}\% from 10\jsc@mpt (2016-08-17)

1358 \if@slide

\setlength\headheight{0\jsc@mpt} 1359

1360 \else

\setlength\headheight{20\jsc@mpt}\% from 2\topskip (2016-08-17); from \topskip (2003-06-26)

1362 \fi

\footskip \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは、book で 0.35in (約8.89mm), book 以外で30pt (約10.54mm) となっていましたが,ここではA4 判のときちょうど 1 cm となるように、\paperheight の 0.03367 倍 (最小 \baselineskip) としました。書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。

1363 %<\*article|kiyou>

 $1364 \footnote{off}$ 

\setlength\footskip{0pt} 1365

1366 \else

\setlength\footskip{0.03367\paperheight} 1367

\ifdim\footskip<\baselineskip

\setlength\footskip{\baselineskip} 1369

1370 \fi

1371 \fi

1372 %</article|kiyou>

1373 %<jspf>\setlength\footskip{9\jsc@mmm}

1374 %<\*book>

1375 \if@report

\setlength\footskip{0.03367\paperheight}

\ifdim\footskip<\baselineskip

\setlength\footskip{\baselineskip}

1379 \fi

1380 \else

1381 \setlength\footskip{0pt}

1382 \fi

```
1383 %</book>
1384 %<*report>
1385 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
1386 \ifdim\footskip<\baselineskip
1387 \setlength\footskip{\baselineskip}
1388 \fi
1389 %</report>
```

\headsep \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), それ以外で 25pt (約 8.79mm) になっていました。ここでは article は \footskip — \topskip としました。

[2016-10-08] article の slide のとき、および book の非 report と kiyou のときに \headsep を減らしそこねていたのを修正しました(2016-08-17 での修正漏れ)。

```
1390 %<*article>
1391 \if@slide
     \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
1392
      \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
1393
      1394
1395 \else
     \setlength\headsep{\footskip}
1396
1397
     \addtolength\headsep{-\topskip}
1398 \fi
1399 %</article>
1400 %<*book>
1401 \if@report
     \setlength\headsep{\footskip}
1402
1403
      \addtolength\headsep{-\topskip}
1404 \else
      \setlength\headsep{6\jsc@mmm}
1405
     \dot{addtolength} \end{constraint} % added (2016-10-08)
1406
      \dot{0} addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
1407
1408 \fi
1409 %</book>
1410 %<*report>
1411 \setlength\headsep{\footskip}
1412 \addtolength\headsep{-\topskip}
1413 %</report>
1414 %<*jspf>
1415 \setlength\headsep{9\jsc@mmm}
1416 \addtolength\headsep{-\topskip}
1417 %</jspf>
1418 %<*kiyou>
1419 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
1420 \stlength\headsep{0\jsc@mpt}
1421 \addtolength\headsep{-\topskip}\%% added (2016-10-08)
1422 \addtolength\headsep\{10\jsc@mpt\}\% added (2016-10-08)
1423 %</kiyou>
```

\maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain T<sub>E</sub>X や IAT<sub>E</sub>X 2.09 では 4pt に固定でした。IAT<sub>E</sub>X2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ(ここでは 10pt)に等しいので、結局 \maxdepth は \topskip の半分の値(具体的には 5pt)にします。

 $1424 \setlength\maxdepth{.5\topskip}$ 

#### ■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。

1425 \newdimen\fullwidth

この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍 (二段組では全角幅の偶数倍) にします。 0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から 約 2 インチを引いた値になるように選びました。 book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。article では A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50zw(25 文字 ×2 段)+段間 8mm とします。

1426 %<\*article>

 $1427 \if@slide$ 

1428 \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}

1429 \else

1430 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}

1431 **\fi** 

1432 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi

 $1433 \verb|\divide\fullwidth\@tempdima \ \verb|\multiply\fullwidth\@tempdima|| \\$ 

 $1434 \verb|\setlength\textwidth{\fullwidth}|$ 

1435 %</article>

1436 %<\*book>

1437 \if@report

 $1438 \quad \texttt{\setlength\fullwidth\{0.76\paperwidth\}}$ 

1439 \else

1440 \setlength\fullwidth{\paperwidth}

1441 \addtolength\fullwidth{-36\jsc@mmm}

1442 \fi

1443 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi

1444 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima

 $1445 \setlength\textwidth{\fullwidth}$ 

1447 \if@twocolumn \else

1448 \ifdim \fullwidth>40zw

1449 \setlength\textwidth{40zw}

```
1450
                                      \fi
1451
1452 \fi
1453 %</book>
1454 %<*report>
1455 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1456 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1457 \verb|\divide\fullwidth\@tempdima \ \verb|\multiply\fullwidth\@tempdima| \\
1458 \step 1458 \ste
1459 %</report>
1460 %<*jspf>
1461 \setlength\fullwidth{50zw}
1462 \addtolength\fullwidth{8\jsc@mmm}
1463 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1464 %</jspf>
1465 %<*kiyou>
1466 \setlength\fullwidth{48zw}
1467 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
1468 \stiength\textwidth{\fullwidth}
1469 %</kiyou>
```

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と \textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は、紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、\topskip を引き、それを \baselineskip の倍数に切り捨て、最後に \topskip を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-26] \topskip を 10pt から 1.38zw に増やしましたので,その分 \textheight を増やします(2016-08-17 での修正漏れ)。

[2016-10-08] article の slide のときに \headheight はゼロなので、さらに修正しました  $(2016-08-17\$ での修正漏れ)。

```
1470 %<**article|book|report>
1471 \if@slide
1472 \setlength{\textheight}{0.95\paperheight}
1473 \else
1474 \setlength{\textheight}{0.83\paperheight}
1475 \fi
1476 \addtolength{\textheight}{-10\jsc@mpt}%% from -\topskip (2016-10-08); from -\headheight (2003-06-26)
1477 \addtolength{\textheight}{-\headsep}
1478 \addtolength{\textheight}{-\footskip}
1479 \addtolength{\textheight}{-\topskip}
```

```
1480 \divide\textheight\baselineskip
1481 \multiply\textheight\baselineskip
1482 %</article|book|report>
1483 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}
1484 %<kiyou>\setlength{\textheight}{47\baselineskip}
1485 \addtolength{\textheight}{\topskip}
1486 \addtolength{\textheight}{0.1\jsc@mpt}
```

1487 %<jspf>\setlength{\mathindent}{10\jsc@mmm}

\flushbottom [2016-07-18] \textheight に念のため 0.1 ポイント余裕を持たせているのと同様に、 \flushbottom にも余裕を持たせます。元の  $\LaTeX$ 2 $_{arepsilon}$  での完全な \flushbottom の定義は

\def\flushbottom{%

\let\@textbottom\relax \let\@texttop\relax}

ですが,次のようにします。

1488 \def\flushbottom{%

1489 \def\@textbottom{\vskip \z@ \@plus.1\jsc@mpt}%

1490 \let\@texttop\relax}

\marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。\marginparpush は欄外の書き込 \marginparpush みどうしの最小の間隔です。

1491 \setlength\marginparsep{\columnsep}
1492 \setlength\marginparpush{\baselineskip}

\oddsidemargin それぞれ奇数ページ,偶数ページの左マージンから 1 インチ引いた値です。片面印刷では \evensidemargin が使われます。 $T_EX$  は上・左マージンに 1truein を挿入しますが,トンボ関係のオプションが指定されると  $pIAT_EX$   $2_{\varepsilon}$  (plcore.ltx) はトンボの内側に 1in のスペース(1truein ではなく)を挿入するので,場合分けしています。

 $1493 \verb|\colored]{\paperwidth}|$ 

 $1494 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}$ 

1495 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}

 $1496 \setminus iftombow$ 

1497 \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}

1498 \else

1499 \addtolength{\oddsidemargin}{-\inv@mag in}

1500 \fi

1501 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}

1502 \if@mparswitch

1503 \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}

 $1504 \verb| \addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}|$ 

 $1505 \fi$ 

\marginparwidth \marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅(\evensidemargin + 1 インチ)から 1 センチを引き、さらに \marginparsep(欄外の書き込みと本文のアキ)を引いた値にしました。最後に 1 zw の整数倍に切り捨てます。

1506 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}

```
1507 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}
1508 \addtolength\marginparwidth{-\inv@mag in}
1509 \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}
1510 \addtolength\marginparwidth{-10\jsc@mmm}
1511 \addtolength\marginparwidth{-\marginparsep}
1512 \@tempdima=1zw
1513 \divide\marginparwidth\@tempdima
```

1514 \multiply\marginparwidth\@tempdima

\topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離)から1インチ引いた値です。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じで あったので,変化はないはずです。

[2016-08-17] \topskip を 10pt から 1.38zw に直しましたが、\topmargin は従来の値か ら変わらないように調節しました。…のつもりでしたが、\textheight を増やし忘れてい たので変わってしまっていました(2016-08-26 修正済み)。

```
1515 \setlength\topmargin{\paperheight}
1516 \verb| \addtolength \verb| topmargin{-\textheight}|
1517 \setminus if@slide
1518 \addtolength\topmargin{-\headheight}
1519 \else
     \addtolength\topmargin{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -
    \headheight (2003-06-26)
1522 \addtolength \topmargin {-\headsep}
1523 \addtolength\topmargin{-\footskip}
1524 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
1525 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
1526 \setminus iftombow
```

\addtolength\topmargin{-1in} 15271528 \else

\addtolength\topmargin{-\inv@mag in}

1530 \fi

1531 %</jsclasses>

### ■脚注

\footnotesep 各脚注の頭に入る支柱(strut)の高さです。脚注間に余分のアキが入らないように, **\footnotesize** の支柱の高さ(行送りの 0.7 倍)に等しくします。

ここは元々は

としていたが、そもそも \global\setlength~ は calc 使用時には有意義な動作をしない。 \global\footnotesep だと所望の値が得られるが、同時に \footnotesize のフォントを 固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

1532 \footnotesep=11\p@? \footnotesep=0.7\footnotesep

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが、和文の行送りを考えてもうちょっと大きくします。

1533 \setlength{\skip\footins}{16\p0? \@plus 5\p0? \@minus  $2\p0?$ }

■フロート関連 フロート (図,表) 関連のパラメータは IlphaTeX  $2_{\varepsilon}$  本体で定義されていますが,ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)とフロートだけのページで設定が異なります。ちなみに,カウンタは内部では \c0 を名前に冠したマクロになっています。

\c@topnumber topnumber カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。  $[2003-08-23] \ \,$ ちょっと増やしました。

1534 \setcounter{topnumber}{9}

**\topfraction** 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

1535 \renewcommand{\topfraction}{.85}

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。  $[2003-08-23] \ \,$ ちょっと増やしました。

1536 \setcounter{bottomnumber}{9}

\bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

1537 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

1538 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2 を 0.1 に変えました。

 $1539 \verb|\renewcommand{\textfraction}{\{.1\}}$ 

\floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。  $1540 \renewcommand{floatpagefraction}{.8}$ 

1541 \setcounter{dbltopnumber}{9}

\dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7 を 0.8 に変えてあります。

 $1542 \mbox{ \lower} (\mbox{\lower} 3.8)$ 

```
\dblfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8
                                                                                                 に変えてあります。
                                                                                         1543 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}
                                                  \floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・
                                                                                                下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本
                                  \textfloatsep
                                                                                             文との距離です。
                                              \intextsep
                                                                                         1544 \setlength\floatsep
                                                                                                                                                                                                            {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?}
                                                                                         1545 \setlength\textfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?}
                                                                                                                                                                                                       {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
                                                                                         1546 \setlength\intextsep
                                      \dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。
                     \dbltextfloatsep 1547 \setlength\dblfloatsep
                                                                                                                                                                                                                        {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
                                                                                         1548 \setlength\dbltextfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?}
                                                           \@fptop フロートだけのページに入るグルーです。\@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部,
                                                           \Ofpsep \Ofpsep はフロート間に入ります。
                                                           \ensuremath{\texttt{Ofptop{0p0? \ensuremath{0}}}
                                                                                         1550 \setlength\@fpsep{8\p@? \@plus 2fil}
                                                                                         1551 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}
                                              \@dblfptop 段抜きフロートについての値です。
                                              \label{lem:condition} $$\dblfpsep 1552 \end{th} $$\dblfpsep 1552 \en
                                              \label{lem:condition} $$ \end{area} $$ \en
```

# 6 改ページ(日本語 TFX 開発コミュニティ版のみ)

1554 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}

\pltx@cleartorightpage \pltx@cleartoleftpage [2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,同じ命令を追加しました。

\pltx@cleartooddpage \pltx@cleartoevenpage

- 1. \pltx@cleartorightpage: 右ページになるまでページを繰る命令
- 2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令
- 3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令
- 4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

となっています。

```
1555 %\def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
1556 % \ifodd\c@page
1557 % \iftdir
1558 % \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1559 % \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1560 % \fi
1561 % \else
1562 % \ifydir
1563 % \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
```

```
1564 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1565 %
         \fi
1566 % \fi\fi}
1567 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1568 % \ifodd\c@page
1569 %
         \ifydir
1570 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1571 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1572 %
         \fi
1573 % \else
1574 %
         \iftdir
1575 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1576 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1577 %
         \fi
1578 % \fi\fi}
1579 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
      \ifodd\c@page\else
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1581
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1582
     \fi\fi}
1583
1584 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
      \ifodd\c@page
1585
1586
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1587
      fi\fi
1588
```

BXJS クラスでは \iftdir 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

```
1589 \let\pltx@cleartorightpage\pltx@cleartooddpage
1590 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage
```

\cleardoublepage [2017-02-24] コミュニティ版 pIATEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて, report と book クラスの場合に\cleardoublepage を再定義します。

```
1591 %<*book|report>
1592 \if@openleft
1593 \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage
1594 \else\if@openright
1595 \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
1596 \fi\fi
1597 %</book|report>
```

# 7 ページスタイル

ページスタイルとして, $ext{IM}_{EX} 2_{\varepsilon}$ (欧文版)の標準クラスでは empty,plain,headings,myheadings があります。このうち empty,plain スタイルは  $ext{IM}_{EX} 2_{\varepsilon}$  本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが, ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps0... の形のマクロで定義されています。

\@evenhead \@oddhead, \@oddfoot, \@evenhead, \@evenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

**\Coddhead** フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。

\@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

\@oddfoot 柱の内容は、\chapter が呼び出す \chaptermark{何々}、\section が呼び出す \sectionmark{何々} で設定します。柱を扱う命令には次のものがあります。

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右}右の柱を設定します。\leftmark左の柱を出力します。\rightmark右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

\ps@empty empty ページスタイルの定義です。IATEX 本体で定義されているものをコメントアウトした 形で載せておきます。

 $1598 \% \ensuremath{\mbox{\sc def\ps@empty}{\%}}$ 

1599 % \let\@mkboth\@gobbletwo

1600 % \let\@oddhead\@empty

1601 % \let\@oddfoot\@empty

1602 % \let\@evenhead\@empty

1603 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

 $1604 \ensuremath{\mbox{\sc Qplainfoot}} \ensuremath{\mbox{\sc M}}$ 

 $1605 \qquad \verb|\label{lem:lemboth}| \ensuremath{\texttt{Qgobbletwo}}|$ 

1606 \let\@oddhead\@empty

1607 \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}%

1608 \let\@evenhead\@empty

1609 \let\@evenfoot\@oddfoot}

1610 \def\ps@plainhead{%

1611 \let\@mkboth\@gobbletwo

1612 \let\@oddfoot\@empty

1613 \let\@evenfoot\@empty

1614 \def\@evenhead{%

1615 \if@mparswitch \hss \fi

```
1616
                  \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
           1617
                  \if@mparswitch\else \hss \fi}%
           1618
                \def\@oddhead{%
                  \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
           1619
           1620 %<book>\let\ps@plain\ps@plainhead
           1621 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot
\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン
            ダーラインを引くようにしてみました。
              まず article の場合です。
           1622 %<*article|slide>
           1623 \footnotemark 1623 \if@twoside
               \def\ps@headings{%
           1624
           1625
                  \let\@oddfoot\@empty
                  \let\@evenfoot\@empty
           1626
           1627
                  \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
           1628
                    \label{the page} $$\operatorname{\hfil\leq \hfil\eftmark}}% $$
                    \if@mparswitch\else \hss \fi}%
           1629
           1630
                  \def\@oddhead{%
                    \underline{%
           1631
           1632
                      \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
                  \let\@mkboth\markboth
           1633
                  \def\sectionmark##1{\markboth{%
           1634
                     1635
                     ##1}{}}%
           1636
                  \def\subsectionmark##1{\markright{%
           1637
           1638
                     \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \bxjs@label@sect{subsection}\hskip1\jsZw\fi
           1639
                     ##1}}%
           1640
           1641 \ge % if not twoside
                \def\ps@headings{%
           1642
           1643
                  \let\@oddfoot\@empty
                  \def\@oddhead{%
           1644
           1645
                    \underline{%
           1646
                      \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
                  \let\@mkboth\markboth
           1647
                  \def\sectionmark##1{\markright{%
           1648
           1649
                      1650
                      ##1}}}
           1651 \fi
           1652 %</article|slide>
```

次は book および report の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。

\autoxspacing は未定義の可能性があるため、「\autoxspacing が定義済なら実行する」マクロ \bxjs@maybe@autoxspacing を代わりに用いる。

```
1654 \def\bxjs@maybe@autoxspacing{%
                    \ifx\autoxspacing\@undefined\else \autoxspacing \fi}
              1656 \newif\if@omit@number
              1657 \def\ps@headings{%
                   \let\@oddfoot\@empty
                   \let\@evenfoot\@empty
              1659
              1660
                   \def\@evenhead{%
                     \if@mparswitch \hss \fi
              1661
                      \underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing}
              1662
              1663
                          \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
              1664
                      \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                    \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing}
              1665
                          {\if@twoside\rightmark\else\leftmark\fi}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
              1666
              1667
                    \let\@mkboth\markboth
                    \def\chaptermark##1{\markboth{%
              1668
                     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
              1669
              1670
                        \if@mainmatter
              1671
                          \if@omit@number\else
                            \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\jsZw
              1672
              1673
                          \fi
                        \fi
              1674
                     \fi
              1675
              1676
                     ##1}{}}%
                    \def\sectionmark##1{\markright{%
              1677
                     \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \bxjs@label@sect{section}\hskip1\jsZw\fi
              1678
                     ##1}}%
              1679
              1680 %</book|report>
                 最後は学会誌の場合です。
              1681 %<*jspf>
              1682 \def\ps@headings{%
                   \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
              1683
              1684
                    \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
                    \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
                   \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
              1686
              1687 %</jspf>
\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するた
               め,ここでの定義は非常に簡単です。
                 [2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。
              1688 \def\ps@myheadings{%
                   \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
              1689
                    \def\@evenhead{%
              1690
              1691
                     \if@mparswitch \hss \fi%
                     \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
              1692
                      \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                   \def\@oddhead{%
              1694
                      \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%
              1695
```

1653 %<\*book|report>

```
1696 \let\@mkboth\@gobbletwo
1697 %<book|report> \let\chaptermark\@gobble
1698 \let\sectionmark\@gobble
1699 %<!book&!report> \let\subsectionmark\@gobble
1700 }
```

# 8 文書のマークアップ

# 8.1 表題

\title これらは  $\LaTeX$  本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示し\author ます。

```
\date 1701 % \newcommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}}

1702 % \newcommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}}

1703 % \newcommand*{\date}[1]{\gdef\@date{#1}}

1704 % \date{\today}
```

\subtitle 副題を設定する。

\jsSubtitle ※プレアンブルにおいて \newcommand\*{\subtitle}{...} が行われることへの対策として、\subtitle の定義を \title の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題より前に副題を設定したい場合は、\jsSubtitle 命令を直接用いればよい。

本体を \jsSubtitle として定義する。

```
1705 \verb|\newcommand*{\jsSubtitle}[1]{\gdef\bxjs@subtitle{#1}}
```

 $1706 \ \% \ let\ bxjs@subtitle\ @undefined$ 

\title にフックを入れる。

```
1707 \renewcommand*{\title}[1]{\bxjs@decl@subtitle\gdef\@title{#1}}
```

1708 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\bxjs@decl@subtitle}

1709 \def\bxjs@decl@subtitle{%

1710 \global\let\bxjs@decl@subtitle\relax

1711 \ifx\subtitle\@undefined

1712 \global\let\subtitle\jsSubtitle

1713 \fi}

\bxjs@annihilate@subtitle \subtitle 命令を無効化する。

※独自の \subtitle が使われている場合は無効化しない。

1714 \def\bxjs@annihilate@subtitle{%

 $1715 \quad \verb|\ifx\subtitle\jsSubtitle\global\let\subtitle\relax \fi$ 

1716  $\global\let\jsSubtitle\relax$ 

\etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル,英語の著者名,キーワード,メールアドレスです。

\eauthor 1717 %<\*jspf>

```
1719 \newcommand*{\eauthor}[1]{\gdef\@eauthor{#1}}
1720 \newcommand*{\keywords}[1]{\gdef\@keywords{#1}}
1721 \newcommand*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}
1722 \newcommand*{\AuthorsEmail}[1]{\gdef\authors@mail{author's e-mail:\ #1}}
1723 %</jspf>
```

\plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにします。

```
1724 \def\plainifnotempty{%
      \ifx \@oddhead \@empty
1725
        \ifx \@oddfoot \@empty
1727
        \else
1728
          \thispagestyle{plainfoot}%
        \fi
1729
      \else
1730
        \thispagestyle{plainhead}%
1731
1732
      \fi}
```

\maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large, 和 文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。

[2016-11-16] 新設された nomag および nomag\* オプションの場合をデフォルト (usemag 相当) に合わせるため、\smallskip を\jsc@smallskip に置き換えました。\smallskip のままでは nomag(\*) の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。

```
1733 %<*article|book|report|slide>
1734 \if@titlepage
1735
                               \newcommand{\maketitle}{%
                                          \begin{titlepage}%
1736
1737
                                                     \let\footnotesize\small
1738
                                                     \let\footnoterule\relax
1739
                                                     \let\footnote\thanks
                                                     \null\vfil
1740
                                                     \if@slide
1741
                                                                {\footnotesize \@date}%
1742
                                                                \begin{center}
1743
                                                                          \mbox{} \mbo
1744
                                                                          \large
1745
                                                                          {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
1746
1747
                                                                          \jsc@smallskip
                                                                          \@title
1748
                                                                          \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1750
                                                                                    \par\vskip\z@
                                                                                    {\small \bxjs@subtitle\par}
1751
1752
                                                                          \fi
                                                                          \jsc@smallskip
1753
```

```
{\maybeblue\hrule height0\p0? depth2\p0?\relax}\par
1754
1755
                                                            {\small \@author}%
1756
                                                    \end{center}
1757
                                           \else
1758
                                           \vskip 60\p0?
1759
                                           \begin{center}%
1760
1761
                                                    {\LARGE \@title \par}%
                                                    \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1762
                                                            \space{1mm} \spa
1763
                                                             {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1764
                                                    \fi
1765
                                                    \vskip 3em%
1766
                                                    {\large
1767
1768
                                                            \lineskip .75em
1769
                                                            \begin{tabular}[t]{c}%
                                                                    \@author
1770
                                                             \end{tabular}\par}%
1771
1772
                                                    \vskip 1.5em
                                                    {\large \@date \par}%
1773
1774
                                           \end{center}%
                                           \fi
1775
1776
                                           \par
                                           \@thanks\vfil\null
1777
                                  \end{titlepage}%
1778
                                  \setcounter{footnote}{0}%
1779
                                  \global\let\thanks\relax
1780
                                  \global\let\maketitle\relax
1781
1782
                                  \global\let\@thanks\@empty
1783
                                  \global\let\@author\@empty
                                  \global\let\@date\@empty
1784
1785
                                  \global\let\@title\@empty
                                  \global\let\title\relax
1786
1787
                                  \global\let\author\relax
                                  \global\let\date\relax
1788
1789
                                  \global\let\and\relax
                                  \bxjs@annihilate@subtitle
1790
                        }%
1791
1792 \else
                          \newcommand{\maketitle}{\par
1793
1794
                                  \begingroup
                                           \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1795
                                           \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
1796
                                           \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1797
1798
                                                    \parindent 1\jsZw\noindent
                                                    \label{the continuous continuou
1799
 1800
                                           \if@twocolumn
                                                    \ifnum \col@number=\@ne
1801
                                                            \@maketitle
1802
```

```
\else
                                                     1803
                                                    1804
                                                                                                                      \twocolumn[\@maketitle]%
                                                     1805
                                                                                                             \fi
                                                                                                   \else
                                                    1806
                                                    1807
                                                                                                             \newpage
                                                                                                             \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
                                                     1808
                                                                                                             \@maketitle
                                                     1809
                                                     1810
                                                                                                   \fi
                                                                                                   \plainifnotempty
                                                    1811
                                                                                                   \@thanks
                                                    1812
                                                                                          \endgroup
                                                     1813
                                                                                         \setcounter{footnote}{0}%
                                                    1814
                                                    1815
                                                                                          \global\let\thanks\relax
                                                                                          \global\let\maketitle\relax
                                                     1816
                                                    1817
                                                                                          \global\let\@thanks\@empty
                                                     1818
                                                                                          \global\let\@author\@empty
                                                                                          \global\let\@date\@empty
                                                    1819
                                                                                         \global\let\@title\@empty
                                                     1820
                                                     1821
                                                                                         \global\let\title\relax
                                                                                          \global\let\author\relax
                                                    1822
                                                                                          \global\let\date\relax
                                                                                         \global\let\and\relax
                                                     1824
                                                     1825
                                                                                          \bxjs@annihilate@subtitle
                                                                               }
                                                     1826
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
                                                                                \def\@maketitle{%
                                                    1827
                                                     1828
                                                                                          \newpage\null
                                                     1829
                                                                                         \vskip 2em
                                                                                         \begin{center}%
                                                    1830
                                                                                                   \let\footnote\thanks
                                                    1831
                                                     1832
                                                                                                   {\LARGE \@title \par}%
                                                                                                   \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                                    1833
                                                    1834
                                                                                                             \space{2.5cm} 
                                                                                                             {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                                                    1835
                                                    1836
                                                                                                   \vskip 1.5em
                                                     1837
                                                                                                   {\large
                                                    1838
                                                                                                             \lineskip .5em
                                                    1839
                                                                                                             \begin{tabular}[t]{c}%
                                                     1840
                                                    1841
                                                                                                                       \@author
                                                     1842
                                                                                                             \end{tabular}\par}%
                                                    1843
                                                                                                   \vskip 1em
                                                                                                   {\large \@date}%
                                                    1844
                                                    1845
                                                                                          \end{center}%
                                                                                         \protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\pro
                                                    1846
                                                     1847 %<article|slide>
                                                                                                                                                                    \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
                                                    1848
                                                    1849 \fi
```

```
1850 %</article|book|report|slide>
1851 %<*jspf>
1852 \mbox{ \mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{
             \begingroup
1853
                   \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1854
                  1855
                  \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1856
1857
                       \parindent 1\jsZw\noindent
                       \label{lap(0)} $$ \sim {\mathbb \mathbb{Z}_w}\#1}% $$
1858
                       \twocolumn[\@maketitle]%
1859
                   \plainifnotempty
1860
                  \@thanks
1861
              \endgroup
1862
              \setcounter{footnote}{0}%
1863
1864
              \global\let\thanks\relax
1865
              \global\let\maketitle\relax
              \global\let\@thanks\@empty
1866
1867
              \global\let\@author\@empty
1868
              \global\let\@date\@empty
1869 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
1870
              \global\let\title\relax
              \global\let\author\relax
1871
1872
              \global\let\date\relax
1873
              \global\let\and\relax
              \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
1874
                  \def\@makefntext{\advance\leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}%
1875
                  \footnotetext[0]{\itshape\authors@mail}%
1876
1877
1878
              \global\let\authors@mail\@undefined}
1879 \def\@maketitle{%
              \newpage\null
1880
1881
              \vskip 6em % used to be 2em
             \begin{center}
1882
                   \let\footnote\thanks
                   1884
1885
                  \lineskip .5em
                   \ifx\@author\@undefined\else
1886
                       \vskip 1em
1887
                       \begin{tabular}[t]{c}%
1888
                            \@author
1889
1890
                       \end{tabular}\par
1891
                  \fi
1892
                   \ifx\@etitle\@undefined\else
1893
                       \vskip 1em
1894
                       {\large \@etitle \par}%
1895
                   \ifx\@eauthor\@undefined\else
                       \vskip 1em
1897
                       \begin{tabular}[t]{c}%
1898
```

```
\@eauthor
1899
1900
          \end{tabular}\par
1901
        \fi
1902
        \vskip 1em
        \@date
1903
      \end{center}
1904
      \vskip 1.5em
1905
      \centerline{\box\@abstractbox}
1906
      \ifx\@keywords\@undefined\else
1907
        \vskip 1.5em
1908
        \centerline{\parbox{157\jsc@mmm}{\texttextsf{Keywords:}}\ \small\@keywords}}
1909
1910
      \fi
      \vskip 1.5em}
1912 %</jspf>
```

#### 8.2 章・節

ムニャムニャ……。

\bxjs@label@sect 節付 #1 の番号を出力する。節付 XXX に対して、\labelXXX が定義済ならそれが出力書式を表す。未定義ならばカウンタの出力書式 \theXXX が使われる。

```
1913 \def\bxjs@label@sect#1{%
```

 $1914 \qquad \texttt{\expandafter\ifx\csname label#1\endcsname\relax}$ 

1915 \csname the#1\endcsname

1916 \else \csname label#1\endcsname

1917 \fi}

1918 \def\@seccntformat#1{\bxjs@label@sect{#1}\quad}

\@secapp 節番号の接頭辞。

\@secpos 節番号の接尾辞。

1919 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat\else

1920 \def\@secapp{\presectionname}

1921 \def\@secpos{\postsectionname}

1922 **\fi** 

\labelsection 節番号の出力書式。

 $1923 \verb|\finum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@modern| \\$ 

 $1924 \ensuremath{\verb| labelsection{@secapp{thesection@secpos}|}}$ 

1925 \fi

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして \* と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

**\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル}** \* [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

ユーザレベルコマンドの名前です(例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

前アキ この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデ ントしません。

後アキ 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

この\*印がないと、見出し番号を付け、見出し番号のカウンタに1を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

\if@slide\else

\vskip\@tempskipa

\vspace\*{-\baselineskip}%

\null

\fi

1946 1947

1948 1949

1950

1951

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6個の引数として定義されます。 次は \@startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが \baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

```
1926 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%
     \if@noskipsec \leavevmode \fi
1927
1928
     \par
1929 % 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
    \@tempskipa #4\relax
1930
1931 % \@afterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
1932 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
1933 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
1934
    \ifdim \@tempskipa <\z@
       \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
1935
1936
     \fi
     \if@nobreak
1937
       \everypar{\everyparhook}% これは間違い
1938 %
1939
       \everypar{}%
1940
     \else
       \addpenalty\@secpenalty
1941
1942% 次の行は削除
1943 %
       \addvspace\@tempskipa
1944%次の\noindent まで追加
1945
       \ifdim \@tempskipa >\z@
```

```
1952 \fi
1953 \noindent
1954 % 追加終わり
1955 \@ifstar
1956 {\@ssect{#3}{#4}{#5}{#6}}%
1957 {\@dblarg{\@sect{#1}{#2}{#3}{#4}{#5}{#6}}}
```

\@sect と \@xsect は、前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように、多少変えてあります。\everyparhook も挿入しています。

\everyparhook の挿入は everyparhook=compat の時のみ行う。

\bxjs@if@ceph everyparhook=compat である場合にのみ直後のトークンを実行する。

1960 \else \let\bxjs@if@ceph\@gobble

```
1958 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
1959 \let\bxjs@if@ceph\@firstofone
```

1961 \fi

```
1962 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
      \ifnum #2>\c@secnumdepth
        \let\@svsec\@empty
1964
1965
      \else
1966
        \refstepcounter{#1}%
        \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
1967
1969 % 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
      \@tempskipa #5\relax
1971 % 条件判断の順序を入れ換えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1972
        \def\@svsechd{%
1973
1974
          #6{\hskip #3\relax
1975
          \@svsec #8}%
1976
          \csname #1mark\endcsname{#7}%
          \verb|\addcontentsline{toc}{#1}{%}|
1977
            \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1978
              \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
1979
1980
            #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
1981
      \else
1982
1983
        \begingroup
          \interlinepenalty \@M % 下から移動
1984
1985
            \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
1986
            \interlinepenalty \@M % 上に移動
1987 %
            #8\@@par}%
1988
1989
        \endgroup
        \csname #1mark\endcsname{#7}%
1990
        \addcontentsline{toc}{#1}{%
1991
```

```
1993
           \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
1994
         \fi
1995
         #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1996
     \c \xspace (45)
1997
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され,それ
 以降は前者が実行されます。
   [2016-07-28] slide オプションと twocolumn オプションを同時に指定した場合の罫線の
 位置を微調整しました。
1998 \def\@xsect#1{%
1999 % 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #1\relax
2001 % 条件判断の順序を変えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
2002
2003
       \@nobreakfalse
2004
       \global\@noskipsectrue
       \everypar{%
2005
         \if@noskipsec
2006
2007
           \global\@noskipsecfalse
2008
          {\setbox\z@\lastbox}%
2009
           \clubpenalty\@M
           \begingroup \@svsechd \endgroup
2010
2011
           \unskip
2012
           \@tempskipa #1\relax
           \hskip -\@tempskipa
2013
2014
         \else
2015
           \clubpenalty \@clubpenalty
2016
           \everypar\expandafter{\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
2017
         \fi\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
2018
     \else
       \par \nobreak
2019
       \vskip \@tempskipa
2020
       \@afterheading
2021
2022
     \fi
     \if@slide
2023
       {\vskip\if@twocolumn-5\jsc@mpt\else-6\jsc@mpt\fi
2024
        \maybeblue\hrule height0\jsc@mpt depth1\jsc@mpt
2025
        \vskip\if@twocolumn 4\jsc@mpt\else 7\jsc@mpt\fi\relax}%
2026
2027
     \par % 2000-12-18
2028
     \ignorespaces}
2029
2030 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%}
     \@tempskipa #3\relax
2031
     \ifdim \@tempskipa<\z@
2032
       \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
2033
     \else
2034
```

1992

\ifnum #2>\c@secnumdepth \else

```
2035
                                                      \begingroup
                                      2036
                                                           #4{%
                                      2037
                                                               \@hangfrom{\hskip #1}%
                                      2038
                                                                   \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
                                      2039
                                                       \endgroup
                                                  \fi
                                      2040
                                                  \@xsect{#3}}
                                      2041
                                         ■柱関係の命令
            \chaptermark \...mark の形の命令を初期化します (第7節参照)。\chaptermark 以外は LATPX 本体で
            \sectionmark 定義済みです。
      \verb|\subsectionmark| 2042 \verb|\newcommand*\chaptermark[1]{}|
2047 % \newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
                                          ■カウンタの定義
        \c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。
                                      2048 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}
                                      2049 % <book | report > \setcounter { secnumdepth } { 2}
                \c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは
                \cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
          \c@subsection 2050 \newcounter{part}
    \label{local_cont} $$ \c@subsubsection & \c@subsubsection & \c@subsubsection & \c&subsubsection & \c&subsection & \c&subsubsection & \c&subsection & \c&
            \verb|\c@paragraph|_{2053} % < !book&!report>\\ \verb|\newcounter{section}| \\
      \c@subparagraph 2054 \newcounter{subsection}[section]
                                      2055 \newcounter{subsubsection}[subsection]
                                      2056 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                                      2057 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
                                       カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
                     \thepart
                                              カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。
              \thechapter
              \thesection
                                                                                                   1, 2, 3, ...
                                                      \arabic{COUNTER}
        \thesubsection
                                                                                                  i, ii, iii, ...
                                                      \roman{COUNTER}
  \thesubsubsection
                                                                                                  I, II, III, ...
                                                      \Roman{COUNTER}
          \theparagraph
                                                                                                   a, b, c, ...
                                                      \alph{COUNTER}
    \thesubparagraph
                                                                                                   A, B, C, ...
                                                      \Alph{COUNTER}
                                                                                                  一, 二, 三, ....
                                                      \kansuji{COUNTER}
```

以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。

```
2058 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                                  2059 %<*!book&!report>
                                  2061 \verb|\colored | arabic | arabic \verb|\colored | arabic | 
                                  2062 \renewcommand{\thesubsection}{\Qarabic\cQsection.\Qarabic\cQsubsection}
                                  2063 \else
                                  2064 \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
                                  2065 \verb|\command{\the subsection}{\the section.\color=0.023} \\
                                  2066 \fi
                                  2067 %</!book&!report>
                                  2068 %<*book|report>
                                  2069 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                                  2070 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
                                  2071 \mbox{ \lower} {\mbox{\lower} \mbox{\lower} \mbox{\
                                  2072 %</book|report>
                                  2073 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                                                      \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
                                  2075 \renewcommand{\theparagraph}{%
                                                     \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
                                  2077 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                                                      \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
                                    \Ochapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
        \@chapapp
                                            \Ochappos の初期値は \postchaptername(章)です。
        \@chappos
                                            \appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。
                                            [2003-03-02] \@secapp は外しました。
                                  2079 % <book | report > \newcommand { \Qchapapp} { \prechaptername}
                                  2080 % <book | report > \newcommand { \Qchappos} { \postchaptername}
                                       ■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」,それ以外が「前付」「後付」です。
\frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。
                                            [2017-03-05] \frontmatter と \mainmatter の 2 つの命令は、改丁または改ページした
                                       後で \pagenumbering{...} でノンブルを1にリセットします。長い間 \pagenumbering{...}
                                       openany のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に
                                       偶奇逆転が起こる場合がありました。openany かどうかに依らず奇数ページまで繰るように
                                       修正することで、問題を解消しました。実は、IATFX の標準クラスでは 1998 年に修正され
                                       ていた問題です(コミュニティ版 pI	ext{MT}_{	ext{F}}X の標準クラス 2017/03/05 も参照)。
                                  2081 %<*book|report>
                                  2082 \newcommand\frontmatter{%
                                  2083
                                                  \pltx@cleartooddpage
                                  2084
                                                  \@mainmatterfalse
                                                   \pagenumbering{roman}}
  \mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。
```

2086 \newcommand\mainmatter{% 2087 \pltx@cleartooddpage

```
\@mainmattertrue
         2088
         2089
              \pagenumbering{arabic}}
\backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。
         2090 \newcommand\backmatter{%
              \if@openleft
         2091
         2092
                \cleardoublepage
              \else\if@openright
         2093
         2094
                \cleardoublepage
         2095
              \else
         2096
                \clearpage
         2097
               \fi\fi
         2098
              \@mainmatterfalse}
         2099 %</book|report>
           ■部
     \part 新しい部を始めます。
            \secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。
                \secdef{星なし}{星あり}
           星なし * のない形の定義です。
           星あり * のある形の定義です。
             \secdef は次のようにして使います。
             \def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }
                         [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義
             \def\CMDA
             \def\CMDB
                         #1{....}
                                    % \chapter*{...} の定義
             まず book と report のクラス以外です。
         2100 %<*!book&!report>
         2101 \newcommand\part{%
         2102
              \if@noskipsec \leavevmode \fi
         2103
              \par
         2104
              \addvspace{4ex}%
```

2105 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi

2106 \secdef\@part\@spart}

2107 %</!book&!report>

book および report クラスの場合は、少し複雑です。

2108 %<\*book|report>

2109 \newcommand\part{%

 $2110 \quad \verb|\if@openleft| \\$ 

2111 \cleardoublepage

 $2112 \quad \verb|\else| if@openright|$ 

 ${\tt 2113} \qquad {\tt \cleardoublepage}$ 

2114 **\else** 

2115 \clearpage

```
\fi\fi
     2116
           \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
     2117
           \if@twocolumn
             \onecolumn
     2119
             \@restonecoltrue
     2120
           \else
     2121
             \@restonecolfalse
     2122
     2123
           \null\vfil
     2124
           \secdef\@part\@spart}
     2125
     2126 %</book|report>
\@part 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。
         book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付け
       ます。
     2127 %<*!book&!report>
     2128 \def\@part[#1]#2{%
           \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
             \refstepcounter{part}%
     2130
             \addcontentsline{toc}{part}{%
     2131
               2132
     2133
           \else
     2134
             \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
           \fi
     2135
     2136
           \markboth{}{}%
           {\parindent\z@
     2137
     2138
             \raggedright
     2139
             \interlinepenalty \@M
             \verb|\normalfont|
     2140
             \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
     2141
     2142
               \Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname
     2143
               \par\nobreak
     2144
             \fi
             \huge \headfont #2%
     2145
             \markboth{}{}\par}%
     2146
     2147
           \nobreak
           \vskip 3ex
     2148
           \@afterheading}
     2150 %</!book&!report>
         book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
     2151 %<*book|report>
     2152 \def\@part[#1]#2{%
           \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
     2153
     2154
             \refstepcounter{part}%
             \verb|\addcontentsline{toc}{part}{%|}
     2155
               \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\jsZw}#1}%
     2156
     2157
             \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
     2158
```

```
\fi
         2159
               \markboth{}{}%
         2160
               {\centering
                 \interlinepenalty \@M
         2162
                 \normalfont
         2163
                 \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
         2164
                   \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
         2165
         2166
                   \par\vskip20\p@?
         2167
                 \Huge \headfont #2\par}%
         2168
               \@endpart}
         2169
         2170 %</book|report>
  \@spart 番号を付けない部です。
         2171 %<*!book&!report>
         2172 \def\@spart#1{{%
                 \parindent \z@ \raggedright
         2173
                 \interlinepenalty \@M
         2174
         2175
                 \verb|\normalfont|
         2176
                 \huge \headfont #1\par}%
         2177
               \nobreak
               \vskip 3ex
         2178
               \@afterheading}
         2180 %</!book&!report>
         2181 %<*book|report>
         2182 \def\@spart#1{{%
                 \centering
         2183
         2184
                 \interlinepenalty \@M
         2185
                 \normalfont
                 \Huge \headfont #1\par}%
         2186
               \@endpart}
         2188 %</book|report>
\@endpart \@part と \@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加しま
```

\Cendpart \Cendpart と\Cendpart の最後で実行されるマクロです。両面印刷のとさは日ベーシを追加します。二段組のときには,二段組に戻します。

[2016-12-13] openany のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは  $\LaTeX$  では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されています。

```
2189 %<*book|report>
2190 \endpart{\vfil\newpage}
2191
     \if@twoside
       \if@openleft %% added (2017/02/24)
2192
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
2193
       \else\if@openright %% added (2016/12/13)
2194
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
       \fi\fi %% added (2016/12/13, 2017/02/24)
2196
2197
      \if@restonecol
2198
```

```
2199
               \twocolumn
        2200
             \fi}
        2201 %</book|report>
          ■章
 \chapter 章の最初のページスタイルは,全体が empty でなければ plain にします。また,\@topnum
          を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。
        2202 %<*book|report>
        2203 \newcommand{\chapter}{\%
              \if@openleft\cleardoublepage\else
        2205
              \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
              \plainifnotempty % 元: \thispagestyle{plain}
        2206
        2207
              \global\@topnum\z@
             \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
             \secdef
        2209
        2210
               {\@omit@numberfalse\@chapter}%
        2211
               {\@omit@numbertrue\@schapter}}
\@chapter 章見出しを出力します。secnumdepth が 0 以上かつ \@mainmatter が真のとき章番号を出
          力します。
        2212 \def\@chapter[#1]#2{%
             \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
               \if@mainmatter
        2214
        2215
                 \refstepcounter{chapter}%
        2216
                 \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                 \addcontentsline{toc}{chapter}%
        2217
                   {\protect\numberline
        2218
        2219 %
                   {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
        2220
        2221
                   #1}%
               \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
        2222
        2223
             \else
        2224
               \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
        2225
              \chaptermark{#1}%
        2226
              \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
        2227
              \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
        2228
              \if@twocolumn
        2229
               \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
        2230
        2231
               \@makechapterhead{#2}%
        2232
               \@afterheading
        2233
        2234
              \fi}
```

\@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。\bfseries を \headfont に変えました。

2235 \def\@makechapterhead#1{%

2236 \vspace\*{2\Cvs}% 欧文は 50pt

```
{\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                 2237
                 2238
                         \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                 2239
                           \if@mainmatter
                             \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                 2240
                 2241
                             \par\nobreak
                             \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                 2242
                           \fi
                 2243
                 2244
                         \fi
                         \interlinepenalty\@M
                 2245
                         \Huge \headfont #1\par\nobreak
                 2246
                         \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                 2247
       \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                 2248 \ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{0schapter#1}}}
                 2249
                       \chaptermark{#1}%
                 2250
                       \if@twocolumn
                         \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                 2251
                 2252
                       \else
                 2253
                         \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                 2254
                       \fi}
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                 2255 \def\@makeschapterhead#1{%
                       \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                 2256
                       {\parindent \z@ \raggedright
                 2257
                 2258
                         \normalfont
                         \interlinepenalty\@M
                 2259
                 2260
                         \Huge \headfont #1\par\nobreak
                 2261
                         \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                 2262 %</book|report>
                   ■下位レベルの見出し
         \section 欧文版では \@startsection の第4引数を負にして最初の段落の字下げを禁止しています
                   が、和文版では正にして字下げするようにしています。
                     段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。
                 2263 \if@twocolumn
                 2264 \newcommand{\section}{%
                 2265 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                         \verb|\color=| \{1\}{\z0}| %
                 2267 %<!kiyou>
                                 {0.6\cvs}{0.4\cvs}%
                 2268 %<kiyou>
                                {\Cvs}{0.5\Cvs}%
                         {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
                 2269 %
                 2270
                         {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
```

2271 \else

2272

2273

2274

\newcommand{\section}{%

\if@slide\clearpage\fi

 $\ensuremath{\texttt{Qstartsection}}{1}{\z@}%$ 

```
{\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
          2275
                 {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
          2276
          2277 %
                 {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
          2278
                  {\tt \{\normalfont\Large\headfont\raggedright\}}\}
          2279 \fi
\subsection 同上です。
          2280 \if@twocolumn
               \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%
          2281
                  {\z0}{\left(x_0\right)} = .4\cvs \le \z0 \fi}%
          2282
                  {\normalfont\normalsize\headfont}}
          2283
          2284 \else
               2285
                 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
          2286
          2287
                 {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
          2288
                 {\normalfont\large\headfont}}
          2289 \fi
```

\subsubsection [2016-07-22] slide オプション指定時に \subsubsection の文字列と罫線が重なる問題に 対処しました (forum:1982)。

```
2290 \if@twocolumn
```

- 2291 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%
- 2292  ${\z0}{\inf@slide .4\Cvs \else \z0 \fi}%$
- 2293 {\normalfont\normalsize\headfont}}
- 2294 \else
- 2296 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%
- 2297 {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else \z@ \fi}%
- 2298 {\normalfont\normalsize\headfont}}
- 2299 \fi

\paragraph 見出しの後ろで改行されません。

#### \jsParagraphMark

[2016-11-16] 従来は \paragraph の最初に出るマークを「■」に固定していましたが、このマークを変更可能にするため \jsParagraphMark というマクロに切り出しました。これで、たとえば

\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラスでは従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から \jsParagraphMark をサポートしている。 段落のマーク ( $\blacksquare$ ) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

\jsJaChar は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は \jachar と同義になるが、 それ以外は何もしない。

<sup>2300 \</sup>newcommand\jsParagraphMark{\relax\jsJaChar{■}}

```
2301 \let\bxjs@org@paragraph@mark\jsParagraphMark
          2302 \ifx\bxjs@paragraph@mark\@empty
          2303 \let\jsParagraphMark\@empty
          2304 \else \fix\bxjs@paragraph@mark\@undefined\else
               \long\edef\jsParagraphMark{\noexpand\jsJaChar{\bxjs@paragraph@mark}}
          2306 \fi\fi
          2307 \let\jsJaChar\@empty
          2308 \if@twocolumn
               2309
                 {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
          2310
                       {\normalfont\normalsize\headfont}}
          2311 %<jspf>
                       {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
          2312 %<!jspf>
          2313 \else
               \newcommand{\paragraph}{\0startsection{paragraph}{4}{\z0}%
          2314
          2315
                 {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
          2316
                       {\normalfont\normalsize\headfont}}
          2317 %<jspf>
                       {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
          2318 %<!jspf>
          2319 \fi
\subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
          2320 \if@twocolumn
               \label{lem:condition} $$ \sum_{s=0}^{\sc -1\jsZw\fi}% $$
          2322
                 {\normalfont\normalsize\headfont}}
          2323
               2325
          2326
                 {\z0}{\ide .5\cvs \quare -1\jsZw\fi}%
          2327
                 {\normalfont\normalsize\headfont}}
          2328 \fi
            8.3 リスト環境
             第 k レベルのリストの初期化をするのが \@listk です (k = i, ii, iii, iv)。 \@listk
            は \leftmargin を \leftmargink に設定します。
\climate{lemonth} 二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが,ここでは全角幅の 2 倍にし
            ました。
             [2002-05-11] 3zw に変更しました。
             [2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。
          2329 \footnote{off}
          2330 \setlength\leftmargini\{1\jsZw\}
          2331 \else
          2332
               \if@twocolumn
                 \setlength\leftmargini{2\jsZw}
          2333
          2334
               \else
```

\setlength\leftmargini{3\jsZw}

2335

2336 \fi 2337 \fi

\leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ'(m)','vii.','M.'の幅との和より大きくすること \leftmarginiii になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。

 $\verb|\leftmarginv||^{2339}$ \setlength\leftmarginii {1\jsZw}

2340 \setlength\leftmarginiii{1\jsZw}

\setlength\leftmarginiv {1\jsZw}

> 2342 \setlength\leftmarginv {1\jsZw}

> 2343 \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}

2344 \else

2345 \setlength\leftmarginii {2\jsZw}

2346 \setlength\leftmarginiii{2\jsZw}

2347 \setlength\leftmarginiv {2\jsZw}

\setlength\leftmarginv {1\jsZw}

2349 \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}

2350 \fi

\labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分 \labelwidth に変えました。

2351 \setlength \labelsep  $\{0.5\jsZw\}$  % .5em

2352 \setlength \labelwidth{\leftmargini}

 $2353 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}$ 

\partopsep リスト環境の前に空行がある場合, \parskip と \topsep に \partopsep を加えた値だけ 縦方向の空白ができます。0 に改変しました。

2354 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \0plus 1\p0 \0minus 1\p0}

\@beginparpenalty リストや段落環境の前後,リスト項目間に挿入されるペナルティです。

\@endparpenalty 2355 \@beginparpenalty -\@lowpenalty \@itempenalty 2356 \@endparpenalty -\@lowpenalty 2357 \@itempenalty -\@lowpenalty

> \@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえば \small の 中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せる ように、\@listIで\@listiのコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここで は簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてありま す。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ最初と 最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。

> > [2004-09-27] \topsep のグルー  $^{+0.2}_{-0.1}$  \baselineskip を思い切って外しました。

2358 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini

\parsep \z@ 2359

\topsep 0.5\baselineskip

2361 \itemsep \z@ \relax}

2362 \let\@listI\@listi

2363 \@listi  $\colone{1}$  \Qlistii 第  $2\sim6$  レベルのリスト環境のパラメータの設定です。 \@listiii 2364 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii  $\verb+\Olistiv+^{2365}$ \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep 2366 \topsep \z@  $\verb|\@listv|_{2367}$ \parsep \z@ \@listvi2368 \itemsep\parsep} 2369 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep \topsep \z@ 2371 2372 \parsep \z@ \itemsep\parsep} 2374 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv \labelwidth\leftmarginiv 2375 \advance\labelwidth-\labelsep} 2376 2377 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv \labelwidth\leftmarginv 2378 2379 \advance\labelwidth-\labelsep} 2380 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi \labelwidth\leftmarginvi

念のためパラメータを初期化します(実際には不要のようです)。

 $\blacksquare$ enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumiii, enumiv を使います。enumn は第 n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは LATEX 本体(ltlists.dtx 参照)で定義済み \theenumii ですが、ここでは表し方を変えています。\@arabic、\@alph、\@roman、\@Alph はそれぞ \theenumiii れ算用数字、小文字アルファベット、小文字ローマ数字、大文字アルファベットで番号を出 \theenumiv 力する命令です。

\advance\labelwidth-\labelsep}

2383 \renewcommand{\theenumi}{\Qarabic\cQenumi} 2384 \renewcommand{\theenumii}{\Qalph\cQenumii} 2385 \renewcommand{\theenumiii}{\Qroman\cQenumiii} 2386 \renewcommand{\theenumiv}{\QAlph\cQenumiv}

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付 \labelenumii きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に \labelenumiii 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。

\labelenumiv

2382

和文の括弧で囲むための補助命令 \jsInJaParen を定義して \labelenumii でそれを用いている。

※現状の zxjatype の \inhibitglue の実装には「前後のグルーを消してしまう」という不備があって、そのため enumii の出力が異常になるという不具合があった。zxjatype を修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫(\bxjs@dust)でガードしておく。

```
2387 \def\bxjs@dust{\vrule\@width\z@\@height\z@\@depth\z@}
2388 \newcommand*{\jsInJaParen}[1]{%
2389 \bxjs@dust\jsInhibitGlue (#1) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}
2390 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
2391 \newcommand{\labelenumii}{\jsInJaParen}\theenumii}}
2392 \newcommand{\labelenumii}{\theenumii.}
2393 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
\p@enumii \p@enumn は \ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書
\p@enumiii 式です。これも第 2 レベルは和文用かっこにしました。
\p@enumiv 2394 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
2395 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii )}
2396 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

#### ■itemize 環境

```
\labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。
\labelitemii 2397 \newcommand\labelitemii{\textbullet}
\labelitemiii 2398 \newcommand\labelitemiii{\normalfont\bfseries \textendash}
2399 \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered}
\labelitemiv 2400 \newcommand\labelitemiv{\textperiodcentered}
```

#### ■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

2401 \newenvironment{description}{\%

2402 \list{}{%

2403 \labelwidth=\leftmargin

2404 \labelsep=1\jsZw

2405 \advance \labelwidth by -\labelsep

2406 \let \makelabel=\descriptionlabel\}\{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\jsZw}) を入れるのもいいと思います。

 $2407 \verb|\newcommand*\descriptionlabel[1]{\normalfont\headfont $\#1\hfil}|$ 

#### ■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは, 独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので, list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

bxjsreport クラスの abstract 環境は:

- layout=v1 の場合は jsbook + report の動作を継承する。 つまり jsbook と同じに なる。
- layout=v2 の場合は新設の jsreport の動作を継承する。つまり jsarticle (+titlapage) と同じになる。

chapterabstract jsbook の abstract 環境(「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの)を chapterabstract と呼ぶことにする。

```
2408 %<*book|report>
2409 \newenvironment{chapterabstract}{%
      \begin{list}{}{\%}
2410
2411
        \listparindent=1\jsZw
2412
        \itemindent=\listparindent
        \rightmargin=0pt
2413
2414
        \leftmargin=5\jsZw}\item[]}{\end{list}\vspace{\baselineskip}}
2415 %</book|report>
    "普通の" abstract 環境の定義。
2416 %<*article|report|slide>
2417 \newbox\@abstractbox
2418 \if@titlepage
      \newenvironment{abstract}{%
2419
2420
        \titlepage
2421
        \left\langle \right\rangle 
2422
        \@beginparpenalty\@lowpenalty
2423
        \begin{center}%
          \headfont \abstractname
2424
2425
          \@endparpenalty\@M
2426
        \end{center}%
 BXJS クラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。
2427
        \par}%
2428
      {\par\vfil\null\endtitlepage}
2429 \else
      \newenvironment{abstract}{%
2430
        \if@twocolumn
2431
2432
          \ifx\maketitle\relax
2433
            \section*{\abstractname}%
2434
          \else
            \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2435
2436
            \begin{minipage}[b]{\textwidth}
2437
              \small\parindent1\jsZw
              \begin{center}%
2438
                {\mbox{\locality} {\mbox{\locality} \mbox{\locality}} \% }
2439
              \end{center}%
2440
2441
              \left\{ \right\} 
2442
                \listparindent\parindent
2443
                \itemindent \listparindent
```

\rightmargin \leftmargin}%

2444

```
2445
             \item\relax
         \fi
2446
2447
       \else
         \small
2448
         \begin{center}%
2449
           2450
         \end{center}%
2451
2452
         \left\{ \right\} 
           \listparindent\parindent
2453
           \itemindent \listparindent
2454
           \rightmargin \leftmargin}%
2455
         \item\relax
2456
2457
       \fi}{\if@twocolumn
         \ifx\maketitle\relax
2458
2459
2460
           \endlist\end{minipage}\egroup
2461
         \fi
       \else
2462
2463
         \endlist
       \fi}
2464
2465 \fi
2466 %</article|report|slide>
2467 %<*jspf>
2468 \newbox\@abstractbox
2469 \newenvironment{abstract}{\%
     \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
     2471
2472
2473
       \if@english \parindent6\jsc@mmm \else \parindent1\jsZw \fi}%
     {\end{minipage}\egroup}
2474
2475 %</jspf>
   bxjs@force@chapterabstract が真の場合は、abstract 環境を chapterabstract 環境と
 等価にする。
2476 %<*book|report>
2477 \ifbxjs@force@chapterabstract
     \let\abstract\chapterabstract
     \let\endabstract\endchapterabstract
2480 \fi
2481 %</book|report>
```

#### ■キーワード

keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。

2482 %<\*jspf>
2483 %\newbox\@keywordsbox
2484 %\newenvironment{keywords}{%

```
2485 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
2486 % \begin{minipage}[b]{1570\jsc@mmm}{\sffamily Keywords:}\par
2487 % \small\parindent0\jsZw}%
2488 % {\end{minipage}\egroup}
2489 %</jspf>
```

#### ■verse 環境

verse 詩のための verse 環境です。

\advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em

#### ■quotation 環境

2498

quotation 段落の頭の字下げ量を  $1.5 \mathrm{em}$  から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

```
2499 \newenvironment{quotation}{%
2500 \list{}{%
2501 \listparindent\parindent
2502 \itemindent\listparindent
2503 \rightmargin \z@}%
2504 \item\relax}{\endlist}
```

\item\relax}{\endlist}

#### ■quote 環境

```
quote 環境は,段落がインデントされないことを除き,quotation 環境と同じです。
2505 \newenvironment{quote}%
2506 {\list{}{\rightmargin\z@}\item\relax}{\endlist}
```

■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

```
\newtheorem{definition}{定義}
\newtheorem{axiom}{公理}
\newtheorem{theorem}{定理}
```

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、\itshape を削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し, \labelsep を 1zw にし、括弧を全角にしました。

2507 \def\@begintheorem#1#2{\trivlist\labelsep=1\jsZw

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,book クラス でタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても,横組クラスしかありませんでしたので,従来の挙動は何も変わっていません。また,book 以外の場合のページ番号の リセットもコミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが,こちらも 片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので,従来の挙動は 何も変わらずに済みました。

```
2511 \newenvironment{titlepage}{%
2512 %<book>
                \pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24
2513
        \if@twocolumn
2514
          \verb|\@restonecoltrue| one column|
        \else
2515
2516
          \@restonecolfalse\newpage
2517
        \thispagestyle{empty}%
2518
2519
        \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017-02-
2520
      }%
      {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
2521
2522
        \if@twoside\else
2523
          \setcounter{page}\@ne
        \fi}
2524
```

#### ■付録

```
\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。
```

```
2525 %<*!book&!report>
2526 \newcommand{\appendix}{\par
     \setcounter{section}{0}%
2527
2528
     \setcounter{subsection}{0}%
     \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat
2529
     \gdef\presectionname{\appendixname}%
2530
     \gdef\postsectionname{}%
2532 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]
2533
     \gdef\thesection{\presectionname\@Alph\c@section\postsectionname}%
     2534
2535
     \gdef\@secapp{\appendixname}%
2536
     \gdef\@secpos{}%
2537
2538
     \gdef\thesection{\@Alph\c@section}%
     fi
2540 %</!book&!report>
2541 %<*book|report>
```

 $2542 \mbox{ \newcommand{\appendix}{\par}}$ 

2543 \setcounter{chapter}{0}%

2544 \setcounter{section}{0}%

 $2545 \ \gdef\ensuremath{\gdef\ensuremath{\gdef\ensuremath{\gdef}\gdef}\$ 

 $2546 \ \gdef\@chappos{}\%$ 

2548 %</book|report>

#### 8.4 パラメータの設定

#### ■array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 2549 \setlength\arraycolsep{5\p@?}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 2550 \setlength\tabcolsep{6\p0?}

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

2551 \setlength\arrayrulewidth{.4\p0}

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 2552 \setlength\doublerulesep{2\p0}

#### ■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

 $2553 \verb|\setlength\tabbingsep{\labelsep}|$ 

#### ■minipage 環境

**Compfootins minipage** 環境の脚注の **\skip\Compfootins** は通常のページの **\skip\footins** と同じ働きをします。

 $2554 \slip\ensuremath{\texttt{Qmpfootins}} = \slip\footins$ 

#### ■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

2555 \setlength\fboxsep{3\p0?}

2556 \setlength\fboxrule{.4\p0}

#### ■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

```
2557 %<!book&!report>\renewcommand \theequation {\@arabic\c@equation}
2558 %<*book|report>
```

2559 \@addtoreset{equation}{chapter}

 $2560 \mbox{ \lower}$ 

2561 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation} 2562 %</book|report>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておき ます。

2563 % \setlength\jot{3pt}

\@eqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\jsInhibitGlue (\theequation ) \jsInhibitGlue のように和文かっこを使うこと も可能です。

2564 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。

2565 % \def\tagform@#1{\maketag@@@{ (\ignorespaces#1\unskip\@@italiccorr ) }}

#### 8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置 (float placement specifier) です。

\ftype@TYPE フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...)でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

 $\mbox{\colored}$  \Consideration \( num \rangle \text \) キャプションを出力するマクロです。 \( num \rangle \text \) は \fnum \( num \rangle \text \) に の生成する番号、(text) はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

#### ■figure 環境

\c@figure 図番号のカウンタです。

\thefigure 図番号を出力するコマンドです。

2566 %<\*!book&!report>

 $2567 \newcounter{figure}$ 

2568 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}

2569 %</!book&!report>

2570 %<\*book|report>

2571 \newcounter{figure}[chapter]

2572 \renewcommand \thefigure

{\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}

2574 %</book|report>

```
\fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが、ここでは外し
\ftype@figure ました。
    \verb|\ext@figure| 2575 \def\fps@figure{tbp}|
 \fnum@figure 2576 \def\ftype@figure{1}
                                2577 \def\ext@figure{lof}
                                2578 \def\fnum@figure{\figurename\nobreak\thefigure}
                figure *形式は段抜きのフロートです。
              figure * 2579 \newenvironment{figure}%
                                2580
                                                                              {\@float{figure}}%
                                                                              {\end@float}
                                2581
                                2582 \newenvironment{figure*}%
                                                                             {\@dblfloat{figure}}%
                                2583
                                                                              {\end@dblfloat}
                                2584
                                    ■table 環境
           \c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が
         2585 %<*!book&!report>
                                2586 \newcounter{table}
                                2587 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
                                2588 %</!book&!report>
                                2589 %<*book|report>
                                2590 \newcounter{table}[chapter]
                                2591 \text{ } \text{renewcommand } \text{ } \text{thetable}
                                                     {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
                                2592
                                2593 %</book|report>
       \fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが, ここでは外しま
  \ftype@table した。
       \verb|\ext@table| 2594 \\ \efthable {tbp} \\
    \label{eq:condition} $$ \int_{2596 \end{fftype0}} 2596 \end{fftype0} $$ 12596 \end{fftype0} 
                                2597 \def\fnum@table{\tablename\nobreak\thetable}
                  table * は段抜きのフロートです。
                table * 2598 \newenvironment{table}%
                                2599
                                                                              {\@float{table}}%
                                                                              {\end@float}
                                2600
                                2601 \newenvironment{table*}%
                                2602
                                                                              {\@dblfloat{table}}%
                                                                              {\end@dblfloat}
                                2603
```

#### 8.6 キャプション

**\@makecaption** \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。\belowcaptionskip が 0 になっ \belowcaptionskip ていましたので,キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしまうのを直しました。

 $2604 \neq 2604$ 

 $2605 \mbox{\enskip}$ 

2606 \setlength\abovecaptionskip{5\p@?} % 元: 10\p@

2607 \setlength\belowcaptionskip{5\p@?} % 元: 0\p@

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2 cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

```
2608 %<*!jspf>
```

2609 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small}

2610 % \advance\leftskip10\jsc@mmm

2611 % \advance\rightskip10\jsc@mmm

2612 % \vskip\abovecaptionskip

2613 % \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\jsZw\relax #2}%

2614 % \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize

2615 % #1\hskip1\jsZw\relax #2\par

2616 % \else

2617 % \global \@minipagefalse

2618 % \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%

2619 % \fi

2620 % \vskip\belowcaptionskip}}

 $2621 \log \left( \frac{0makecaption#1#2{{\small}}}{2} \right)$ 

2622 \advance\leftskip .0628\linewidth

2623 \advance\rightskip .0628\linewidth

2624 \vskip\abovecaptionskip

2625 \sbox\@tempboxa{#1\zwspace#2}%

2626 \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi

2627 #1\zwspace#2\par

2628 \vskip\belowcaptionskip}}

2629 %</!jspf>

2630 %<\*jspf>

2631  $\long\def\@makecaption#1#2{%}$ 

 $2632 \quad \verb|\vskip| above captionskip|$ 

2633 \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%

2634 \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize

2635 {\small\sffamily

2636 \list{#1}{%

2637 \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}

2638 \itemsep \z@

```
\itemindent \z@
2639
2640
             \labelsep
2641
            \labelwidth 11\jsc@mmm
            \listparindent\z0
2642
             \leftmargin 11\jsc@mmm}\item\relax #2\endlist}
2643
2644
      \else
        \global \@minipagefalse
2645
2646
        \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2647
      \vskip\belowcaptionskip}
2648
2649 %</jspf>
```

### 9 フォントコマンド

ここでは IATEX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ \text...と \math... を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の \scr@DeclareOldFontCommand に倣い、これらの命令を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さないようにするスイッチも付けます。

# \if@jsc@warnoldfontcmd

f@jsc@warnoldfontcmdexception

\if@jsc@warnoldfontcmd はBXJS クラスでは不使用。

\if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態を表す。

```
2650 \newif\if@jsc@warnoldfontcmd
2651 \@jsc@warnoldfontcmdtrue
2652 \newif\if@jsc@warnoldfontcmdexception
2653 \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse
```

#### \jsc@DeclareOldFontCommand

```
2654 \newcommand*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{%
      \g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}%
2655
      \DeclareOldFontCommand{#1}{%
2656
        \bxjs@oldfontcmd{#1}#2%
2657
2658
        \bxjs@oldfontcmd{#1}#3%
2659
2660
      }%
2661 }
2662 \DeclareRobustCommand*{\jsc@warnoldfontcmd}[1]{%
      \ClassInfo\bxjs@clsname
2663
       {Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak
        The first occurrence is}%
2665
2666 }
```

\allowoldfontcommands "二文字フォント命令"の使用を許可する(警告しない)。

```
\disallowoldfontcommands
                         "二文字フォント命令"の使用に対して警告を出す。
                       2667 \newcommand*{\allowoldfontcommands}{%
                             \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue}
                       2669 \newcommand*{\disallowoldfontcommands}{%
                              \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse}
                       2671 \let\bxjs@oldfontcmd@list\@empty
                       2672 \def\bxjs@oldfontcmd#1{%
                              \expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1}
                       2674 \def\bxjs@oldfontcmd@a#1#2{%
                              \if@jsc@warnoldfontcmdexception\else
                               \global\@jsc@warnoldfontcmdfalse
                       2676
                       2677
                               \frak{1}\operatorname{n}
                                 \left| \frac{1}{t} \right|
                       2678
                       2679
                                 \jsc@warnoldfontcmd{#2}%
                               \fi
                       2680
                              fi
                       2681
                       2682 \ensuremath{\verb| def\bxjs@warnoldfontcmd@final{||}}\label{thm: condition}
                       2683 % \par
                              \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
                              \let\@tempa\@empty
                       2685
                              \def\do##1{%
                       2686
                                \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
                       2687
                                 \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
                       2688
                              \bxjs@oldfontcmd@list
                       2689
                       2690
                              \ifx\@tempa\@empty\else
                                \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                       2691
                       2692
                                 {Some old font commands were used in text:\MessageBreak
                                 \space\@tempa\MessageBreak
                       2693
                                 You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak
                       2694
                                 new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak
                       2695
                                 new, combinable font commands. The
                       2696
                                 class provides\MessageBreak
                       2697
                       2698
                                 the old font commands only for compatibility}
                              fi
                       2699
                         単純に \AtEndDocument のフックの中で \bxjs@warnoldfontcmd@final を実行した場
                         合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行される
                         ため捕捉できない。これに対処するため、\end{document} 中に実行される \clearpage の
                         処理の直後に \bxjs....final が呼ばれるようにする。
                       2700 \def\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%
                              \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}
```

2702 \AtEndDocument{\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}

\mc フォントファミリを変更します。

 $\label{thm:command} $$ \graphic $$ \grap$ 

\bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries です。

\it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま \sl せん (警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape \sc です。

\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。

#### 10 相互参照

#### 10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合、上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \l0... というコマンドを実行するので, あらかじめ \l0chapter, \l0section, \l0figure などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \0dottedtocline コマンドを使って定義します。これは

\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\Opnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

**\@dotsep** 点の間隔です (単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが,ここでは一つずつ減らしています。

 $2714 \mbox{newcommand}\mbox{Qpnumwidth}\{1.55em\}$ 

2715 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}

2716 \newcommand\@dotsep{4.5}

2717 %<!book&!report>\setcounter{tocdepth}{2}

2718 % <book | report > \setcounter { tocdepth } { 1}

#### ■目次

\tableofcontents 目次を生成します。

\jsc@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)

2719 \newdimen\jsc@tocl@width

2720 \newcommand{\tableofcontents}{%

2721 %<\*book|report>

2723 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%

 $\tt 2724 \verb|\dim\jsc@tocl@width<|@tempdima|\fi|$ 

2726 \if@twocolumn

2727 \@restonecoltrue\onecolumn

2728 \else

 ${\tt 2729} \qquad {\tt \@restonecolfalse}$ 

2730 \fi

2731 \chapter\*{\contentsname}%

2732 \@mkboth{\contentsname}{}%

2733 %</book|report>

2734 %<\*!book&!report>

2735 \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%

2736 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%

2737 \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima\relax\setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi

 $2738 \\ \verb|\dim|\jsc@tocl@width<2\jszw \divide\jsc@tocl@width by 2 \\ advance\jsc@tocl@width 1\jszw\fine 2000 \\ |\divide\jsc@tocl@width 2000 \\ |\divide\jsc@toclograph| |\divide\jsc@toclograph|$ 

2739 \section\*{\contentsname}%

 $2740 \qquad \verb|\contentsname|{\contentsname}|,$ 

```
2741 %</!book&!report>
               \@starttoc{toc}%
          2743 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
          2744 }
   \1@part 部の目次です。
          2745 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
          2747 %<!book&!report>
                                   \addpenalty\@secpenalty
          2748 % < book | report >
                                 \addpenalty{-\@highpenalty}%
                  \addvspace{2.25em \@plus\p@?}%
          2749
          2750
                  \begingroup
          2751
                    \parindent \z@
          2752 %
                    \@pnumwidth should be \@tocrmarg
          2753 %
                    \rightskip \@pnumwidth
                    \rightskip \@tocrmarg
          2754
          2755
                    \parfillskip -\rightskip
                    {\leavevmode
          2756
                       \large \headfont
          2757
          2758
                       \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
          2759
                       #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
          2760
                    \nobreak
          2761 % < book | report >
                                 \global\@nobreaktrue
          2762 %<book|report>
                                 \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
          2763
                  \endgroup
          2764
                \fi}
\lambda l@chapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。
              [2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by
            ts)
          2765 %<*book|report>
          2766 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
          2767
                \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
          2768
                  \addpenalty{-\@highpenalty}%
                  \addvspace{1.0em \@plus\p@?}
          2769
                  \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
          2770 %
          2771
                  \begingroup
          2772
                    \parindent\z@
                    \rightskip\@pnumwidth
          2773 %
                    \rightskip\@tocrmarg
          2774
          2775
                    \parfillskip-\rightskip
          2776
                    \leavevmode\headfont
          2777 %
                    \% \ if@english\setlength\@lnumwidth{5.5em}\else\setlength\@lnumwidth{4.683\jsZw}\fi
                    \verb|\cline{Clnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth{\ 2.683\jsZw.}|}
          2778
          2779
                    \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                    #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
          2780
          2781
                    \penalty\@highpenalty
                  \endgroup
          2782
          2783
                \fi}
```

# 2784 %</book|report>

```
\l0section 節の目次です。
                               2785 %<*!book&!report>
                               2786 \newcommand*{\l@section}[2]{%
                                           \ifnum \c@tocdepth >\z@
                               2787
                                               \addpenalty{\@secpenalty}%
                               2788
                               2789
                                               \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
                               2790
                                               \begingroup
                               2791
                                                   \parindent\z@
                               2792 %
                                                   \rightskip\@pnumwidth
                               2793
                                                   \rightskip\@tocrmarg
                                                   \parfillskip-\rightskip
                               2794
                                                   \leavevmode\headfont
                               2795
                                                   % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
                               2796 %
                               2797
                                                   \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2\jsZw
                                                   \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                               2798
                                                   #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
                               2800
                                               \endgroup
                               2801
                                           \fi}
                               2802 %</!book&!report>
                                       インデントと幅はそれぞれ 1.5em, 2.3em でしたが、1zw, 3.683zw に変えました。
                               2803 \% \verb|cbook|| report> \% \texttt{\l@section}{\locale} \{1\f1\f3.683\f3Zw\}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f3Zw}{3.683\f
                                       [2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
                                   さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので、要修正かも
     \l@subsection
                                   しれません。
\1@subsubsection
                                       [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
       \1@paragraph
 \verb|\label{loss} $$\loss 2804 \%<*!book&!report>|
                               2805 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                       {\dot{cline}{2}{1.5em}{2.3em}}
                               2806 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
                               2807 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                       {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
                               2808 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
                               2809 %
                               2810 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                       {\@dottedtocline{2}{1zw}{3zw}}
                               2811 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\jsZw}{3\jsZw}}  
                               2812 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                       {\dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}
                               2813 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
                               2814 %
                               2815 \newcommand*{\l@subsection}{%
                                                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                               2816
                               2817
                                                           \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3\jsZw}}
                               2818 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                               2819
                                                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
                                                           \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\jsZw}}
                               2820
                               2821 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
                               2822
```

```
\@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2\jsZw
                                                                    \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
                                   2826
                                   2827 %</!book&!report>
                                   2828 %<*book|report>
                                   2829 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                       {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
                                   2830 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}\{7.0em\}\{4.1em\}\}
                                   2831 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                                       {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
                                   2832 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                                   2833 \newcommand*{\l@section}{%
                                   2834
                                                                    \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                                                                   \cline{1}{\cline{3.683\jsZw}}
                                   2835
                                   2836 \newcommand*{\l0subsection}{\%
                                                                   \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
                                   2837
                                                                   \cline{2}{\cline{2}}{\cline{3.5\jsZw}}
                                   2839 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                                                    \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\jsZw
                                   2840
                                   2841
                                                                    \cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{4.5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}
                                   2842 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                   2843
                                                                    \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\jsZw
                                                                    \cline{4}{\cline{5.5\jsZw}}
                                   2844
                                   2845 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                                                                    \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw
                                   2846
                                                                    \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6.5\jsZw}}
                                   2847
                                   2848 %</book|report>
         \numberline 欧文版 LATEX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
         \@lnumwidth すが,アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
                                       に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
                                       入れておきました。
                                   2849 \newdimen\@lnumwidth
                                   2850 \end{area} $$2850 \end{
\@dottedtocline IATFX 本体 (ltsect.dtx 参照) での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
           \jsTocLine 変えています。
                                            これを変更可能にするため、\jsTocLineというマクロに切り出しました。例えば、仮想
                                       ボディの中央・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ に変更したい場合は
                                            \renewcommand{\jsTocLine}{\leaders \hbox {\hss \hss}\hfill}
                                       とします。
                                   2851 \def\jsTocLine{\leaders\hbox{%}}
                                                $\m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep mu$}\hfill}
                                   2853 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                   2854
                                                \vskip \z0 \@plus.2\p0?
                                                {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
```

\@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5\jsZw}}

2823

2824 \newcommand\*{\l@subparagraph}{%

```
2857
                     \interlinepenalty\@M
              2858
                     \leavevmode
                     \@lnumwidth #3\relax
              2859
                     \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
              2860
                      {#4}\nobreak
              2861
                      \jsTocLine \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
              2862
              2863
                           \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                ■図目次と表目次
\listoffigures 図目次を出力します。
              2864 \newcommand{\listoffigures}{%
              2865 %<*book|report>
              2866 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
              2867
                   \else\@restonecolfalse\fi
              2868
                    \chapter*{\listfigurename}%
                    \@mkboth{\listfigurename}{}%
              2869
              2870 %</book|report>
              2871 %<*!book&!report>
                    \section*{\listfigurename}%
                    \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
              2874 %</!book&!report>
              2875 \@starttoc{lof}%
              2876 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
              2877 }
     \l@figure 図目次の項目を出力します。
              2878 \end{align*} $$ \operatorname{l@figure}_{\c}(\c) = {1}_{1\jsZw}_{3.683\jsZw} $$
 \listoftables 表目次を出力します。
              2879 \newcommand{\listoftables}{\%
              2880 %<*book|report>
              2881 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                   \else\@restonecolfalse\fi
              2882
                   \chapter*{\listtablename}%
                    \@mkboth{\listtablename}{}%
              2884
              2885 %</book|report>
              2886 %<*!book&!report>
                    \section*{\listtablename}%
              2887
                    \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
              2889 %</!book&!report>
              2890 \@starttoc{lot}%
              2891 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
              2892 }
      \lotable 表目次は図目次と同じです。
              2893 \let\l@table\l@figure
```

\parindent #2\relax\@afterindenttrue

2856

#### 10.2 参考文献

\bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。

2894 \newdimen\bibindent

2895 \setlength\bibindent{2\jsZw}

thebibliography 参考文献リストを出力します。

[2016-07-16] L $^{4}$ TEX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を,文献スタイル (.bst) ではよく  $^{6}$  がいまだに用いられることが多いため,thebibliography 環境内では例外的 に出さないようにしました。

```
に出さないようにしました。
2896 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
2897
    \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue
     \global\let\presectionname\relax
2898
     \global\let\postsectionname\relax
2901 %<*kiyou>
    \vspace{1.5\baselineskip}
     \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}%
2903
2904
     \vspace{0.5\baselineskip}
2905 %</kiyou>
2907 % <book | report > \addcontentsline {toc} {chapter} {\bibname} %
2908
      \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
          {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
2909
2910
           \leftmargin\labelwidth
          \advance\leftmargin\labelsep
2911
2912
          \@openbib@code
2913
           \usecounter{enumiv}%
2914
          \let\p@enumiv\@empty
```

\renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%

2916 %<kiyou> \small

2917 \sloppy

2918 \clubpenalty4000

2919 \@clubpenalty\clubpenalty

2920 \widowpenalty4000%

2921 \sfcode`\.\@m}

2922 {\def\@noitemerr

2923 {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%

2924 \endlist}

\newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。

 $2925 \verb|\newcommand{\newblock}{\hskip .11em\\@plus.33em\\@minus.07em}|$ 

\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによって変更されます。

2926 \let\@openbib@code\@empty

\@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 [] を全角 [] に変え, 余 分なスペースが入らないように \jsInhibitGlue ではさみました。とりあえずコメントア ウトしておきますので,必要に応じて生かしてください。

2927 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}

\cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが、コンマとかっこを和文 \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので,必 \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \jsInhibitGlue で取ってい ますので、オリジナル同様、Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。

```
2928 \% \left( \frac{\#1}{\#2} \right)
2929 %
       \let\@citea\@empty
2930 %
      \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
2931 %
         {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
          \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
2932 %
2933 %
          \ifOfilesw\immediate\write\Cauxout{\string\citation{\Cciteb}}\fi
2934 %
          \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
2935 %
            \G@refundefinedtrue
2936 %
            \@latex@warning
              {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
2937 %
2938 %
            {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}}{#1}}
2939 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \jsInhibitGlue}
   引用番号を上ツキの 1)のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に
```

\unskip を付けて先行のスペース(~も)を帳消しにしています。

```
2940 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip}
```

- \@ifnextchar [{\@tempswatrue\@citex}{\@tempswafalse\@citex[]}}
- 2942 % \def\@cite#1#2{ $^{\hbox{\scriptsize}}$ #1\if@tempswa
- 2943 % , \jsInhibitGlue\  $\#2\fi$ }) }}\$}

#### 10.3 索引

theindex 2~3 段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しまし た (Thanks: 藤村さん)。

```
2944 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境
```

```
\if@twocolumn
```

\onecolumn\@restonecolfalse 2946

2947 \else

2948 \clearpage\@restonecoltrue

2949

\columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw

\ifx\multicols\@undefined 2951

2952 %<book|report> \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}% 2953 %<book|report> \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]% 2954 %<!book&!report> \def\presectionname{}\def\postsectionname{}\%

2955 %<!book&!report> \twocolumn[\section\*{\indexname}]%

2956 \else

```
2958
                       \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
           2959
                       \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
                       \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
           2960
                                     \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
           2961 % <book | report>
           2962 % <book | report >
                                     \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
           2963 %<!book&!report>
                                       \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
           2964 %<!book&!report>
                                       \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
           2965
                     \else
           2966 % < book | report >
                                     \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
           2967 % <book | report >
                                     \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
           2968 %<!book&!report>
                                       \def\presectionname{}\def\postsectionname{}\%
           2969 %<!book&!report>
                                       \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
                     \fi
           2970
           2971
                   \fi
           2972 %<book|report>
                                 \@mkboth{\indexname}{}%
           2973 %<!book&!report>
                                   \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
           2974
                   \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
           2975
                   \parindent\z@
                   \parskip\z@ \@plus .3\p@?\relax
           2976
           2977
                   \let\item\@idxitem
                   \raggedright
           2978
           2979
                   \footnotesize\narrowbaselines
           2980
                   \ifx\multicols\@undefined
           2981
                     \if@restonecol\onecolumn\fi
           2982
                   \else
           2983
           2984
                     \end{multicols}
           2985
                   \fi
           2986
                   \clearpage
           2987
 \@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。
   \subitem 2988 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % 元 40pt
\subsubitem ^{2989} \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{2\jsZw}} % \overrightarrow{\pi} 20pt
           2990 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\jsZw}} % 元 30pt
\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。
           2991 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@? \@plus5\p@? \@minus3\p@?\relax}
           索引の \see, \seealso コマンドで出力されるものです。 デフォルトはそれぞれ see, see also
            という英語ですが、ここではとりあえず両方とも「→」に変えました。⇒ ($\Rightarrow$)
             などでもいいでしょう。
           2992 \newcommand\seename{\if@english see\else \rightarrow\fi}
           2993 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else \rightarrow\fi}
```

\ifdim\textwidth<\fullwidth

2957

#### 10.4 脚注

\footnote 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため, \footnotemark \inhibitglue を入れることにします。pLATEX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は, このパッチが不要なのであてません。

> パッチの必要性は「\pltx@foot@penalty が未定義か」で行う。\inhibitglue の代わ りに \jsInhibitGlue を使う。

2994 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined

\let\footnotes@ve=\footnote

2996 \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}

2997 \let\footnotemarks@ve=\footnotemark

\def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve}

2999 \fi

\@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号∗を付けています。「注1」の形式に するには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenext と合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい pTFX では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐた め、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました (Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 pIAT<sub>F</sub>X の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。pIAT<sub>F</sub>X の日付が2016/04/17より新しい場合は、このパッチが不要なのであてません。

pT<sub>F</sub>X 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

\thefootnote 脚注番号に \* 印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは \* 印も脚注番号も付 きません。

[2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しま

[2016-10-08] TODO: 脚注番号が newtxtext や newpxtext の使用時におかしくなってし まいます。これらのパッケージは内部で \thefootnote を再定義していますので, 気になる 場合はパッケージを読み込むときに defaultsups オプションを付けてください (qa:57284,

「注1」の形式にするには次のようにしてください。

3001% \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@ 注\kern0.1\jsZw\@arabic\c@footnote\fi}

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

```
3003
                 \kern-2.6\p0? \kern-.4\p0
                  \hrule width .4\columnwidth
            3005
                 \kern 2.6\p@?}
  \c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。
            3006 % <book | report > \@addtoreset { footnote } { chapter }
\@footnotetext 脚注で \verb が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, TeX and TUG NEWS,
              Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)
                [2016-08-25] コミュニティ版 pIATFX の「閉じ括弧類の直後に\footnotetext が続く場
              合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。
                [2016-09-08] コミュニティ版 pLATEX のバグ修正に追随しました。
                [2016-11-29] 古い pIATrX で使用された場合を考慮してコードを改良。
                [2018-03-11] \next などいくつかの内部命令を \jsc@... 付きのユニークな名前にしま
              した。
            3007 \long\def\@footnotetext{%
                 \insert\footins\bgroup
            3008
            3009
                   \normalfont\footnotesize
            3010
                   \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
                   \splittopskip\footnotesep
            3011
            3012
                    \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
                   \hsize\columnwidth \@parboxrestore
            3013
            3014
                    \protected@edef\@currentlabel{%
            3015
                      \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
                   }%
            3016
                   \color@begingroup
            3017
                     \@makefntext{%
            3018
                       \rule\z@\footnotesep\ignorespaces}%
            3019
                     \futurelet\jsc@next\jsc@fo@t}
            3021 \def\jsc@fo@t{\ifcat\bgroup\noexpand\jsc@next \let\jsc@next\jsc@f@@t
                                             \else \let\jsc@next\jsc@f@t\fi \jsc@next}
            3023 \end{aftergroup} jsc@@foot\et\jsc@next{}
            3024 \left( \frac{1}{1}\right)
            3025 \def\jsc@@foot{\@finalstrut\strutbox\color@endgroup\egroup
                 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined\else
            3026
            3027
                   \ifhmode\null\fi
            3028
                    \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
                     \penalty\pltx@foot@penalty
            3029
                     \pltx@foot@penalty\z@
            3030
                   \fi
            3031
            3032
                 \fi}
 \@makefntext 実際に脚注を出力する命令です。\@makefnmark は脚注の番号を出力する命令です。ここで
              は脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。
```

3002 \renewcommand{\footnoterule}{%

3033 \newcommand\@makefntext[1]{% 3034 \advance\leftskip 3\jsZw

```
3035 \parindent 1\jsZw
```

3036 \noindent

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext[0] $\{...\}$  とすれば番号を付けない 脚注になります。ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので,工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```
3038 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
3039 %
        \begingroup
3040 %
           \lim 1>\z0
3041 %
             \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax
             \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
3042 %
3043 %
           \else
3044 %
             \verb|\unrestored@protected@xdef|@thefnmark{}|%
3045 %
           \fi
3046 % \endgroup
```

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

\@footnotetext}

## 11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

\jsInhibitGlueAtParTop 「段落頭の括弧の空き補正」の処理を \jsInhibitGlueAtParTop という命令にして、これを再定義可能にした。

3048 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

\everyparhook 全ての段落の冒頭で実行されるフック。これの初期値を先述の \jsInhibitGlueAtParTop とする。

```
3049 \verb|\def|| everyparhook{\jsInhibitGlueAtParTop}|
```

3050 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat

 $3051 \verb|\g@addto@macro|\bxjs@begin@document@hook{\everypar{\everyparhook}}|$ 

3052\fi

3047 %

[2016-07-18] \inhibitglue の発行対象を \inhibitxspcode が 2 に設定されているものすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で \@tempa を使っていたのがよくなかったので、プレフィックスを付けて \jsc@tempa にしました (forum:2085)。

[2017-02-13] \jsc@tempa は実はテンポラリではなく「この処理専用のユニーク制御綴」である必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので、専用の命令 \jsc@ig@temp に置き換えました (Issue #54)。

次の  $\$  (@inhibitglue は JS クラスでの  $\$  jsInhibitGlueAtParTop の実装である。エンジンが (u)platex の場合はこれを採用する。

```
3054 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{$0$}}}
3055 \futurelet\@let@token\@@inhibitglue}
3056 \begingroup
3057 \let\GDEF=\gdef
3058 \ \text{CATCODE} = \ \text{catcode}
3059 \let\ENDGROUP=\endgroup
3060 \CATCODE`k=12
3061 \CATCODE`a=12
3062 \CATCODE`n=12
3063 \CATCODE`j=12
3064 \CATCODE\i=12
3065 \CATCODE`c=12
3066 \CATCODE h=12
3067 \CATCODE`r=12
3068 \CATCODE`t=12
3069 \CATCODE`e=12
3070 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
3071 \ENDGROUP
3072 \def\@@inhibitglue{%
                      \expandafter\expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@to
3074 \verb|\expandafter\\| ferpandafter| sc@inhibitglue\\| expandafter | kANJIQCHARACTER#2#3\\| is considered and the constant of t
                      \def\jsc@ig@temp{#1}%
                      \ifx\jsc@ig@temp\@empty
3076
                              \ifnum\the\inhibitxspcode`#2=2\relax
3077
3078
                                      \inhibitglue
3079
                              \fi
```

ここからしばらく「(本物の) \everypar に追加した \everyparhook を保持する」ためのパッチ処理が続く。これは、everyparhook=compat の場合にのみ実行する。

#### 3082 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat

これだけではいけないようです。あちこちに \everypar を初期化するコマンドが隠されていました。

まず,環境の直後の段落です。

3080

3081 \fi

\fi}

 $3053 \if x j\jsEngine$ 

[2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に追随して \clubpenalty のリセット

```
を追加しました。
3083 \def\@doendpe{%
3084
      \@endpetrue
3085
      \def \par{%
        \@restorepar\clubpenalty\@clubpenalty\everypar\ok}\par\@endpefalse}%
3086
      \everypar{{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\dendpefalse\everyparhook}}
3087
   [2017-08-31] minipage 環境にも対策します。
3088 \def\@setminipage{%
      \@minipagetrue
3090
      \everypar{\@minipagefalse\everypar{\everyparhook}}%
3091 }
   \item 命令の直後です。
3092 \def\@item[#1]{%
      \if@noparitem
        \@donoparitem
3094
      \else
3095
3096
        \if@inlabel
          \indent \par
3097
3098
3099
        \ifhmode
          \unskip\unskip \par
3100
3101
        \if@newlist
3102
          \if@nobreak
3103
3104
            \@nbitem
          \else
3105
            \addpenalty\@beginparpenalty
3106
            \addvspace\@topsep
3107
3108
            \addvspace{-\parskip}%
          \fi
3109
3110
        \else
3111
          \addpenalty\@itempenalty
3112
          \addvspace\itemsep
        \fi
3113
3114
        \global\@inlabeltrue
3115
      \everypar{%
3116
3117
        \@minipagefalse
        \global\@newlistfalse
3118
        \if@inlabel
3119
          \global\@inlabelfalse
3120
          {\setbox\z@\lastbox
3121
           \ifvoid\z@
3122
             \kern-\itemindent
3123
           fi}%
3124
          \box\@labels
3125
```

 $\left| y \right|$ 

3126

```
\fi
3127
        \if@nobreak
3128
3129
          \@nobreakfalse
          \clubpenalty \@M
3130
3131
          \clubpenalty \@clubpenalty
3132
          \everypar{\everyparhook}%
3133
3134
        \everyparhook}%
3135
      \if@noitemarg
3136
        \@noitemargfalse
3137
        \if@nmbrlist
3138
3139
          \refstepcounter\@listctr
        \fi
3140
3141
      \sbox\@tempboxa{\makelabel{#1}}%
3142
      \global\setbox\@labels\hbox{%
3143
        \unhbox\@labels
3144
3145
        \hskip \itemindent
3146
        \hskip -\labelwidth
3147
        \hskip -\labelsep
        \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
3148
3149
          \box\@tempboxa
3150
        \else
          \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
3151
3152
        \fi
        \hskip \labelsep}%
3153
3154
      \ignorespaces}
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \section 類の直後に 2回, 前者が 3回目以
 降に実行されます。
3155 \def\@afterheading{%
3156
      \@nobreaktrue
      \everypar{%
3157
3158
        \if@nobreak
          \@nobreakfalse
3159
3160
          \clubpenalty \@M
          \if@afterindent \else
3161
            {\sc}x\z@\arbox}%
3162
          \fi
3163
        \else
3164
          \clubpenalty \@clubpenalty
3165
3166
          \everypar{\everyparhook}%
3167
        \fi\everyparhook}}
```

「\everyparhook 用のパッチ処理」はここまで。

\@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの pIATEX  $2\varepsilon$  は段落の頭にグルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず,不統一でした。そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし,ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので,また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

※luatexja を読みこんだ場合に lltjcore.sty によって上書きされるのを防ぐため遅延させる。

```
3169 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none\else
3170 \AtEndOfPackage{%
3171 \def\@gnewline #1{%
     \ifvmode
3172
3173
        \@nolnerr
3174
      \else
        \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
3175
        \jsInhibitGlue \ignorespaces
3176
     \fi}
3177
3178 }
3179 \fi
```

## 12 いろいろなロゴ

LATeX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は jslogo パッケージに移転しました。後方互換のため, jsclasses ではデフォルトでこれを読み込みます。nojslogo オプションが指定されている場合は読み込みません。

BXJS クラスでも jslogo オプション指定の場合に jslogo パッケージを読み込むように した。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。

※ \小、\上小の制御綴は定義しない。

#### amsmath との衝突の回避 13

\ltx@ifnextchar amsmath パッケージでは行列中で \@ifnextchar を再定義していますが, これが LATFX の \ProvidesFile \ProvidesFile で悪さをする例が FTeX で報告されています。これを避けるための tDB さ んのフィックスを挿入しておきます。副作用がありましたらお知らせください。

> この現象については私の TeX 掲示板 4273~, 16058~ で議論がありました。なお, AMS 関係のパッケージを読み込む際に psamsfonts オプションを与えても回避できます (Thanks: しっぽ愛好家さん)。

> [2016-11-19] 本家の ltclass.dtx 2004/01/28 v1.1g で修正されているのでコメントアウト しました。

```
3190 %\let\ltx@ifnextchar\@ifnextchar
3191 %\def\ProvidesFile#1{%
3192 % \begingroup
3193 %
       \catcode`\ 10 %
       \ifnum \endlinechar<256 %
3194 %
3195 %
         \ifnum \endlinechar>\m@ne
           \catcode\endlinechar 10 %
3196 %
3197 %
         \fi
3198 %
       \fi
       \@makeother\/%
3199 %
3200 %
       \@makeother\&%
       3201 %
```

#### 初期設定 14

#### ■いろいろな語

```
\prepartname
  \postpartname 3202 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
\prechaptername ^{3203} \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
             3204 %<book|report>\newcommand{\prechaptername}{\if@english Chapter~\else 第\fi}
\postchaptername _{3205} %<book|report>\newcommand{\postchaptername}{\if@english\else 章\fi}
\presectionname 3206 \newcommand{\presectionname}{}% 第
\postsectionname ^{3207} \newcommand{\postsectionname}{}% 節
  \contentsname
\listfigurename 3208 \newcommand{\contentsname}{\if@english Contents\else 目次\fi}
 3210 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
      \refname
      \bibname 3211 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
    3213 \mbox{ newcommand{\indexname}{\indexname}} Index\else 索引\fi}
```

#### \figurename

```
\tablename 3214 %<!jspf>\newcommand{\figurename}{\if@english Fig.~\else 図\fi} 3215 %<jspf>\newcommand{\figurename}{Fig.~} 3216 %<!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi} 3217 %<jspf>\newcommand{\tablename}{Table~}
```

#### \appendixname

```
\abstractname 3218 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
3219 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
3220 %<!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}
```

■今日の日付 LATeX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦 にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \和暦 と書いてください。

環境変数 SOURCE\_DATE\_EPOCH / FORCE\_SOURCE\_DATE が設定されている場合は"今日"が過去・未来の日付になる可能性がある。BXJS クラスでは、和暦の扱いは bxwareki パッケージに任せる。

※ 2.0 版より、完全に bxwareki に任せる。

```
3221 \verb|\conlypreamble\bxjs@decl@Seireki@cmds|
3222 \@tempswafalse
3223 \ \text{if p\jsEngine \dempswatrue \fi}
3224 \inf n\jsEngine \@tempswatrue \fi
3225 \bxjs@cond\if@tempswa\fi{%
3226 % 欧文 8bitTeX の場合
3227 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
3228 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
3229
     \def\西暦{\jsSeirekitrue}%
     \def\和暦{\jsSeirekifalse\bxjs@wareki@used}}
3231 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
3232 \def\Wareki{\jsSeirekifalse\bxjs@wareki@used}
3233 \def\bxjs@if@use@seireki{\bxjs@cond\ifjsSeireki\fi}
3234 \def\bxjs@iai{\noexpand~}
3235 }{%
3236 \newif\if 西暦 \西暦 true
3237 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
     \def\西暦{\西暦 true}%
3239 \def\和暦{\西暦 false\bxjs@wareki@used}}
3240 \def\Seireki{\西暦 true}
3241 \def\Wareki{\西暦 false\bxjs@wareki@used}
3242 \def\bxjs@if@use@seireki{\bxjs@cond\if 西暦\fi}
3243 \let\bxjs@iai\@empty
3244 }
3245 \bxjs@decl@Seireki@cmds
3246 \let\bxjs@unxp\@firstofone \let\bxjs@onxp\@firstofone
3247 \bxjs@test@engine\unexpanded{%
3248 \let\bxjs@unxp\unexpanded \def\bxjs@onxp{\unexpanded\expandafter}}
```

```
\ifbxjs@bxwareki@avail bxwareki パッケージが使用できるか。
                     3249 \newif\ifbxjs@bxwareki@avail
                     3250 \IfFileExists{bxwareki.sty}{%
                           \RequirePackage{bxwareki}[]%
                           \bxjs@bxwareki@availtrue}{}
                     3252
    \bxjs@wareki@used 和暦が非対応の場合に警告を出す。
                     3253 \ifbxjs@bxwareki@avail \let\bxjs@wareki@used\@empty
                     3254 \else
                           \bxjs@robust@def\bxjs@wareki@used{%
                     3255
                     3256
                             \global\let\bxjs@wareki@used\@empty
                             \ClassWarning\bxjs@clsname
                     3257
                     3258
                              {Wareki mode is not supported, since\MessageBreak
                               'bxwareki' is unavailable, found}}
                     3259
                     3260
                           \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                             \let\bxjs@wareki@used\@empty}
                     3261
                     3262 \fi
              \jayear 和暦における年の表記(元号+年数)。
              \heisei 年数を表す整数レジスタで、元号が「平成」である場合にのみ定義される。
                     3263 \ifbxjs@bxwareki@avail
                     3264
                           \let\jayear\warekiyear
                     3265
                           \def\bxjs@tmpa{H}\ifx\bxjs@tmpa\warekigengoinitial
                     3266
                             \newcount\heisei \heisei=\value{warekiyear}
                     3267
                           \fi
                       bxwareki が使えない場合は西暦表示にする。
                     3268 \else
                           \edef\jayear{\the\year \bxjs@iai}
                     3269
                     3270 \fi
               \today 英語、西暦、和暦で場合分けをする。
                     3271 \let\bxjs@next\relax
                     3272 \verb|\| ifbxjs@bxwareki@avail \\| ifx\warekigengo\\| @empty\\| else
                          \def\bxjs@next{\bxjs@onxp{\warekitoday}}
                     3274 \fi\fi
                     3275 \edef\bxjs@today{%
                     3276
                           \if@english
                     3277
                             \ifcase\month\or
                     3278
                               January\or February\or March\or April\or May\or June\or
                     3279
                               July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
                               \space\number\day, \number\year
                     3280
                           \else
                     3281
                             \ifx\bxjs@next\relax \expandafter\@firstoftwo
                     3282
                     3283
                             \else \noexpand\bxjs@if@use@seireki
                     3284
                             \fi {%
                               \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
                     3285
```

\bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%

3286

```
3287 \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{日}%
3288 }{\bxjs@next}%
3289 \fi}
3290 \let\today\bxjs@today

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.1
```

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.ldf)が読み込まれた場合に影響を受けないようにする。

```
3291 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
3292 \ifx\bbl@jpn@maybekansuji\@undefined\else
3293 \bxjs@decl@Seireki@cmds
3294 \g@addto@macro\datejapanese{%
3295 \let\today\bxjs@today}%
3296 \fi}
```

# **■ハイフネーション例外** $T_{EX}$ のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

3297 \hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-script}

#### ■ページ設定 ページ設定の初期化です。

```
3298 %<slide>\pagestyle{empty}%
3300 % <book > \pagestyle {headings}%
3301 \pagenumbering{arabic}
3302 \if@twocolumn
     \twocolumn
3303
3304
     \sloppy
3305
     \flushbottom
3306 \else
     \onecolumn
3307
3308
     \raggedbottom
3309 \fi
3310 %<*slide>
     \renewcommand\familydefault{\sfdefault}
3312
     \raggedright
3313 %</slide>
```

#### ■BXJS 独自の追加処理 灣

```
フックを実行する。
3314 \bxjs@pre@jadriver@hook
和文ドライバのファイルを読み込む。
3315 \input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}
おしまい。
```

3316 %</class>

以上です。

## 付録 A 和文ドライバの仕様 湾

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、 ★印を付けたものは"書込"が許されるものである。

• \jsDocClass [文字トークンの let] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一致 する (\if で判定可能)。

\jsArticle bxjsarticle クラス

\jsBook bxjsbook クラス

\jsReport bxjsreport クラス

\jsSlide bxjsslide クラス

- \jsEngine [文字トークンの let] 使用されているエンジンの種別。(\if で判定 可能)。
  - p pdfT<sub>F</sub>X (DVI モードも含む)
  - 1 Lua $T_{FX}$  (")
  - x X7TFX
  - j pT<sub>F</sub>X または upT<sub>F</sub>X
  - n 以上の何れでもない
- \ifjsWithupTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが upTpX であるか。
- \ifjsWitheTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが  $\varepsilon$ -TeX 拡張であるか。
- \ifjsInPdfMode [スイッチ] 使用されているエンジンが (pdfT<sub>E</sub>X・LuaT<sub>E</sub>X の) PDF モードであるか。
- \jsUnusualPtSize [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、 11pt、12pt のいずれでもない場合の \@ptsize の値。(\@ptsize 自体があまり有用でないと思われる。)
- \jsScale [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対する スケール。クラスオプション scale で指定される。(既定値は 0.924715。)
- \jsJaFont [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション jafont で指定された値。
- \jsJaParam [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まってなくて、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション japaram で指定された値。
- \jsInhibitGlue [マクロ] \inhibitglue という命令が定義されていればそれを 実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで \inhibitglue を用いている箇所 は全て \jsInhibitGlue に置き換えられている。従って、\inhibitglue は未定義 でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- \jsInhibitGlueAtParTop [マクロ] ★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- \jsZw [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで zw 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際に

用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に \jsScale  $\times$  (フォントサイズ) であると定められている(フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に \jsScale の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- \jsFontSizeChanged [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- \jsResetDimen [マクロ]★ 上記 \jsFontSizeChanged の中で呼び出される、ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

3317 %<\*drv>

# 付録 B 和文ドライバ: minimal 🕾

jadriver の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、standard ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ(xeCJK や  $LuaT_EX$ -ja 等)を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、 $(u)pT_EX$  エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

## B.1 補助マクロ

3318 %<\*minimal>

3319 %% このファイルは日本語文字を含みます

\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand。

3320 \def\DeclareJaTextFontCommand#1#2{%

3321 \DeclareRobustCommand#1[1]{%

3322 \relax

3323 \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi

3324 {#2##1}}%

3325 }

\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。

 $3326\ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc de$ 

3328 \relax

 ${\tt 3330} \qquad {\tt \nfss@text{\fontfamily\familydefault}}$ 

3331 \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax

3332 #2##1}%

```
3333 }%
                 3334 }
\bxjs@if@sf@default \familydefault の定義が "\sfdefault" である場合に引数のコードを実行する。
                 3335 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
                 3336 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
                 3337 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
                      \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
                      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                 3339
                        \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
                 3340
                 3341 }
   \jsInverseScale \jsScale の逆数。
                  ※\CS=\jsInverseScale\CS は \bxjs@invscale\CS\jsScale よりも精度が劣るが処理
                 3342 \@tempdima\p@ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                 3343 \edef\jsInverseScale{\strip@pt\@tempdima}
    \jsLetHeadChar \jsLetHeadChar\CS{(トークン列)}: トークン列の先頭の文字を抽出し、\CS をその文
                  字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。
                   ※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は \CS は \relax に等置される。
                   ※文字トークンは"\the-文字列"のカテゴリコードをもつ。
                   ※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位
                  バイトの場合は1文字分のバイト列(のトークン列)を抽出する。この場合は元のカテゴリ
                   コードが保持される。
                 3344 \ensuremath{\mbox{def\jsLetHeadChar}\#1\#2\%}
                     \begingroup
                 3345
                 3346
                        \escapechar=`\\ %
                        \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
                 3347
                        \bxjs@let@hchar@exp#2}%
                 3348
                 3349
                      \endgroup
                      \let#1\bxjs@g@tmpa}
                 3350
                 3351 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
                      \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
                 3352
                 3353 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
                      \bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi{% 波括弧
                 3354
                        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                 3355
                      }{\bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi{% 空白
                 3356
                        \bxjs@let@hchar@out\let\space%
                 3357
                      }{\bxjs@cond\if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi{% バックスラッシュ
                 3358
                        \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
                 3359
                      }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}}
                 3360
                 3361 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
                      \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
                 3363 \def\bxjs@let@hchar@exp@c#1#2\@nil{%
                 3364 %\message{<#1#2>}%
```

3365 \bxjs@cond\if#1\@backslashchar\fi{% 制御綴

```
3366
        \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
3367
          \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3368
        }{%else
          \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
3369
3370
        }%
3371
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@chr#1%
3372
3373
3374 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3376 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
      \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
3377
      \toks@\bgroup}% skip to right brace
 UTF-8 のバイト列を扱うコード。
3379 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
3380 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
3381 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
3382 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
3383 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
3384 \verb|\let\bxjs@let@hchar@chr@ue@a\bxjs@let@hchar@chr\\
3385 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
      \@tempcnta=`#1\relax
3387 %\message{\the\@tempcnta}%
      \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
3389
3390
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
3391
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
3392
3393
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
3394
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
3395
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
3397
3398
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3399
      }}}}}
3400
3401 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3403 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}
3405 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{%}}
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}
3407 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%}
      \bxjs@let@hchar@out\\def{{#1#2#3#4}}}
```

## B.2 (u)pTFX 用の設定

3409 \ifx j\jsEngine

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラス で除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ \jsLetHeadChar を和文文字トークンに対応させる。

```
3410 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1#2{%
     \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#2\relax#1#2}
3412 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3#4{%
3413 %\message{(\meaning#3:\meaning#4)}%
     \bxjs@cond\if#1k\fi{%
       \bxjs@let@hchar@out\def{{#4}}%
3415
3416 }{%else
       \bxjs@let@hchar@chr@ue#3#4%
3417
3418
3419 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@pp
```

■エンジン依存の定義 最初にエンジン (pTrX か upTrX か) に依存する定義を行う。 \ifjsWithupTeX は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが upTrX である かを表す。

\jsc@JYn および \jsc@JTn は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを

```
3420 \edef\jsc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi}
3421 \verb|\edgf\| JT2\| JT2\| JT1\| fif
3422 \edf\jsc@pfx@{\ifjsWithupTeX u\fi}
```

\bxjs@declarefontshape は標準の和文フォント宣言である。後で \bxjs@scale を求 めるため一旦マクロにしておく。\bxjs@sizereference は全角幅を測定する時に参照する

まず upTrX の場合の定義を示す。JS クラスの uplatex オプション指定時の定義と同じ である。

```
3423 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
3424 \ifjsWithupTeX
3425 \def\bxjs@declarefontshape{%
3426 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} 19426 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} 19426 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} 19426 \ensuremath{\mbox{$1$}} 19426 \ensurem
3427 \ensuremath{\mbox{\sc loss}} \{gt\}\{m\}\{n\}\{<->s*[\bxjs@scale]\upjpngt-h\}\{\}\%
3428 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} 122 \ensuremath{\mbox{$1$}} 123 \ensuremath{\mbo
3429 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {$12} {gt}_m}_{n} <-> *[\bxjs@scale] upjpngt-v}_{}\%
3430 }
3431 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}
```

pT<sub>F</sub>X の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じで ある。

```
3432 \else
3433 \def\bxjs@declarefontshape{%
3434 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jis}{}%
3435 \DeclareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jisg}{}%
3436 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {mc}_{m}_{n}_{<->s*[\mbox{\mbox{\mbox{$2$}}}} {min10}_{}% \mbox{\mbox{\mbox{$3$}}} {months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}_{months}
```

```
3437 \end{T1} gt {m}{n} <-> s*[\bxjs@scale] tgoth10}{} % $a = 1, \color=1, \color=1,
3438 }
3439 \def\bxjs@sizereference{jis}
3440 \fi
                既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。
3441 \def\bxjs@next#1/#2/#3/#4/#5\relax{%
3442 \def\bxjs@tmpb{#5}
3443 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@tmpb{10}%
3444 \ensuremath{\setminus} else
3445 \expandafter\expandafter\bxjs@next
3446 \expandafter\string\the\jfont\relax
3447 \fi
3448 \@for\bxjs@tmpa:={\jsc@JYn/mc/m/n,\jsc@JYn/gt/m/n,%
3449
                                                                                \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
                         {\expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/10\endcsname=\@undefined
3450
3451
                             \expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/\bxjs@tmpb\endcsname=\@undefined}
```

■和文フォントスケールの補正 実は、 $pT_EX$  の標準的な和文フォント(JFM のこと、例えば jis)では、指定された \jsScale(この値を s とする)をそのまま使って定義すると期待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1 zw の大きさが指定されたサイズではなく既にスケール(この値を f とする;jis では 0.962216 倍)が掛けられた値になっているからである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ \bxjs@scale に保存する。

```
3452 \begingroup
3453 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
     \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
     3456 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
3457
    \ifdim\wd\z@=10pt
3458
       \global\let\bxjs@scale\jsScale
    \else
3460 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
       \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
3461
3462
       \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
       \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
3463
       \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
3464
3465
     \fi
3466 \endgroup
3467 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}
```

■和文フォント関連定義 \bxjs@scale が決まったので先に保存した標準和文フォント宣言を実行する。

```
3468 \bxjs@declarefontshape
```

フォント代替の明示的定義。

```
3469 \end{areFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{} 3470 \end{areFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{} 3471 \end{areFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{}} 3471 \end{areFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{}}
```

```
3472 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} f(t) {\color=0.05cm} f(t) {\color=
3473 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{s1}} <-> sub*gt/m/n}{}
3475 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}sub*gt/m/n}{}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}{c-}sub*gt/m/n}{}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}{c-}sub*gt/m/n}{}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}sub*gt/m/n}{}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}{c-}sub*gt/m/n}{}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}{
3476 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3477 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c}}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mb
3478 \ensuremath{\mbox{NeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{b}{n}{<->ssub*mc/bx/n}{}}
3479 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{$1$}} for
3480 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} sl}{<->ssub*mc/bx/n}{} \label{localize} 3480 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} and \ensuremath{\mbox{$1$}} a
3481 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3482 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{it}} <-> ssub*gt/bx/n}{}
3483 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} $$
3485 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}} <-> sub*mc/m/n}{}
3487 \ensuremath{\mbox{\sc 0JTn}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}
3488 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}}} \label{thm:linear} 3488 \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \label{thm:linear} 3488 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \label{thm:linear} 3488 \ensuremath{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \label{thm:linear} 3488 \ensuremath{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \label{thm:linear} 3488 \ensuremath{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \label{thm:linear} 3488 \ensuremath{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbo
3489 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3490 \ensuremath{\texttt{Nord}} fmc} \ensuremath{\texttt{Shape}} \ensuremath{\texttt{Shape}} fmc} fmc} \ensuremath{\texttt{Shape}} fmc} fmc} \ensuremath{\texttt{Shape} fmc} fmc} fmc} f
3491 \ensuremath{\texttt{NoclareFontShape}} \gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3493 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} n {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} n {\ensuremath{\m
3495 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{s1}} <-> ssub*mc/bx/n}{}
3496 \ensuremath{\mbox{\sc 0JTn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3497 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 195 \ensuremath{\mbox{$\sim$}} 195 \ensuremath{\mbo
3498 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}}} {\ensuremath{\mbox{$\sim$}}} {\ensuremath{\mbox{$\sim$}}}
                                欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
             関係の定義を行う。
                ※ 2020-02-02 の NFSS の改修に対する jsclasses の対策を取り入れた。
3499 \ensuremath{ \mbox{ \sc on} \{2020/10/01\} }
                                                                    {\jsc@needsp@tchfalse}{\jsc@needsp@tchtrue}
3500
3501 \ifjsc@needsp@tch
                                                                                                                                                                                                                                                                          % --- for 2020-02-02 or older BEGIN
3502 \ifx\@rmfamilyhook\@undefined % old
3503 \DeclareRobustCommand\rmfamily
                                                      {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
3504
                                                             \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3505
3506 \DeclareRobustCommand\sffamily
                                                     {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
3507
                                                             \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3508
3509 \DeclareRobustCommand\ttfamily
                                                     {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
3510
3511
                                                             \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3512 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                  \ifx\mweights@init\@undefined\else % mweights.sty is loaded
3513
                                                                    % my definitions above should have been overwritten, recover it!
3514
                                                                    % \selectfont is executed twice but I don't care about speed...
3515
                                                                      \expandafter\g@addto@macro\csname rmfamily \endcsname
3516
```

```
{\kanjifamily\mcdefault\selectfont}%
3517
3518
        \expandafter\g@addto@macro\csname sffamily \endcsname
3519
          {\kanjifamily\gtdefault\selectfont}%
        \expandafter\g@addto@macro\csname ttfamily \endcsname
3520
          {\kanjifamily\gtdefault\selectfont}%
3521
     \fi}
3522
                                   % 2020-02-02
3523 \else
3524 \verb|\g@addto@macro\\| @rmfamilyhook
      {\prepare@family@series@update@kanji{mc}\mcdefault}
3526 \g@addto@macro\@sffamilyhook
      {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3528 \g@addto@macro\\@ttfamilyhook
      {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3530 \fi
3531 \else % --- for 2020-02-02 or older END & for 2020-10-01 BEGIN
3532 \AddToHook{rmfamily}%
      {\prepare@family@series@update@kanji{mc}\mcdefault}
3534 \AddToHook{sffamily}%
      {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3536 \AddToHook{ttfamily}%
3537
      {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
         % --- for 2020-10-01 END
3538 \fi
3539 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\@undefined
3540 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3541 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3542 \fi
3543 \bxjs@if@sf@default{%
     \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
   念のため。
3545 \setminus selectiont
   \bxjs@parse@qh の処理は pTFX 系では不要になるので無効化する(つまり
 \jsSetQHLength は \setlength と等価になる)。
3546 \def\bxjs@parse@qh#1{\let\bxjs@tmpb\relax}
3547 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
3548 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
 ■パラメタの設定
3549 \prebreakpenalty\jis"2147=10000
3550 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
3551 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
3552 \inhibitxspcode`!=1
3553 \in \mp 2
3554 \times -+=3
3555 \xspcode \\=3
   "80~"FF の範囲の \spcode を 3 に変更。
3556 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{\%
```

\xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne} \jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。 3558 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue \jsResetDimen は空のままでよい。 ■組方向依存の処理 組方向判定の if-トークン (\if?dir) は pTpX 以外では未定義である ため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に!をエスケープ 文字に使う。 3559 \begingroup 3560 \catcode \!=0 \bxjs@ptex@dir 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。 3561 \gdef\bxjs@ptex@dir{% 3562 !iftdir t% 3563 !else!ifydir y% 3564 !else ?% 3565 !fi!fi} 新版の pTFX で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。 ※現在の pIATrX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、\@makefnmark の定義 が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。 3566% 古い \@makefnmark の定義 !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}% !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}} 3570 \ifx\@makefnmark\bxjs@tmpa  $3571 \ensuremath{\mbox{\long\gdef}\mbox{\mbox{\mbox{\sc makefnmark}}}\xspace \ensuremath{\mbox{\sc makefnmark}}\xspace \ensuremath{\mbox{\sc makefnmark}}\$ !ifydir \hbox{}\hbox{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\hbox{}% 3573 !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi} 3574 \fi

エスケープ文字の変更はここまで。

3575 \endgroup

■minijs パッケージのブロック やっておく。

 $3576 \verb|\Cnamedef{ver@minijs.sty}{} |$ 

## B.3 pdfT<sub>E</sub>X 用の処理

```
3577 \else\ifx p\jsEngine
3578 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@ue
3579 \@onlypreamble\bxjs@cjk@loaded
3580 \def\bxjs@cjk@loaded{%
3581 \def\@footnotemark{%
3582 \leavevmode
3583 \ifhmode
```

```
\edef\@x@sf{\the\spacefactor}%
                     3584
                               \ifdim\lastkern>\z@\ifdim\lastkern<5sp\relax
                     3585
                                  \unkern\unkern
                     3586
                                  \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
                     3587
                     3588
                               \nobreak
                     3589
                             \fi
                     3590
                     3591
                             \@makefnmark
                             \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
                     3592
                     3593
                             \relax}%
                           \let\bxjs@cjk@loaded\relax
                     3594
                     3595 }
                     3596 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                           \@ifpackageloaded{CJK}{%
                     3597
                     3598
                             \bxjs@cjk@loaded
                     3599
                           }{}%
                     3600 }
                       B.4 X<sub>TF</sub>X 用の処理
                     3601 \else\ifx x\jsEngine
                         \bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を
                       適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。
                     3602 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
                           \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
                     3603
                     3604
                           \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
                     3605
                             \bxjs@let@hchar@chr@xe
                          }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
                     3606
                     3607 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
                     3608
                           \lccode`0=`#1\relax
                           \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}
                     3609
 \bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。
                     3610 \@onlypreamble\bxjs@do@precisetext
                     3611 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\Qundefined\else
                           \def\bxjs@do@precisetext{%
                     3613
                             \XeTeXgenerateactualtext=\@ne}
                     3614\fi
\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。
                     3615 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
                     3616 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
                     3617
                           \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
                     3618
                           \ensuremath{\verb|\lambu| the\xeTeXline| the\z@} = \z@
                             \jsSimpleJaSetup
                     3619
                             \ClassInfo\bxjs@clsname
                     3620
                              {'\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
                     3621
                           \fi\fi}
                     3622
```

```
\jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。
              3623 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
                    \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
              3624
                    \XeTeXlinebreakskip=Opt plus 1pt minus 0.1pt\relax
              3625
                    \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}
                B.5
                     後処理(エンジン共通)
              3627 \fi\fi\fi
                  simplejasetup オプションの処理。
              3628 \verb|\ifx\bxjs@do@simplejasetup\@undefined\else|
                    \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                      \ifbxjs@simplejasetup
              3630
              3631
                        \bxjs@do@simplejasetup
              3632
                      \fi}
              3633 \fi
                  precisetext オプションの処理。
              3634 \ifbxjs@precisetext
                    \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
              3635
              3636
                      \ClassWarning\bxjs@clsname
                       {The current engine does not support the \MessageBreak
              3637
              3638
                        'precise-text' option\@gobble}
              3639
                    \else
              3640
                      \bxjs@do@precisetext
                    \fi
              3641
              3642 \fi
                ■段落頭でのグルー挿入禁止 本体開始時において \everyparhook を検査して、"結局何
                もしない"ことになっている場合は、副作用を完全に無くすために \everyparhook を空に
                する。
              3643 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                    \ifx\jsInhibitGlueAtParTop\@empty
                      \def\bxjs@tmpa{\jsInhibitGlueAtParTop}%
              3645
                      \ifx\everyparhook\bxjs@tmpa
                        \let\everyparhook\@empty
              3647
                      \fi
              3648
                    \fi}
              3649
                  everyparhook=modern の場合の、\everyparhook の有効化の実装。
                ※本体開始時ではなく最初から有効化していることに注意。
              3650 \verb|\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@modern|
                まず \everypar を "乗っ取る" 処理を行う。
                    \let\bxjs@everypar\everypar
              3651
```

そして本物の \everypar では、最後で常に \everyparhook が実行されるようにする。

3652

\newtoks\everypar
\everypar\bxjs@everypar

3654 \bxjs@everypar{\the\expandafter\everypar\everyparhook}% 3655 \fi

■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が true であり、かつ fancyhdr が使用された場合に以下の対策を行う。

- デフォルトの書式設定に含まれる"二文字フォント命令"を除去する。
- bxjsbook において、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に変える。

3656 \ifbxjs@fancyhdr

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実行の間で実行されるべき。

3657 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr

3658 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{%

ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、"二文字フォント命令" を除去したものに置き換える。

※和文なので \sl は無い方がよいはず。

- 3659 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\rightmark}\strut}%
- 3660 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\rightmark}\strut}%
- $3661 \ \footnote{1} \ \footnote{1}$
- $3662 \ \footnote{1}{ifx\footnote{1}{ifx\footnote{1}{ifx\footnote{1}{ifx}\footnote{1}{ifx}\footnote{1}{ifx\footnote{1}{ifx}\footnote{1}{ifx\footnote{1}{ifx}\footnote{1}{ifx}\footnote{1}{ifx\footnote{1}{ifx}\footnote{1}{ifx}\footnote{1}{ifx\footnote{1}{ifx}\foo$
- 3664 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- 3665 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\leftmark}\strut}%
- $3666 $$ \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\left\langle \right\rangle }\$
- 3667 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
- 3668 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
- $3669 \ \footnote{1}{c} \ \fo$
- 3670 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- 3671 \def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}%
- 3672 \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}%
- 3673 \ifx\f@ncyecf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyecf\bxjs@tmpb \fi
- 3674 \ifx\f@ncyocf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyocf\bxjs@tmpb \fi

\fullwidth が(定義済で)\textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に合わせる。

- 3675 \ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth
- 3676 \setlength{\@tempdima}{\fullwidth-\textwidth}%
- 3677 \edef\bxjs@tmpa{\noexpand\fancyhfoffset[EL,OR]{\the\@tempdima}%
- 3678 }\bxjs@tmpa
- 3679 \fi\fi
- 3680 \PackageInfo\bxjs@clsname
- 3681 {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}}

 $\bxjs@pagestyle@hook$   $\pagestyle \land O フックの本体$ 。

3682 \def\bxjs@pagestyle@hook{%

3683 \@ifpackageloaded{fancyhdr}{%

```
\bxjs@adjust@fancyhdr
           3684
                   \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax
           3685
           3686
               \pagestyle にフックを入れ込む。
           3687 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle
           3688 \def\pagestyle{%
                \bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}
               begin-document フック。
             ※これ以降に fancyhdr が読み込まれることはあり得ない。
           3690 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
           3691
                \bxjs@pagestyle@hook
           3692
                 \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
             ■和文空白命令
           3693 \ \ ifbxjs@jaspace@cmd
 \jaenspace 半角幅の水平空き。
           3694
                \def\jaenspace{\hskip.5\jsZw\relax}
\jathinspace 和欧文間空白を入れるユーザ命令。
             ※ minimal ではダミー定義。
                \def\jathinspace{\hskip\z@skip}
        \_ 全角空白文字 1 つからなる名前の制御綴。\zwspace と等価になる。
           3696 \setminus \{xyspace\}
   \jaspace jlreq クラスと互換の命令。
                 \DeclareRobustCommand*{\jaspace}[1]{%
           3697
           3698
                   \expandafter\ifx\csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname\relax
                    \ClassError\bxjs@clsname
           3699
                     {Unknown jaspace: #1}{\@eha}%
           3700
           3701
           3702
                    \csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname
           3703
                  \fi}
           3704
                 \def\bxjs@jaspace@@zenkaku{\hskip 1\jsZw\relax}
                 \def\bxjs@jaspace@@nibu{\hskip .5\jsZw\relax}
           3705
                 \def\bxjs@jaspace@@shibu{\hskip .25\jsZw\relax}
           3706
           3707\fi
               終わり。
           3708 \fi
               以上で終わり。
           3709 %</minimal>
```

## 付録 C 和文ドライバ: standard 🕸

標準のドライバ。

- \rmfamily/\sffamily/\ttfamily での和文ファミリ連動
- \mcfamily/\gtfamily
- \textmc/\textgt
- \zw
- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \setxkanjiskip/\getxkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing
- $\bullet \ \ \verb|\autoxspacing| \verb|\noautoxspacing| \\$

## ■和文フォント指定の扱い

## C.1 準備

まず minimal ドライバを読み込む。

3710 %<\*standard>

3711 %% このファイルは日本語文字を含みます

3712 \input{bxjsja-minimal.def}

simplejasetup は standard では無効になる。

3713 \bxjs@simplejasetupfalse

## C.2 和文ドライバパラメタ

japaram の値を key-value リストとして解釈する。keyval のファミリは bxjsStd とする。

\ifbxjs@jp@jismmiv 2004JIS 字形を優先させるか。

3714 \newif\ifbxjs@jp@jismmiv

jis2004 オプションの処理。

 $3715 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@true}\bxjs@jp@jismmivtrue| \\$ 

 $3716 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@false}\bxjs@jp@jismmivfalse| \\$ 

3717 \define@key{bxjsStd}{jis2004}[true]{%

3718 \bxjs@set@keyval{jis2004}{#1}{}}

\ifbxjs@jp@units 和文用単位(zw、zh、(true)Q、(true)H)を使えるようにするか。 3719 \newif\ifbxjs@jp@units

units オプションの処理。

```
3720 \let\bxjs@kv@units@true\bxjs@jp@unitstrue
                                                                                           3721 \let\bxjs@kv@units@false\bxjs@jp@unitsfalse
                                                                                           3722 \define@key{bxjsStd}{units}[true]{%
                                                                                                                 \bxjs@set@keyval{units}{#1}{}}
                                  \bxjs@jp@font フォントパッケージの追加オプション。
                                                                                           3724 \let\bxjs@jp@font\@empty
                                                                                                           font オプションの処理。
                                                                                           3725 \define@key{bxjsStd}{font}{%
                                                                                           3726 \edef\bxjs@jp@font{#1}}
\ifbxjs@jp@strong@cmd \strong 命令を補填するか。
                                                                                           3727 \newif\ifbxjs@jp@strong@cmd \bxjs@jp@strong@cmdtrue
                                                                                                           strong-cmd オプションの処理。
                                                                                           3728 \let\bxjs@kv@strongcmd@true\bxjs@jp@strong@cmdtrue
                                                                                           3729 \let\bxjs@kv@strongcmd@false\bxjs@jp@strong@cmdfalse
                                                                                           3730 \end{true} {\tt true} {\tt 
                                                                                                           実際の japaram の値を適用する。
                                                                                           3731 \ensuremath{$\def\bxjs@next#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsStd}{\#1}}}
```

## C.3 共通処理 (1)

■jis2004 パラメタ jis2004 パラメタが有効の場合は、グローバルオプションに jis2004 を追加する。

%otf や luatexja-preset 等のパッケージがこのオプションを利用する。

 $3734 \def\bxjs@apply@mmiv{%}$ 

 $3735 \qquad \verb|\g@addto@macro|\gClassoptionslist{,jis2004}|$ 

3732 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}

3736 % \@ifpackagewith 判定への対策

3737 \PassOptionsToPackage{jis2004}{otf}

3738 \global\let\bxjs@apply@mmiv\relax}

3739 \ifbxjs@jp@jismmiv \bxjs@apply@mmiv \fi

■和文用単位のサポート エンジンが (u)pTrX の場合は units を無効にする。

 $3740 \if j\jsEngine$ 

3741 \bxjs@jp@unitsfalse

3742 \fi

units パラメタが有効の場合は、bxcalc パッケージの \usepTeXunits 命令を実行して和文用単位を有効化する。

 $3743 \ifbxjs@jp@units$ 

3744 \IfFileExists{bxcalc.sty}{%

 $3745 \qquad \texttt{RequirePackage\{bxcalc\}[2018/01/28]\%v1.0a}$ 

3746 \ifx\usepTeXunits\@undefined

```
\PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
               3747
               3748
                          {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
               3749
                           the package 'bxcalc' is too old}%
                         \bxjs@jp@unitsfalse
               3750
                       \else \usepTeXunits
               3751
                       \fi
               3752
                     }{%else
               3753
               3754
                       \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
                        {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
               3755
                         the package 'bxcalc' is unavailable}%
               3756
                       \bxjs@jp@unitsfalse
               3757
                     }
               3758
               3759 \fi
                   bxcalc で和文用単位をサポートした場合は、\bxjs@parse@qh の処理は不要になるので
                 無効化する。
               3760 \ifbxjs@jp@units
               3761 \ensuremath{\tt def\bxjs@parse@qh\#1{\tt let\bxjs@tmpb\relax}}
               3762 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
               3763 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
               3764\fi
\bxjs@let@lenexpr \bxjs@let@lenexpr\CS{(長さ式\)}: 長さ式に bxcalc の展開を適用した結果のトーク
                 ン列を \CS に代入する。
               3765 \ifbxjs@jp@units
                     \def\bxjs@let@lenexpr#1#2{%
                       \edef#1{#2}%
               3767
               3768
                       \expandafter\CUXParseExpr\expandafter#1\expandafter{#1}}
               3769 \else
               3770 \def\bxjs@let@lenexpr{\edef}
               3771 \fi
                 ■\strong 命令の補填
         \strong fontspec で提供される \strong 命令と strongenv 環境を全てのエンジンで使えるよう
                にする。
       strongenv
                 ※
               3772 \ifbxjs@jp@strong@cmd\jsAtEndOfClass{%
                     \ifx\strong\@undefined\ifx\strongenv\@undefined
               3773
               3774
                       \DeclareRobustCommand{\strongenv}{\bxjs@strong@font}%
               3775
                       \DeclareTextFontCommand{\strong}{\strongenv}%
                 fontspec と互換の \strongfontdeclare 命令も提供する。ただし、BXJS での \strong
                 は多段階には対応しないので、引数のコンマ区切りリストのうちの先頭の項目だけが意味を
                 もつ。既定の設定は \bfseries (太字) である。
                 ※\strongfontdeclare は試験的機能とする。
                       \@ifdefinable{\strongfontdeclare}{\bxjs@protected\def\strongfontdeclare#1{%
               3776
                         \bxjs@strong@font@declare@a#1,\@nil}}%
               3777
```

```
3778 \def\bxjs@strong@font@declare@a#1,#2\@nil{\def\bxjs@strong@font{#1}}%
```

3779 \def\bxjs@strong@font{\bfseries}%

3780 \fi\fi

3781 }\fi

 $3782 \ifjsWitheTeX$ 

使える場合は、「\dimexpr 外部寸法表記\relax」の形式(これは内部値なので単位として 使える)で各命令定義する。

 $\j$ Q  $\j$ Q と  $\j$ H はともに  $0.25\,\mathrm{mm}$  に等しい。

\iH3783 \@tempdima=0.25mm

3784 \protected\edef\jQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

 $3785 \left( \frac{jH}{jQ} \right)$ 

\trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。

\trueH3786 \ifjsc@mag

3787 \@tempdimb=\jsBaseFontSize\relax

3788 \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\@tempdimb}%

3789 \@tempdima=2.5mm

3790 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa

3791 \protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

3792 \@tempdima=10pt

3793 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa

3795 \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\p@

3796 \fi

3797 \let\trueH\trueQ

\ascQ \ascQ は\trueQ を和文スケール値で割った値。例えば、\fontsize{12\ascQ}{16\trueH} \ascpt とすると、和文が 12Q になる。

同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。

 ${\tt 3798} \qquad \verb{\tt \dempdima\trueQ \bxjs@invscale\tt\dempdima\jsScale}$ 

3799 \protected\edef\ascQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

3800 \@tempdima\bxjs@truept \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale

3801 \protected\edef\ascpt{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

3802 \fi

\jafontsize \jafontsize{ $\langle$ フォントサイズ $\rangle$ }{ $\langle$ 行送り $\rangle$ }: 和文フォント規準で、すなわち、1 zw が  $\langle$ フォントサイズ $\rangle$  に等しくなるようにフォントサイズを指定する。この命令の引数では、 $\mathbb{Q}/\mathbb{H}$  の単位が使用できる。

 $3803 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc jafontsize}\#1\#2} \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}}$ 

3804 \begingroup

 $\tt 3805 \qquad \verb|\bxjs@jafontsize@a{\#1}| %$ 

3806 \@tempdimb\jsInverseScale\@tempdima

3807 \bxjs@jafontsize@a{#2}%

```
3809
                                  \noexpand\fontsize{\the\@tempdimb}{\the\@tempdima}}%
                              \endgroup\bxjs@g@tmpa}
                         3810
                         3811 \def\bxjs@jafontsize@a#1{%
                              \bxjs@parse@qh{#1}%
                         3812
                              \ifx\bxjs@tmpb\relax \def\bxjs@tmpb{#1}\fi
                         3813
                              \@defaultunits\@tempdima\bxjs@tmpb pt\relax\@nnil}
                         3814
                            続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)
          \bxjs@kanjiskip 和文間空白の量を表すテキスト。
                         3815 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}
            \setkanjiskip 和文間空白の量を設定する。
                         3816 \newcommand*\setkanjiskip[1]{%
                              \bxjs@let@lenexpr\bxjs@kanjiskip{#1}%
                         3817
                              \bxjs@reset@kanjiskip}
            \getkanjiskip 和文間空白の量を表すテキストに展開する。
                         3819 \newcommand*\getkanjiskip{%
                              \bxjs@kanjiskip}
\ifbxjs@kanjiskip@enabled 和文間空白の挿入が有効か。ただし pTFX では自身の \(no)autospacing での制御を用い
                           るのでこの変数は常に真とする。
                         3821 \newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
   \bxjs@enable@kanjiskip 和文間空白の挿入を有効/無効にする。(pTFX 以外)
  \verb|\bxjs@disable@kanjiskip| 3822 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@kanjiskip| \% |
                              \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
                         3824
                              \bxjs@reset@kanjiskip}
                         3825 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%
                              \bxjs@kanjiskip@enabledfalse
                              \bxjs@reset@kanjiskip}
                         3827
    \bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。
                         3828 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%
                              \ifbxjs@kanjiskip@enabled
                         3829
                                \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@kanjiskip}%
                         3830
                              \else \@tempskipa\z@
                         3831
                         3832
                              \fi
                         3833
                              \bxjs@apply@kanjiskip}
         \bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。
           \setxkanjiskip3834 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}
           \label{eq:command*setxkanjiskip} \end{substitute} $$ \end{substitute} $$ \operatorname{setxkanjiskip}[1]_{\%} $$
                              \bxjs@let@lenexpr\bxjs@xkanjiskip{#1}%
\bxjs@reset@xkanjiskip}
  \verb|\bxjs@enable@xkanjiskip|3838 \verb|\newcommand*|getxkanjiskip|{\%}|
                              \bxjs@xkanjiskip}
 \bxjs@disable@xkanjiskip^{3839}
   \bxjs@reset@xkanjiskip
                                                               135
```

3808

\xdef\bxjs@g@tmpa{%

```
3840 \newif\ifbxjs@xkanjiskip@enabled \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
3841 \bxjs@robust@def\bxjs@enable@xkanjiskip{%
     \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
     \bxjs@reset@xkanjiskip}
3843
3844 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%
     \bxjs@xkanjiskip@enabledfalse
     \bxjs@reset@xkanjiskip}
3846
3847 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%
     \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
3848
       \setlength{\Otempskipa}{\bxjsOxkanjiskip}%
3849
     \else \@tempskipa\z@
3850
3851
     \bxjs@apply@xkanjiskip}
   \jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追随するように
 する。
3853 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
     \bxjs@reset@kanjiskip
     \bxjs@reset@xkanjiskip}
3856 \let\bxjs@apply@kanjiskip\relax
3857 \let\bxjs@apply@xkanjiskip\relax
```

■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォント の"プリセット"の指定として用いる。プリセットの値は、 $T_{EX}$  Live の kanji-configupdmap コマンドで使う"ファミリ"と同じにすることを想定する。特別な値として、auto は kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を"調整"して、その結果を \bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は "非埋込 (noEmbed)" の設定が禁止される。この禁止の場合も含 め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。

```
3858 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont
3859 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%
3860
     \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
        \bxjs@get@kanjiEmbed
3861
3862
        \ifx\bxjs@jaEmbed\relax
3863
          \let\bxjs@tmpa\@empty
3864
          \let\bxjs@tmpa\bxjs@jaEmbed
3865
          \ifx\bxjs@jaVariant\bxjs@@hziv
3866
3867
            \bxjs@apply@mmiv
3868
          \fi
        \fi
3869
3870
      \else
        3871
3872
      \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3873
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3874
         {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
3875
```

```
3876
                              not available on the current situation}%
                    3877
                            \let\bxjs@tmpa\@empty
                    3878
                          \fi\fi
                    3879 }
                    3880 \def\bxjs@@auto{auto}
                    3881 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}
                    3882 \def\bxjs@@hziv{-04}
       \bxjs@jaEmbed
                     現在の updmap の jaEmbed・jaVariant パラメタの値。\bxjs@get@kanjiEmbed により実
                     際の設定値が取得されてここに設定される。
     \bxjs@jaVariant
                      ※古い版の updmap では kanjiEmbed · kanjiVariant であった。
                    3883 \let\bxjs@jaEmbed\relax
                    3884 \let\bxjs@jaVariant\relax
\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の jaEmbed jaVariant パラメタの値を取得する。
                    3885 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
                    3886 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
                          \begingroup\setbox\z@=\hbox{%
                    3887
                    3888
                            \global\let\bxjs@do\@empty
                            \def\bxjs@next##1##2##3{%
                    3889
                    3890
                              \def##1####1##3 ####2\@nil####3\@nnil{%
                                \ifx$####1$\gdef##2{####2}\fi}%
                    3891
                    3892
                              \g@addto@macro\bxjs@do{%
                                \expandafter##1\bxjs@tmpa\@nil##3 \@nil\@nnil}}%
                    3893
                            \bxjs@next\bxjs@do@a\bxjs@g@tmpa{kanjiEmbed}%
                    3894
                            \bxjs@next\bxjs@do@b\bxjs@g@tmpa{jaEmbed}%
                    3895
                            \bxjs@next\bxjs@do@c\bxjs@g@tmpb{kanjiVariant}%
                    3896
                            \bxjs@next\bxjs@do@d\bxjs@g@tmpb{jaVariant}%
                    3897
                    3898 %
                    3899
                            \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
                            \global\let\bxjs@g@tmpb\relax
                    3900
                    3901
                            \endlinechar\m@ne
                            \let\do\@makeother\dospecials
                    3902
                    3903
                            \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
                            \let\bxjs@tmpa\@empty
                    3904
                            \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
                    3905
                    3906
                            \ifeof\@inputcheck\else
                              \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                    3907
                              \closein\@inputcheck
                    3908
                            \fi
                    3909
                    3910
                            \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
                              \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
                    3911
                    3912
                              \@tempswatrue
                              \loop\if@tempswa
                    3913
                    3914
                                \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                    3915
                                \bxjs@do
                    3916
                                \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
                              \repeat
                    3917
                            \fi
                    3918
```

```
3919
                            }\endgroup
                       3920
                             \let\bxjs@jaEmbed\bxjs@g@tmpa
                             \let\bxjs@jaVariant\bxjs@g@tmpb
                       3922 }
\bxjs@resolve@jafont@paren jafont パラメタ値内の()を解決する。\bxjs@resolve@jafont@paren\CS で、\CS の内
                         容中の (...) を \bxjs@jafont@paren{...} に置き換える。
                       3923 \@onlypreamble\bxjs@resolve@jafont@paren
                       3924 \def\bxjs@resolve@jafont@paren#1{%
                       3925
                             \def\bxjs@tmpb{\let#1}%
                             \expandafter\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1\@nil()\@nil\@nnil#1}
                       3926
                       3927 \verb|\colored] a font@paren@a
                       3928 \def\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1(#2)#3\@nil#4\@nnil#5{%
                            \ifx\relax#4\relax \bxjs@tmpb#5%
                       3929
                       3930
                             \else
                               \edef\bxjs@tmpa{#1\bxjs@jafont@paren{#2}#3}%
                              \bxjs@tmpb\bxjs@tmpa
                       3932
                       3933
                            \fi}
                         ■和文として出力 「欧文扱い」となっている文字を和文として出力するための機能。
                 \jachar \jachar{(文字)}: 和文文字として出力する。
                       3934 \newcommand*\jachar[1]{%
                       3935
                            \begingroup
                         \jsLetHeadChar で先頭の"文字"を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。
                               \jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
                              \ifx\bxjs@tmpa\relax
                       3937
                                \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                       3938
                       3939
                                  {Illegal argument given to \string\jachar}%
                               \else
                       3940
                       3941
                                \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
                               \fi
                       3942
                             \endgroup}
                       3943
                         ∖jsJaChar を ∖jachar と等価にする。
                       3944 \left| jsJaChar \right|
                         下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。
                       3945 \let\bxjs@jachar\@firstofone
                         ■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、
                         hyperref 側の処理は無効にしておく。
                       3946 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}
\bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。
                       3947 \Conlypreamble\bxjsCfixChyperrefCunicode
                       3948 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%
```

```
3950
                                                                             \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
                                                                                 \KV@Hyp@unicode{##1}%
                                                               3951
                                                                                 \def\KV@Hyp@unicode####1{%
                                                               3952
                                                                                      \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
                                                               3953
                                                                                            \csname if####1\endcsname\else
                                                               3954
                                                                                           \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                                                               3955
                                                               3956
                                                                                           {Blcoked hyperref option 'unicode=####1'}%
                                                                                      \fi
                                                               3957
                                                                                 }%
                                                               3958
                                                                            }%
                                                               3959
                                                               3960 }
           \jsCheckHyperrefUnicode 「hyperref の unicode オプションの値を検証する」ための本体開始時のフック。
                                                               3961 \@onlypreamble\jsCheckHyperrefUnicode
                                                               3962 \let\jsCheckHyperrefUnicode\@empty
                                                               3963 \verb|\g@addto@macro|\bxjs@begin@document@hook{\jsCheckHyperrefUnicode}|
\bxjs@check@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を本体開始時に検証する。
                                                               3964 \@onlypreamble\bxjs@check@hyperref@unicode
                                                               3965 \def\bxjs@check@hyperref@unicode#1{%
                                                                             \g@addto@macro\jsCheckHyperrefUnicode{%
                                                               3966
                                                               3967
                                                                                 \@tempswafalse
                                                               3968
                                                                                 \begingroup
                                                                                      \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\endcsname\relax
                                                               3969
                                                                                           \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                               3970
                                                                                      \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\expandafter\endcsname
                                                               3971
                                                               3972
                                                                                               \csname if#1\endcsname
                                                               3973
                                                                                           \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                               3974
                                                                                 \endgroup
                                                                                 \if@tempswa\else
                                                               3975
                                                               3976
                                                                                      \ClassError\bxjs@clsname
                                                                                        {The value of hyperref 'unicode' key is not suitable\MessageBreak
                                                               3977
                                                               3978
                                                                                          for the present engine (must be #1)}%
                                                                                        {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath}\amb}\amb}\amb}}}}}}}}}}}}}
                                                               3979
                                                               3980
                                                                                 fi}
                 \bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。
                                                               3981 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
                                                               3982 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special@a
                                                                   LATeX カーネルの新フック管理が導入済かを調べる。未導入の古い版である場合。
                                                               3983 \ifbxjs@old@hook@system
                                                               3984 \def\bxjs@urgent@special#1{%
                                                                             \AtBeginDvi{\special{#1}}%
                                                               3985
                                                                             \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                               3986
                                                                                 \@ifpackageloaded{atbegshi}{%
                                                               3987
                                                               3988
                                                                                      \begingroup
                                                                                           \toks\z@{\special{#1}}%
                                                               3989
```

\PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%

3949

```
\toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
3990
           \xdef\AtBegShi@HookFirst{\the\toks@\the\toks\tw@}%
3991
3992
         \endgroup
       }{}%
3993
     }%
3994
3995 }
 導入済の場合。
 ※自分が先行する必要がある対象のパッケージを適宜追加する。
 ※pxjahyper パッケージの処理と合わせる。
3996 \else
3997
     \def\bxjs@urgent@special#1{%
       \bxjs@urgent@special@a
3998
       \AddToHook{shipout/firstpage}[pxjahyper/enc]{\special{#1}}}
3999
     \def\bxjs@urgent@special@a{%
4000
       \DeclareHookRule{shipout/firstpage}{pxjahyper/enc}{<}{hyperref}%
4001
       \global\let\bxjs@urgent@special@a\relax}
4002
4003 \fi
 C.4 pT<sub>E</sub>X 用設定
4004 \if j\jsEngine
 ■共通命令の実装
4005 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \kanjiskip\@tempskipa}
4007 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \xkanjiskip\@tempskipa}
   \jaJaChar のサブマクロ。
4009 \def\bxjs@jachar#1{%
4010 \bxjs@jachar@a#1....\@nil}
4011 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5}\mbox{@nil}{\%}
 引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしてそれをそのまま出力する。
4012 \ifx.#2#1%
 引数が複数トークンの場合は、UTF-8 のバイト列であると見なし、そのスカラー値を
 \@tempcnta に代入する。
4013
     \left( x, \#3 \right)
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
4014
       \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
4015
       \bxjs@jachar@b
4016
     \left( x, \#4 \right)
4017
4018
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
4019
4020
       \advance\@tempcnta`#3 \advance\@tempcnta-"E2080
4021
       \bxjs@jachar@b
```

4022

\else

```
\@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
4023
4024
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
4025
       \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
       \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
4026
       \bxjs@jachar@b
4027
     \fi\fi\fi}
4028
 符号値が \@tempcnta の和文文字を出力する処理。
4029 \ifjsWithupTeX
    \def\bxjs@jachar@b{\kchar\@tempcnta}
4031 \else
     \def\bxjs@jachar@b{%
4032
       \ifx\bxUInt\@undefined\else
4033
4034
         \bxUInt{\@tempcnta}%
4035
       fi
4036 \fi
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
4037 \ifbxjs@jaspace@cmd
4038 \def\jathinspace{\hskip\xkanjiskip}
4039 \fi
 ■jis2004 パラメタ pxchfon と pxbabel では 2004JIS を指定するオプションの名が
 prefer2004jis である。
4040 \ifbxjs@jp@jismmiv
     \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxchfon}
     \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxbabel}
4043 \fi
 ■和文フォント指定の扱い pTFX は既定で kanji-config-updmap の設定に従うため、
 \isJaFont が auto の場合は何もする必要がない。無指定でも auto でもない場合は、
 \jsJaFont をオプションにして pxchfon パッケージを読み込む。ここで、和文ドライバパ
 ラメタ font が指定されいる場合は、その値を pxchfon のオプションに追加する。
4044 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
4045 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
4046 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
     \let\bxjs@tmpa\@empty
4048 \le ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
    \def\bxjs@tmpa{noembed}
4049
4050 \fi\fi
4051 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4052 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4053 \ifx\bxjs@tmpa\empty\else
     \edef\bxjs@next{%
4054
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{pxchfon}[2010/05/12]% v0.5
    }\bxjs@next
4056
4057 \fi
```

```
■otf パッケージ対策 インストールされている otf パッケージが scale オプションに対
 応している場合は scale=(\jsScale の値) を事前に otf に渡す。
 ※scale 対応は 1.7b6 版 [2013/11/17] から。
 ※ otf.sty の中に「\RequirePackage{keyval}」の行が存在するかにより判定している。
 (もっといい方法はないのか……。)
4058 \begingroup
     \verb|\global| let\bxjs@g@tmpa\relax| \\
4059
4060
     \catcode`\|=0 \catcode`\\=12
      |def|bxjs@tmpdo#1|@nil{%
4061
4062
        |bxjs@tmpdo@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
4063
      |def|bxjs@tmpdo@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
4064
        |ifx$#1$|bxjs@tmpdo@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
      |catcode`|\=0 \catcode`\|=12
4065
     \def\bxjs@tmpdo@b#1keyval#2\@nnil{%
4066
       \fx$#2$\else
4067
         \xdef\bxjs@g@tmpa{%
4068
            \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
4069
4070
        \fi}
4071 \ensuremath{\mbox{\sc ofirstofone}\mbox{\sc \%}}
     \catcode10=12 \endlinechar\m@ne
4072
4073
     \let\do\@makeother \dospecials \catcode32=10
     \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
4074
4075
     \@tempswatrue
4076
     \loop\if@tempswa
       \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
4077
4078
       \if@tempswa
         \read\@inputcheck to\bxjs@next
4079
         \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@next\@nil
4080
       \fi
4081
     \repeat
4082
4083
     \closein\@inputcheck
4084 \endgroup}
4085 \bxjs@g@tmpa
 ■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。
4086 \ \
4087 \bxjs@check@hyperref@unicode{false}
4088 \fi
   tounicode special 命令を出力する。
4089 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
        \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
4090
     \IfFileExists{pxjahyper-enc.sty}{\@tempswatrue}{\@tempswafalse}
4091
4092
     \if@tempswa
4093
       \RequirePackage{pxjahyper-enc}[2020/10/05]%v0.6
       \ifbxjs@bigcode\else \suppressbigcode \fi
4094
```

4095

\else

```
4096
     \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
4097
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
     \ensuremath{\mbox{\mbox{lelse}\scale}}\ %sjis
4098
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
4099
     \else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex
4100
       \ifbxjs@bigcode
4101
         \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
4102
4103
         \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
4104
         \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
4105
         \PassOptionsToPackage{nobigcode}{pxjahyper}
4106
4107
       \fi
     \fi\fi\fi
4108
     \let\bxToUnicodeSpecialDone=t
4109
4110
4111 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で有効とする。 すなわち enablejfam=false
 以外の場合は Qenable jfam を真にする。
4112 \ifx f\bxjs@enablejfam\else
4113 \@enablejfamtrue
4114 \fi
   実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
4115 \if@enablejfam
     4116
4117
     \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
     4118
4119
     \jfam\symmincho
     \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
     \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4121
4122
       \ifx\reDeclareMathAlphabet\@undefined\else
4123
         \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\@mathrm}{\@mathrm}}
         \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathgt}%
4124
         \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\@mathsf}{\@mathsf}}%
```

## C.5 pdfT<sub>E</sub>X 用設定: CJK + bxcjkjatype

 $4128 \le j p \le n$ 

\fi}

4126

4127 \fi

- ■bxcjkjatype パッケージの読込 \jsJaFont が指定されている場合は、その値を bxcjkjatype のオプション(プリセット指定)に渡す。(auto ならば \bxjs@get@kanjiEmbed を実行する。) スケール値 (\jsScale) の反映は bxcjkjatype の側で行われる。
- ※ Pandoc モードでは autotilde を指定しない。
- $4129 \verb|\bxjs@adjust@jafont{f}|$

```
4130 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
4131 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4132 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4133 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{whole}}
4134 \def\bxjs@tmpb{pandoc}\ifx\bxjs@tmpb\bxjs@jadriver\else
     \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{autotilde}}
4136 \fi
4137 \edef\bxjs@next{%
4138 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{bxcjkjatype}[2013/10/15]% v0.2c
4139 }\bxjs@next
4140 \bxjs@cjk@loaded
 ■hyperref 対策 bxcjkjatype 使用時は unicode にするべき。
 ※取りあえず固定はしない。
4141 \ifbxjs@hyperref@enc
4142 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
4143 \fi
   \hypersetup 命令で(CJK* 環境に入れなくても)日本語文字を含む文書情報を設定でき
 るようにするための細工。
 ※ bxcjkjatype を whole 付きで使っていることが前提。
 ※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがそ
 の場で展開されてしまう」ため困難である。
4144 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
4145 \begingroup
4146 \CJK@input{UTF8.bdg}
4147 \endgroup
4148 \verb|\g@addto@macro|| pdfstringdefPreHook{%}
     \@nameuse{CJK@UTF8Binding}%
4150 }
4151 \fi
   ~ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。
4152 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
4153 \verb|\g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%}|
     \ifx~\bxjs@@CJKtilde
4154
       \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace
4155
       \let\HyPsd@LetUnexpandableSpace\bxjs@LetUnexpandableSpace
4156
       \let~\@empty
4157
     \fi
4158
4159 }
4160 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
4161 \def\bxjs@@tildecmd{~}
4162 \def\bxjs@LetUnexpandableSpace#1{%
     \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
4163
       \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
4164
    \fi}
4165
4166 \fi
```

#### ■共通命令の実装

```
4167 \newskip\jsKanjiSkip
4168 \newskip\jsXKanjiSkip
4169 \ifx\CJKecglue\@undefined
     \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
4171 \fi
4172 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4173 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4174 \verb|\protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}|
4175 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
     \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
4178 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4179 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4180 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4181 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \jsXKanjiSkip\@tempskipa
4182
     \let\CJKecglue\bxjs@CJKecglue}
   \jachar のサブマクロの実装。
4184 \def\bxjs@jachar#1{%}
4185 \CJKforced{#1}}
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
4186 \ifbxjs@jaspace@cmd
4187 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
4188 \fi
 ■和文数式ファミリ CJK パッケージは(恐らく)数式文字として CJK 文字をサポートし
 ていない。従って @enablejfam は常に偽になる。
4189 \ifx t\bxjs@enablejfam
    \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
4190
      {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak
       CJK package does not support Japanese math}
4192
4193 \fi
 C.6 X¬TFX 用設定: xeCJK + zxjatype
```

- 4194 \else\if x\jsEngine
  - ■zxjatype パッケージの読込 スケール値(\jsScale)の反映は zxjatype の側で行われる。
- 4195 \RequirePackage{zxjatype}
- 4196 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
- 4197 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
- 4198 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
- $4199 \verb|\ifx\zxJaFamilyName\@undefined|$
- 4200 \ClassError\bxjs@clsname
- 4201 {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc

#### 4202 \fi

- ■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして zxjafont を読み込む。非指定の場合は原ノ味フォントを使用する。
- ※ 2.0 版より既定を IPAex から原ノ味に変更。
- 4203 \bxjs@adjust@jafont{f}
- 4204 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
- $4205 \verb|\bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa|$
- $4206 \verb|\edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}|$
- $4207 \ifx\bxjs@tmpa\empty$
- 4208 \setCJKmainfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf]{HaranoAjiMincho-Regular.otf}
- 4209 \setCJKsansfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf]{HaranoAjiGothic-Medium.otf}
- 4210 \else
- 4211 \edef\bxjs@next{%
- 4212 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{zxjafont}[2013/01/28]% v0.2a
- 4213 }\bxjs@next
- 4214 \fi
  - ■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

 $X_{\rm T}$ F<sub>L</sub>X の場合は、xdvipdfmx が UTF-8  $\rightarrow$  UTF-16 の変換を行う機能を持っているため、本来は special 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、hyperref での方針としては、 $X_{\rm T}$ F<sub>L</sub>X の場合にもパッケージ側で文字コード変換を行う方が望ましいと考えている。実際、unicode を無効にしていると警告が出て強制的に有効化される。一方で、過去(r35125 まで)の xdvipdfmx では、文字列を UTF-16 に変換した状態で与えるのは不正と見なしていて警告が発生する。

これを踏まえて、ここでは、「 $X_{\Xi}T_{E}X$  のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を 既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

- 4216 \ifbxjs@hyperref@enc
- 4217 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
- 4218 \fi
- 4219 **\fi** 
  - ■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも(少なくとも現状の)xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近いものが得られるらしい。

従って、\jsInhibitGlueAtParTop は結局何もしないことにする。

強制改行直後のグルー禁止処理、のような怪しげな何か。

- $4220 \verb| AtEndOfPackage{%}|$
- $4221 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc @gnewline}}$  #1{%

```
\ifvmode \@nolnerr
4222
4223
       \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
4224
       \nobreak \hskip-1sp\hskip1sp\relax
4225
4226
       \ignorespaces
4227
    \fi}
4228 }
 ■共通命令の実装
4229 \newskip\jsKanjiSkip
4230 \newskip\jsXKanjiSkip
4231 \ifx\CJKecglue\Qundefined
4232 \quad \def\CJKtilde\{\CJK@global\def~\{\CJKecglue\ignorespaces\}\}
4233 \fi
4234 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4235 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4236 \texttt{\protected\def\bxjs@CJKglue\{\hskip\jsKanjiSkip\}}
4237 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
     \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
4239
4240 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4241 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4242 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4243 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
4244 \jsXKanjiSkip\@tempskipa
    \xeCJKsetup{CJKecglue={\bxjs@CJKecglue}}}
   \mcfamily、\gtfamily は本来は zxjatype の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的
 にここで定義する。
4246 \ifx\mcfamily\Qundefined
     \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
     \protected\def\gtfamily{\CJKfamily{\CJKsfdefault}}
4248
4249 \fi
   \jachar のサブマクロの実装。
4250 \def\bxjs@jachar#1{%
4251 \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
4252 #1}
   \jathinspace の実装。
4253 \ifbxjs@jaspace@cmd
4254 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
4255 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で無効とする。すなわち enable jfam=true
 の場合にのみ @enablejfam を真にする。
4256 \ifx t\bxjs@enablejfam
4257 \@enablejfamtrue
4258 \fi
```

実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。

※ FIXME: 要検討。

4259 \if@enablejfam

4260 \xeCJKsetup{CJKmath=true}

4261 \fi

## C.7 LuaTFX 用設定: LuaTFX-ja

4262 \else\if l\jsEngine

■LuaT<sub>E</sub>X-ja パッケージの読込 luatexja とともに luatexja-fontspec パッケージを読み込む。

luatexja は自前の \zw (これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す)を定義するので、\zw の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく \jsZw であることに注意が必要。

 $\times$  1.0b 版から「graphics パッケージに pdftex オプションを渡す」処理を行っていたが、 1.4 版で廃止された。

 $4263 \det x \$ 

 $4264 \RequirePackage{luatexja}$ 

4265 \edef\bxjs@next{%

 $4266 \qquad \verb|\noexpand\RequirePackage[scale=\jsScale]{luatexja-fontspec}[2015/08/26]\% \\$ 

4267 }\bxjs@next

フォント代替の明示的定義。

 $4269 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} \{mc} \{m\} \{sl\} \{<-> ssub*mc/m/n\} \{\} \}$ 

 $4270 \end{areFontShape} \label{lem:final} $$ 4270 \end{areFontShape} \label{lem:final} $$ 4270 \end{areFontShape} $$ 4270 \end{$ 

 $4272 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{m\}\{sl\}\{<->ssub*gt/m/n\}\{\}$ 

 $4273 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\{bx\}$ it $$<->ssub*gt/m/n} $$$ 

 $4274 \ensuremath{\texttt{NeclareFontShape{JY3}{mc}{bx}{s1}{<->ssub*gt/m/n}{}} \\$ 

 $4275 \ensuremath{\texttt{DeclareFontShape\{JY3\}\{gt\}\{bx\}\{it\}\{<->ssub*gt/m/n}\{\}\}}$ 

 $4276 \ensuremath{\mbox{\sl}{gt}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}}$ 

4277 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{b}{n}{<->ssub\*mc/bx/n}{}

 $4278 \ensuremath{\texttt{DeclareFontShape\{JY3\}\{mc\}\{b\}\{it\}\{<->ssub*mc/bx/n\}\{\}}$ 

 $4279 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}\{sl}{<->} sub*mc/bx/n}{}$ 

 $4280 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JY3}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}} \label{fight}$ 

 $4281 \ensuremath{\mbox{\sc lareFontShape{JY3}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}} \\$ 

 $4282 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{gt}{b}{sl}{<->ssub*gt/bx/n}{}$ 

 $4283 \ensuremath{\texttt{NeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}} \\$ 

 $4284 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}}<->ssub*mc/m/n}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}$ 

 $4286 \ensuremath{\mbox{\sc hape}{JT3}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}$ 

 $4287 \ensuremath{\mbox{\sc hape}{JT3}{gt}{m}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}}$ 

 $4288 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox$ 

 $4289 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox$ 

 $4290 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JT3\} \{gt\} \{bx\} \{it\} \{<-> ssub*gt/m/n\} \{\} \}$ 

```
4291 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT3}{gt}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}} \\
4292 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{b}{n}{<->ssub*mc/bx/n}{}
4293 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{b}{it}{<->ssub*mc/bx/n}{}
4294 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} s1} <-> sub*mc/bx/n} \{\}
4295 \DeclareFontShape{JT3}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
4296 \ensuremath{\mbox{\sc def}} \{gt\}\{b\}\{it\}\{<->ssub*gt/bx/n\}\{\}
4297 \DeclareFontShape{JT3}{gt}{b}{s1}{<->ssub*gt/bx/n}{}
 ■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして
 luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は原ノ味フォントを指定する(luatexja-
 preset は読み込まない)。
 ※ 2.0 版より既定を IPAex から原ノ味に変更。
4298 \bxjs@adjust@jafont{t}
4299 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
4300
     \def\bxjs@tmpa{noembed}
4301 \fi
4302 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
4303 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4304 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4305 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
     \defaultjfontfeatures{ Kerning=Off }
4307
     \setmainjfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf,JFM=ujis]{HaranoAjiMincho-
   Regular.otf}
4308 \setsansjfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf,JFM=ujis]{HaranoAjiGothic-
   Medium.otf}
4309 \else
     \edef\bxjs@next{%
4310
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{luatexja-preset}%
4312 }\bxjs@next
4313 \fi
   欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
 関係の定義を行う。
4314 \ensuremath{\mbox{\sc 0}} \{2016/03/31\} \{ \ensuremath{\mbox{\sc w}} \{ \ensuremath{\mbox{\sc w}} \} \} 
4315 \DeclareRobustCommand\rmfamily
4316
     {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
      \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
4318 \DeclareRobustCommand\sffamily
     {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
4319
      \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
4321 \DeclareRobustCommand\ttfamily
     {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
4323
      \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
4324 }
4325 \lceil \frac{4}{25} \rceil
4326 \times (0)
4327 \@ltj@match@familytrue
```

4328 \fi

```
4329 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                  4330
                                               \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}
                                               \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
                                  4331
                                               \label{$$\operatorname{\mathbb{T}}{\mathcal{H}}_{\mathbf{t}}}{\mathcal{T}}_{\mathbf{t}}}
                                  4332
                                  4333 \bxjs@if@sf@default{%
                                               \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
                                      ■和文パラメタの設定
                                  4335%次の3つは既定値の通り
                                  4336 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`',10000}}
                                  4337 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={\ ",10000}}
                                  4338 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`",10000}}
                                  4339 \ltjsetparameter{jaxspmode={`!,1}}
                                  4340 \ltjsetparameter{jaxspmode={`\,\tau$,2}}
                                  4341 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
                                  4342 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}
                                      ■段落頭でのグルー挿入禁止 基本的に現状の ltjs* クラスの処理に合わせる。
                                      ※\jsInhibitGlueAtParTop は使わない。
\ltjfakeparbegin 現在の LuaTrX-ja で定義されているマクロで、段落中で段落冒頭用の処理を発動する。未
                                     定義である場合にに備えて同等のものを用意する。
                                  4343 \ifx\ltjfakeparbegin\@undefined
                                              \protected\def\ltjfakeparbegin{%
                                  4344
                                  4345
                                                   \ifhmode
                                                       \relax\directlua{%
                                  4346
                                                            luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
                                  4347
                                                   \fi}
                                  4348
                                  4349 \fi
                                          ltjs* クラスの定義と同等になるようにパッチを当てる。
                                  4350 \unless\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none
                                  4351 \begingroup
                                               \let\%\@percentchar \def\@#1{[[\detokenize{#1}]]}
                                  4352
                                               \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{}\fi}}
                                  4353
                                               \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
                                  4354
                                  4355
                                                   \label{lem:condition} $$ \end{\everypar} if \everyparhook} i) if i everyparhook \fi \end{\everyparhook} if i eve
                                               \directlua{
                                  4356
                                                   local function patchcmd(cs, code, from, to)
                                  4357
                                                       \label{tex:sprint}  \mbox{tex.sprint(code:gsub(from:gsub("\W", "\%\\%0"), "\%0"..to)} 
                                  4358
                                                            :gsub("macro:", \@\gdef..cs, 1):gsub("->", "{", 1).."}")
                                  4359
                                  4360
                                                   end
                                                   patchcmd(\@\@xsect, [[\meaning\@xsect]],
                                  4361
                                                       \@{\hskip-\@tempskipa}, \@\ltjfakeparbegin)
                                  4362
                                  4363
                                                   patchcmd(\@\@item, [[\meaning\@item]],
                                                       \bxjs@tmpa, \@\ltjfakeparbegin)}
                                  4364
```

4365 \endgroup 4366 \fi

```
■hyperref 対策 unicode にするべき。
```

※ 1.6c 版より、固定ではなく既定設定+検証に切り替えた。

4367 \ifbxjs@hyperref@enc

4368 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}

4369 \bxjs@check@hyperref@unicode{true}

4370 \fi

#### ■共通命令の実装

```
4371 \operatorname{def}\operatorname{def}\operatorname{des}
```

4372 \ltjsetparameter{autospacing=true}}

4373 \protected\def\noautospacing{%

4374 \ltjsetparameter{autospacing=false}}

4375 \protected\def\autoxspacing{%

4376 \ltjsetparameter{autoxspacing=true}}

 $4377 \protected\ef\noautoxspacing{\%}$ 

4378 \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}

4379 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%

4380 \ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}

4381 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%

4382 \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}

\jachar のサブマクロの実装。

 $4383 \def\bxjs@jachar#1{%}$ 

4384  $\left| \frac{4384}{1}\right|$ 

\jathinspace の実装。

4385 \ifbxjs@jaspace@cmd

4386 \protected\def\jathinspace{%

4387 \hskip\ltjgetparameter{xkanjiskip}\relax}

4388 \fi

**■和文数式ファミリ**  $LuaT_EX$ -ja では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要な設定は済んでいる。従って Cenablejfam は常に真になる。

```
4389 \ifx f\bxjs@enablejfam
```

 $4390 \qquad \verb|\ClassWarningNoLine\bxjs@clsname| \\$ 

4391 {You cannot use 'enablejfam=false', since the\MessageBreak

4392 LuaTeX-ja always provides Japanese math families}

4393 **\fi** 

#### C.8 共通処理 (2)

 $4394 fi\fi\fi$ 

#### ■共通命令の実装

\textmc minimal ドライバ実装中で定義した \DeclareJaTextFontCommand を利用する。

 $\verb|\textgt| 4395 \verb|\textfontCommand| @undefined| \\$ 

4396 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}

```
4397 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily} 4398 \fi
```

\mathmc この時点で未定義である場合に限り、\DeclareJaMathFontCommand を利用したフォール \mathgt バックの定義を行う。

4399 \ifx\mathmc\@undefined

4400 \DeclareJaMathFontCommand{\mathmc}{\mcfamily}

4401 \DeclareJaMathFontCommand{\mathgt}{\gtfamily}

4402 \fi

#### ■和文空白命令

\* 非数式中では \jathinspace と等価になるように再定義する。※数式中では従来通り (\: と等価)。

4403 \ifbxjs@jaspace@cmd

4404 \bxjs@protected\def\bxjs@choice@jathinspace{%

 $\begin{tabular}{ll} 4405 & $\tt \end{tabular} \begin{tabular}{ll} 4405 & \tt \end{tabular} \begin{tabular}{ll} 4$ 

4406 \else \jathinspace\ignorespaces

4407 \fi}

4408 \jsAtEndOfClass{%

4409 \ifjsWitheTeX \let\>\bxjs@choice@jathinspace

 $\verb| 4410 | \textbf{def} \rightarrow \textbf{f} \$ 

4411 \fi}

4412 **\fi** 

#### ■和文・和欧文間空白の初期値

```
4413 \setkanjiskip{Opt plus.1\jsZw minus.01\jsZw}
```

4414 \ifx\jsDocClass\jsSlide \setxkanjiskip{0.1em}

 $4415\,\text{lese } \text{setxkanjiskip}\{\text{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}\}$ 

4416 \fi

以上で終わり。

4417 %</standard>

## 付録 D 和文ドライバ: modern 🕸

モダーンな設定。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

4418 %<\*modern>

4419 \input{bxjsja-standard.def}

## D.1 フォント設定

T1 エンコーディングに変更する。

※以下のコードは \usepackage [T1] {fontenc} と同等。

```
4420 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z@
4421 \def\encodingdefault{T1}%
4422 \left\{ input{t1enc.def} \right\}
4423 \fontencoding\encodingdefault\selectfont
4424 \fi
   基本フォントを Latin Modern フォントファミリに変更する。
 ※以下は \usepackage[noamth] {lmodern} と同じ。ユーザは後で lmodern を好きなオプ
 ションを付けて読み込むことができる。
4425 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0
4426 \renewcommand{\rmdefault}{lmr}
4427 \renewcommand{\sfdefault}{lmss}
4428 \mbox{ } \mbox{lmtt}{1}
4429 \fi
   大型演算子用の数式フォントの設定。
 ※amsfonts パッケージと同等にする。
4430 \DeclareFontShape\{OMX\}\{cmex\}\{m\}\{n\}\{n\}\}
4431 <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%
4432 <8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%
4433 \expandafter\let\csname \OMX/cmex/m/n/10\endcsname\relax
 amsmath 読込時に上書きされるのを防ぐ。
4434 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{cmex@opt}\{10\}}
```

#### D.2 fixltx2e 読込

※fixltx2e 廃止前の IATEX カーネルの場合。 4435 \ifx\@IncludeInRelease\@undefined 4436 \RequirePackage{fixltx2e} 4437 \fi

### D.3 和文カテゴリコード

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。 4438 \RequirePackage{bxjscjkcat}

### D.4 完了

おしまい。

4439 %</modern>

# 付録 E 和文ドライバ: pandoc 🕾

「Pandoc モード」で使用される和文ドライバ。standard ドライバの機能を継承するが、「Pandoc の既定の latex テンプレート」が使われることを前提として、それと BXJS の設定

を整合させるための措置を加えている。

## E.1 準備

```
standard ドライバの設定を引き継ぐ。
4440 %<*pandoc>
4441 \input{bxjsja-standard.def}
bxjspandoc パッケージを読み込む。
```

4442 \RequirePackage{bxjspandoc}

\bxjs@endpreamble@hook etoolbox の \AtEndPreamble で実行される BXJS クラス用のフック。

 $% \varepsilon$ -T<sub>F</sub>X 以外では無効になる。(将来 pandoc の外に出す可能性あり。)

4443 \@onlypreamble\bxjs@endpreamble@hook

4444 \let\bxjs@endpreamble@hook\@empty

 $4445 \ifjsWitheTeX$ 

4446 \RequirePackage{etoolbox}[2010/08/21]% v2.0

4447 \AtEndPreamble{\bxjs@endpreamble@hook}

4448 **\fi** 

#### E.2 和文ドライバパラメタ

keyval のファミリは bxjsPan とする。

\ifbxjs@jp@fix@strong 重要要素を補正するか。

 $4449 \verb|\newif\ifbxjs@jp@fix@strong \bxjs@jp@fix@strongtrue|\\$ 

fix-strong オプションの処理。

4451 \let\bxjs@kv@fixstrong@false\bxjs@jp@fix@strongfalse

 $4452 \ensuremath{ define@key{bxjsPan}{fix-strong}[true]{%}}$ 

4453 \bxjs@set@keyval{fixstrong}{#1}{}}

\ifbxjs@jp@fix@code インラインコード要素を補正するか。

 $4454 \verb|\newif\ifbxjs@jp@fix@code \bxjs@jp@fix@codetrue|\\$ 

fix-code オプションの処理。

 $4455 \verb|\let\bxjs@kv@fixcode@true\bxjs@jp@fix@codetrue|$ 

 $4456 \verb|\let\bxjs@kv@fixcode@false\bxjs@jp@fix@codefalse|$ 

4457 \define@key{bxjsPan}{fix-code}[true]{%

4458 \bxjs@set@keyval{fixcode}{#1}{}}

\bxjs@jp@strong 重要要素に適用される書体変更の種類。

 $4459 \chardef\bxjs@jp@strong=0$ 

strong オプションの処理。

4460 \def\bxjs@kv@strong@bold{\chardef\bxjs@jp@strong=0 }

4461 \def\bxjs@kv@strong@sans{\chardef\bxjs@jp@strong=1 }

```
4462 \def\bxjs@kv@strong@boldsans{\chardef\bxjs@jp@strong=2 }
4463 \define@key{bxjsPan}{strong}{%
4464 \bxjs@set@keyval{strong}{#1}{}
実際の japaram の値を適用する。
4465 \def\bxjs@next#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsPan}{#1}}
4466 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}
```

## E.3 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに"option clash"の検査をスキップする。この時に何らかのコードを実行させることができる。

 $\verb|\bxjs@set@dupload@proc||$ 

4493

4494

4495

```
4467 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc
                                4468 \def\bxjs@set@dupload@proc#1{%
                                                  \expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname bxjs@dlp/#1\endcsname}
                                4470 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a
                                4471 \def\bxjs@set@dupload@proc@a#1{%
                                                 \@onlypreamble#1\def#1##1}
                                4473 \def\bxjs@unset@dupload@proc#1{%
                                                 \expandafter\let\csname bxjs@dlp/#1\endcsname\@undefined}
\@if@ptions \@if@ptions の再定義。
                                4475 \@onlypreamble\bxjs@org@if@ptions
                                4476 \let\bxjs@org@if@ptions\@if@ptions
                                4477 \@onlypreamble\bxjs@org@reset@ptions
                                4478 \let\bxjs@org@reset@ptions\relax
                                4479 \ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{0if}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\#1\#2\#3\{\%\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\#1\#2\#3\{\%\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensuremath{\mbox{0ptions}}\ensurem
                                                 \let\bxjs@next\@secondoftwo
                                                  \def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currext}%
                                4481
                                4482
                                                  \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
                                                        \expandafter\ifx\csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname\relax\else
                                 4483
                                                              \let\bxjs@next\@firstoftwo \fi
                                4484
                                4485
                                4486
                                                  \bxjs@next\bxjs@do@dupload@proc\bxjs@org@if@ptions{#1}{#2}{#3}}
                                4487 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                  \let\@if@ptions\bxjs@org@if@ptions}
                                4489 \@onlypreamble\bxjs@do@dupload@proc
                                4490 \def\bxjs@do@dupload@proc#1#2#3{%
                                4491
                                                  \ifx\bxjs@org@reset@ptions\relax
                                                        \let\bxjs@org@reset@ptions\@reset@ptions
                                4492
```

\bxjs@csletcs{bxjs@next}{bxjs@dlp/#2.#1}%

\def\@reset@ptions{%

- 4496 \let\@reset@ptions\bxjs@org@reset@ptions
- 4497 \@reset@ptions
- 4498 \bxjs@next{#3}}%
- 4499 \@firstoftwo}

## E.4 lang 変数

lang=ja という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐための対策を行う。

\bxjs@polyglossia@options Polyglossia のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。

 $4500 \verb|\let\bxjs@polyglossia@options\relax|$ 

\bxjs@babel@options Babel のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。
4501 \let\bxjs@babel@options\relax

■Polyglossia について つまり X¬T¬X・LuaT¬X の場合。

※この場合 etoolbox が使用可能になっている。

 $4502 \times x\$  x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>0

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

- 4503 \pandocSkipLoadPackage{polyglossia}
- 4504 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
- 4505 \bxjs@unset@dupload@proc{polyglossia.sty}%
- 4506 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4507 {Package polyglossia is required}%
- 4508 \def\bxjs@polyglossia@options{#1}%

polyglossia の読込が指示された場合、直後に \setmainlanguage が実行されることを 想定して、フック用の \setmainlanguage を定義する。

%先に \setmainlanguage 以外が実行された場合はエラーになる。

4509 \newcommand\*\setmainlanguage[2][]{%

もし、言語名が空の \setmainlanguage{} が実行された場合は、lang=ja が指定されたと見なす。

- 4510 \ifblank{##2}{%
- 4511 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4512 {Main language is invalid, thus the fallback\MessageBreak
- 4513 definitions will be employed}%
- 4514 \bxjs@pandoc@polyglossia@ja

言語名が非空ならば、本来の polyglossia の処理を実行する。

- 4515 }{%else
- 4516 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4517 {Main language is valid (##2),\MessageBreak
- 4518 thus polyglossia will be loaded}%

```
4519
        \csundef{ver@polyglossia.sty}%
4520
        \edef\bxjs@next{%
4521
          \noexpand\RequirePackage[\bxjs@polyglossia@options]{polyglossia}[]%
        }\bxjs@next
4522
        \setmainlanguage[##1]{##2}%
       }}}
4524
   プレアンブルで polyglossia の読込が指示されなかった場合、Polyglossia と連携する
 パッケージの誤動作を防ぐため、読込済マークを外す。
4525 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%
```

- \ifx\bxjs@polyglossia@options\relax
- 4527 \csundef{ver@polyglossia.sty}%
- 4528 \fi}

\bxjs@pandoc@polyglossia@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。この場合は Polyglossia の処理を無 効化するためにダミーの定義を行う。その時点でダミーの \setotherlanguage(s) を定義

```
4529 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@polyglossia@ja
```

- $4530 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc depolyglossia@ja}{\sc def}\mbox{\sc def}\mb$
- \renewcommand\*\setmainlanguage[2][]{}%
- \newcommand\*\setotherlanguage[2][]{% 4532
- $\left\{ \#2\right\}$ 4533
- 4534 \cslet{##2}\@empty \cslet{end##2}\@empty
- 4535 \cslet{text##2}\@firstofone}}%
- 4536 \newcommand\*\setotherlanguages[2][]{%
- $\ensuremath{\texttt{Qfor\bxjs@tmpa:={\##2}\do{\%}}$ 4537
- 4538 \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}%

Polyglossiaの読込済マークは外れるようにしておく。

\let\bxjs@polyglossia@options\relax}%

4540 \fi

## ■Babel について X<sub>F</sub>T<sub>E</sub>X 以外の場合。

※ Pandoc 2.6 版において、LuaTpX で用いられる多言語パッケージが Polyglossia から Babelに変更された。

 $4541 \inf x\jsEngine\else$ 

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

- 4542 \pandocSkipLoadPackage{babel}
- 4543 \bxjs@set@dupload@proc{babel.sty}{%
- 4544 \bxjs@unset@dupload@proc{babel.sty}%
- \ClassWarning\bxjs@clsname
- {Package babel is required}% 4546

パッケージオプションに言語名が空の main= があるかを調べる。ある場合は lang=ja 対策 を実行する。

※\bxjs@babel@options には main= を除いたオプション列を格納する。

\@tempswafalse \let\bxjs@babel@options\@empty

```
\ensuremath{\texttt{Qfor\bxjs@tmpa:=\#1\do\{\%\ }}
                           \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb \@tempswatrue
                    4550
                           4551
                    4552
                          \if@tempswa
                    4553
                           \ClassWarning\bxjs@clsname
                    4554
                    4555
                             {Main language is invalid, so fallback\MessageBreak
                             definitions will be employed}%
                    4556
                            \bxjs@pandoc@polyglossia@ja
                    4557
                      ない場合は、本来の babel の処理を実行する。
                         \else
                    4558
                           \ClassWarning\bxjs@clsname
                    4559
                    4560
                             {Main language is valid, \MessageBreak
                             thus babel will be loaded}%
                    4561
                    4562
                            \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                            \RequirePackage[#1]{babel}[]%
                    4563
                    4564
                        プレアンブルで babel の読込が指示されなかった場合、読込済マークを外す。
                    4565 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%
                         \ifx\bxjs@babel@options\relax
                    4566
                    4567
                            \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                    4568
                          \fi}
\bxjs@pandoc@babel@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。
                    4569 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@babel@ja
                    4570 \def\bxjs@pandoc@babel@ja{%
                          \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                    4571
                          \edef\bxjs@next{%
                    4572
                            \noexpand\RequirePackage[\bxjs@babel@options,english]{babel}[]%
                    4573
                         }\bxjs@next
                    4574
                          \if j\jsEngine
                    4575
                           \RequirePackage[main=japanese]{pxbabel}[]%
                    4576
                          \else
                    4577
                            \RequirePackage{bxorigcapt}[]%
                    4578
                    4579
                         fi
                       lang 対策はこれで終わり。
                    4580 \fi
```

\def\bxjs@tmpb{main=}%

4548 4549

## E.5 geometry 変数

geometry を "再度読み込んだ" 場合に、そのパラメタで \setpagelayout\* が呼ばれるようにする。

```
4581 \bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{% 4582 \setpagelayout*{#1}}
```

#### E.6 CJKmainfont 変数

LuaT<sub>E</sub>X (+ LuaTeX-ja) の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```
4583 \if 1\jsEngine

4584 \pandocSkipLoadPackage{xeCJK}

4585 \providecommand*{\setCJKmainfont}{\setmainjfont}

4586 \fi
```

## E.7 Option clash 対策

```
xeCJK パッケージについて。
```

%xeCJK はクラス内で既に読み込まれているので、space は(意図通りに)無効になる。 % v2.8 $\sim$ v2.9.2 の間。

## E.8 paragraph のマーク

BXJS クラスでは \paragraph の見出しの前に \jsParagraphMark で指定したマークが付加され、既定ではこれは "■"である。しかし、この規定は \paragraph が本来のレイアウトを保っている、すなわち「行内見出しである」「節番号が付かない」ことが前提になっていると考えられる。Pandoc はこの規定を変更することがある(特に既定で \paragraphを別行見出しに再定義する)ため、変更された場合は \jsParagraphMark の既定値を空にする。

Pandoc がプレアンブルで行う再定義の結果を調べるため、begin-document フックを利用する。

```
4591 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{% } 4592 \Quadto@macro
```

まず、マーク変更が必要かを調べる。\oldparagraph という制御綴が定義済の場合、Pandocが \paragraph の様式を変更したということなので、マーク変更が必要である。

```
\begin{array}{lll} 4593 & \texttt{\footnote{1}} & \texttt{\footnote{1}
```

4595 \fi

\paragraph が番号付きの場合は、マーク変更が必要である。

```
4596 \ifnum\c@secnumdepth>3
4597 \@tempswatrue
```

4598 \fi

「マーク変更が必要」である場合、\jsParagraphMark が既定値のままであれば空に変更

```
する。
```

- $4599 \qquad \verb|\if@tempswa\ifx\jsParagraphMark\bxjs@org@paragraph@mark|| \\$
- 4600 \let\jsParagraphMark\@empty
- 4601 \fi\fi}

### E.9 全角空白文字

```
4602 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>\z@
4603 \catcode"3000=\active
4604 \begingroup \catcode`\!=7
4605 \protected\gdef!!!!3000{\zwspace}
4606 \endgroup
4607 \else\ifx\DeclareUnicodeCharacter\@undefined\else
4608 \DeclareUnicodeCharacter{3000}{\bxjs@zsp@char}
4609 \bxjs@protected\def\bxjs@zsp@char{\zwspace}
4610 \fi\fi
```

## E.10 hyperref 対策

```
hyperref の unicode オプションの固定を行う。
```

```
4611 \if j\jsEngine
4612 \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
4613 \else
4614 \bxjs@fix@hyperref@unicode{true}
4615 \fi
```

## E.11 Pandoc 要素に対する和文用の補正

■重要要素 重要 (Strong) 要素に対する IATEX 出力は \textbf となるが、代わりに \strong を使いたいため、\textbf を書き換えてしまう (うわぁ)。

```
4616 \verb|\ifbxjs@jp@fix@strong\\ifbxjs@jp@strong@cmd
      \let\orgtextbf\textbf
      \DeclareRobustCommand\bxjstextbf[1]{%
4618
4619
        \begingroup
          \let\textbf\orgtextbf
4620
4621
          \strong{#1}%
4622
        \endgroup}%
      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4623
        \let\textbf\bxjstextbf}
4625 \fi\fi
    \strong の書体を設定する。
4626 \jsAtEndOfClass{%
4627
      \ifx\strongfontdeclare\@undefined\else
        \ifcase\bxjs@jp@strong
4628
        \or \strongfontdeclare{\sffamily}%
        \or \strongfontdeclare{\sffamily\bfseries}%
4630
4631
        \fi
```

■インラインコード要素 インラインコード (Code) 要素に対する IAT<sub>E</sub>X 出力は \texttt となる。\texttt の両端に欧文ゴーストが入るようにする。

```
4633 \ifbxjs@jp@fix@code
4634
     \chardef\bxjs@eghost@c=23
      \ifx j\jsEngine \xspcode\bxjs@eghost@c=3
4635
4636
      \else\ifx 1\jsEngine \ltjsetparameter{alxspmode={\bxjs@eghost@c,3}}
      \else\ifx x\jsEngine %no-op
4637
     \else \let\bxjs@eghost@c\@undefined
4638
     \fi\fi\fi
4639
4640
     \ifx\bxjs@eghost@c\@undefined\else
        \font\bxjs@eghost@f=ec-lmr10 at 1.23456pt
4641
        \def\bxjs@pan@eghost{\bgroup\bxjs@eghost@f\bxjs@eghost@c\egroup}
4642
4643
        \let\orgtexttt\texttt
        \DeclareRobustCommand\bxjstexttt[1]{%
4644
4645
          \ifmmode \nfss@text{\ttfamily #1}%
          \else
4646
4647
            \ifvmode \leavevmode \fi
            \bxjs@pan@eghost\null
4648
            \begingroup \ttfamily #1\endgroup
4649
            \null\bxjs@pan@eghost
4650
          \fi}
4651
        \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4652
4653
          \let\texttt\bxjstexttt}
 さらに \verb の外側にも欧文ゴーストが入るようにする。
 ※bxjaghost の実装を参考にした。
        \expandafter\def\expandafter\verb\expandafter{%
4654
          \expandafter\bxjs@pan@eghost\verb}
4655
        \g@addto@macro\verb@egroup{\bxjs@pan@eghost}
4656
4657
     \fi
4658 \fi
```

#### E.12 完了

```
おしまい。
4659 %</pandoc>
和文ドライバ実装はここまで。
4660 %</drv>
```

## 付録 F 補助パッケージ一覧 🙈

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込んで利用することもできる。

- bxjscompat: ムニャムニャムニャ。
- bxjscjkcat: modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。
- bxjspandoc: Pandoc 用のナニカ。

4661 %<\*anc>

## 付録 G 補助パッケージ:bxjscompat 🥸

ムニャムニャムニャ……。

## G.1 準備

```
4662 %<*compat>
```

4663 \def\bxac@pkgname{bxjscompat}

\bxjx@engine エンジンの種別。

4664 \let\bxac@engine=n

4665 \def\bxac@do#1#2{%

4666 \edef\bxac@tmpa{\string#1}%

4667 \edef\bxac@tmpb{\meaning#1}%

4668 \ifx\bxac@tmpa\bxac@tmpb #2\fi}

4669 \bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}

4670 \bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=1}

\bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの終わりまで実行を遅延する。

 $4671 \ifx\jsAtEndOfClass\Qundefined$ 

4672 \let\bxac@delayed@if@bxjs\@firstofone

4673 \else \let\bxac@delayed@if@bxjs\jsAtEndOfClass

4674 \fi

\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。

 $\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4675 \verb|\newif \in College | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 10$ 

 $4676 \verb|\lambda| let \verb|\lambda| mposeOldLuaTeXBehavior\\ \verb|\lambda| relax|$ 

 $4677 \verb|\label{lem:herokeOldLuaTeXBehavior\relax|}$ 

## G.2 X<sub>TE</sub>X 部分

 $4678 \ifx x\bxac@engine$ 

XrTrX 文字クラスのムニャムニャ。

 $4679 \verb|\conlypreamble\bxac@adjust@charclass|$ 

4681 \@ifpackageloaded{xeCJK}{}{\%else

4682 \ifx\xe@alloc@intercharclass\@undefined\else

4683 \ifnum\xe@alloc@intercharclass=\z@

4684 \PackageInfo\bxac@pkgname

4685 {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%

```
4687
                                      \xe@alloc@intercharclass=3
                         4688
                                   }{%else
                                     \PackageWarning\bxac@pkgname
                         4689
                                        {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
                         4690
                                         \@gobble}%
                         4691
                                   }%
                         4692
                         4693
                                 \fi\fi
                                 \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z@
                         4694
                                   \PackageInfo\bxac@pkgname
                         4695
                                      {Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%
                         4696
                                   \ensuremath{\texttt{Qfor\bxac@x:=}}
                         4697
                                     3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
                         4698
                                     3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
                         4699
                         4700
                                     30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
                         4701
                                     31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
                         4702
                                     31FF%
                                   }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
                         4703
                         4704
                                 \fi
                         4705
                               }%
                         4706 }
                          以上。
                         4707 \fi
                                 LuaTFX 部分
                           G.3
                         4708 \ifx 1\bxac@engine
                             ムニャムニャ。
                         4709 \unless\ifnum\luatexversion<80 \ifnum\luatexversion<85
                               \chardef\pdftexversion=200
                               \def\pdftexrevision{0}
                               \let\pdftexbanner\luatexbanner
                         4713 \fi\fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\RevokeOldLuaTeXBehavior 4714 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup
                         4715 \ensuremath{\mbox{\sc hame output mode}\ends name \else}
                         4716 \def\bxac@ob@list{%
                         4717
                               \do{\let}\pdfoutput{\outputmode}%
                               \do{\let}\pdfpagewidth{\pagewidth}%
                         4718
                         4719
                               \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
                         4720
                               \do{\protected\edef}\pdfhorigin{{\pdfvariable horigin}}%
                               \do{\protected\edef}\pdfvorigin{{\pdfvariable vorigin}}}
                         4721
                         4722 \def\bxac@ob@do#1#2{\begingroup
                               \expandafter\bxac@ob@do@a\csname bxac@\string#2\endcsname{#1}#2}
                         4723
                         4724 \def\bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup}
                         4725
                               \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
                               \else \let#3#1\relax \let#1\@undefined
                         4726
                               \fi}
                         4727
```

\InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%

4686

```
4728 \verb|\protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior{%}|
      \unless\ifbxac@in@old@behavior
4729
4730
        \bxac@in@old@behaviortrue
        \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
4731
4732
4733 \protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%
     \ifbxac@in@old@behavior
4734
4735
        \bxac@in@old@behaviorfalse
        \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
4736
     \fi}
4737
4738 \fi
   漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニャムニャ。
      \ifnum\luatexversion>64 \directlua{
4739
4740
        local function range(cs, ce, cc, ff)
4741
          if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
            local setcc = tex.setcatcode
4742
            for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
4743
4744
          \quad \text{end} \quad
        end
4745
4746
        range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
        range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
4747
        range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
4748
        range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
4749
        range(0xAC00, 0xD7A3, 11, false)
4750
        range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
4751
        range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
4752
        range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
4753
4754
        range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
        range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
4755
        range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)
4756
4757
        range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
        range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
4758
   以上。
4760 \fi
 G.4
       完了
   おしまい。
```

# 付録 H 補助パッケージ: bxjscjkcat 🕾

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

4761 %</compat>

#### H.1 準備

```
4762 %<*cjkcat>
           4763 \def\bxjx@pkgname{bxjscjkcat}
           4764 \newcount\bxjx@cnta
           4765 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo
           4766 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@a
           4767 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@b
\bxjx@engine エンジンの種別。
           4768 \let\bxjx@engine=n
           4769 \def\bxjx@tmpdo#1#2{%
                 \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
           4770
           4771
                 \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
                 \ifx\bxjx@tmpa\bxjx@tmpb #2\fi}
           4773 \bxjx@tmpdo\kanjiskip{\let\bxjx@engine=j}
           4774 \bxjx@tmpdo\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
           4775 \bxjx@tmpdo\XeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}
           4776 \bxjx@tmpdo\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
           4777 \bxjx@tmpdo\luatexversion{\let\bxjx@engine=1}
               それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを
             検査する。
           4778 \def\bxjx@tmpdo#1#2{%}
           4779
                 \if#1\bxjx@engine
                   \@ifpackageloaded{#2}{}{%else
           4780
                     \PackageError\bxjx@pkgname
           4781
           4782
                      {Package '#2' must be loaded}%
           4783
                      {Package loading is aborted.\MessageBreak\@ehc}%
                     \endinput}
           4784
           4785
                 \fi}
           4786 \bxjx@tmpdo{p}{bxcjkjatype}
           4787 \text{bxjx@tmpdo}\{x\}\{xeCJK\}
           4788 \bxjx@tmpdo{1}{luatexja}
               古い IATFX の場合、\TextOrMath は fixltx2e パッケージで提供される。
           4789 \ifx\TextOrMath\@undefined
           4790 \RequirePackage{fixltx2e}
           4791\fi
```

## H.2 和文カテゴリコードの設定

upIATeX の場合、和文カテゴリコードの設定を LuaTeX-ja と(ほぼ)等価なものに変更する。

```
※ LuaT<sub>E</sub>X-ja との相違点:A830、A960、1B000。
4792 \if u\bxjx@engine
4793 \@for\bxjx@tmpa:={%
```

```
4794 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
4795 0700,0750,0780,07C0,0800,0840,0860,08A0,0900,0980,%
4796 OAOO, OA8O, OBOO, OB8O, OCOO, OC8O, ODOO, OD8O, OEOO, OE8O, %
4797 OFOO, 1000, 10A0, 1200, 1380, 13A0, 1400, 1680, 16A0, 1700, %
4798 1720, 1740, 1760, 1780, 1800, 18B0, 1900, 1950, 1980, 19E0, %
4799 1A00, 1A20, 1AB0, 1B00, 1B80, 1BC0, 1C00, 1C50, 1C80, 1CC0, %
4800 1CDO, 1D00, 1D80, 1DCO, 1E00, 1F00, 2440, 27CO, 27F0, 2800, %
4801 2A00,2C00,2C60,2C80,2D00,2D30,2D80,2DE0,2E00,4DC0,%
4802 A4D0, A500, A640, A6A0, A700, A720, A800, A830, A840, A880, %
4803 A8EO, A900, A930, A980, A9EO, AA00, AA60, AA80, AAEO, AB00, %
4804 AB30, AB70, ABC0, D800, DB80, DC00, E000, FB00, FB50, FE00, %
4805 FE70, FFF0, %
4806 10000,10080,10100,10140,10190,101D0,10280,102A0,%
4807 102E0,10300,10330,10350,10380,103A0,10400,10450,%
4808 10480, 104B0, 10500, 10530, 10600, 10800, 10840, 10860, %
4809 10880, 108E0, 10900, 10920, 10980, 109A0, 10A00, 10A60, %
4810 10A80,10AC0,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,%
4811 10E60,11000,11080,110D0,11100,11150,11180,111E0,%
4812 11200,11280,112B0,11300,11400,11480,11580,11600,%
4813 11660,11680,11700,118A0,11A00,11A50,11AC0,11C00,%
4814 11C70,11D00,12000,12400,12480,13000,14400,16800,%
4815 16A40,16AD0,16B00,16F00,1BC00,1BCA0,1D000,1D100,%
4816 1D200, 1D300, 1D360, 1D400, 1D800, 1E000, 1E800, 1E900, %
4817 1EE00,1F000,1F030,1F0A0,1F300,1F600,1F650,1F680,%
4818 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,E0100,F0000,100000,%
4819 00C0%
4820 }\do{%
4821 \Otempcnta="\bxjxOtmpa\relax
4822 \verb|\dtempcntb| @tempcnta \advance| @tempcntb| m@ne
4823 \verb|\chardef| bxjx@tmpb| kcatcode| @tempcntb|
4824 \kcatcode\@tempcnta=15 \kcatcode\@tempcntb\bxjx@tmpb}
4825 \fi
```

## H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

「特定 CJK 曖昧文字」について、和文・欧文扱いを制御できるようにする。ここで「特定 CJK 曖昧文字」とは以下に該当する文字の集合を指す:

- Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるギリシャ文字・キリル文字。
- Latin-1 の上位部分と JIS X 0208 に共通して含まれる文字 (LuaT<sub>E</sub>X-ja の定める "範囲 8")。

\bxjx@grkcyr@list 「特定 CJK 曖昧文字」に関する情報をもつ \do-リスト。各項目の形式は以下の通り: \do{⟨Unicode 符号値⟩}{⟨対象 fontenc⟩}{⟨テキスト LICR⟩}{⟨数式 LICR⟩} ※数式で使わない文字は〈数式 LICR〉を空にする。

4826 \@onlypreamble\bxjx@grkcyr@list 4827 \def\bxjx@grkcyr@list{%

```
% GR. C. L. ALPHA
4828 \do{0391}{LGR}{\text{LGR}}{A}%
4829 \do{0392}{LGR}{\text{LGR}}{\text{B}}%
                                                                                                     % GR. C. L. BETA
4830 \do{0393}{LGR}{\text{cmma}}{\text{Gamma}}
                                                                                                     % GR. C. L. GAMMA
4831 \do{0394}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Delta}}
                                                                                                     % GR. C. L. DELTA
                                                                                                     % GR. C. L. EPSILON
4832 \do{0395}{LGR}{\text{textEpsilon}{E}}
                                                                                                     % GR. C. L. ZETA
4833 \do{0396}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Z}}%
                                                                                                     % GR. C. L. ETA
4834 \do{0397}{LGR}{\text{textEta}{H}}%
4835 \do{0398}{LGR}{\text{Theta}}
                                                                                                     % GR. C. L. THETA
                                                                                                     % GR. C. L. IOTA
4836 \do{0399}{LGR}{\text{textIota}{I}}%
                                                                                                     % GR. C. L. KAPPA
4837 \do{039A}{LGR}{\text{kppa}}{K}%
                                                                                                     % GR. C. L. LAMDA
4838 \do{039B}{LGR}{\text{Lambda}}{\text{Lambda}}
                                                                                                     % GR. C. L. MU
4839 \do{039C}{LGR}{\text{LGR}}{\text{M}}%
4840 \do{039D}{LGR}{\text{LCR}}{\text{N}}%
                                                                                                     % GR. C. L. NU
4841 \do{039E}{LGR}{\text{Xi}}%
                                                                                                     % GR. C. L. XI
4842 \do{039F}{LGR}{\text{cmicron}}{0}%
                                                                                                     % GR. C. L. OMICRON
4843 \do{03A0}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Pi}}%
                                                                                                     % GR. C. L. PI
4844 \do{03A1}{LGR}{\text{textRho}}{P}%
                                                                                                     % GR. C. L. RHO
4845 \do{03A3}{LGR}{\text{xtSigma}}{\text{sigma}}
                                                                                                     % GR. C. L. SIGMA
                                                                                                     % GR. C. L. TAU
4846 \do{03A4}{LGR}{\text{textTau}}{T}%
                                                                                                     % GR. C. L. UPSILON
4847 \do{03A5}{LGR}{\textUpsilon}{\Upsilon}%
4848 \do{03A6}{LGR}{\text{hi}}%
                                                                                                     % GR. C. L. PHI
                                                                                                     % GR. C. L. CHI
4849 \do{03A7}{LGR}{\text{textChi}}{X}%
4850 \do{03A8}{LGR}{\text{cxtPsi}}{\text{Psi}}%
                                                                                                     % GR. C. L. PSI
                                                                                                     % GR. C. L. OMEGA
4851 \do{03A9}{LGR}{\text{cmega}}{\Omega}
                                                                                                     % GR. S. L. ALPHA
4852 \do{03B1}{LGR}{\text{\colored}} \
4853 \do{03B2}{LGR}{\text{textbeta}}{\text{beta}}
                                                                                                     % GR. S. L. BETA
4854 \do{03B3}{LGR}{\text{xtgamma}}{\text{gamma}}
                                                                                                     % GR. S. L. GAMMA
4855 \do{03B4}{LGR}{\text{textdelta}}{\text{delta}}
                                                                                                     % GR. S. L. DELTA
4856 \do{03B5}{LGR}{\text{cysilon}}
                                                                                                     % GR. S. L. EPSILON
                                                                                                     % GR. S. L. ZETA
4857 \do{03B6}{LGR}{\text{textzeta}}{\text{zeta}}%
                                                                                                     % GR. S. L. ETA
4858 \do{03B7}{LGR}{\text{texteta}}{\text{ca}}
4859 \do{03B8}{LGR}{\text{texttheta}}{\text{theta}}
                                                                                                     % GR. S. L. THETA
4860 \do{03B9}{LGR}{\text{textiota}}{\text{iota}}\%
                                                                                                     % GR. S. L. IOTA
4861 \do{03BA}{LGR}{\text{textkappa}}{\text{kappa}}%
                                                                                                     % GR. S. L. KAPPA
                                                                                                     % GR. S. L. LAMDA
4862 \do{03BB}{LGR}{\text{lambda}}{\text{lambda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mbda}}{\text{mb
4863 \do{03BC}{LGR}{\text{mu}}%
                                                                                                     % GR. S. L. MU
                                                                                                     % GR. S. L. NU
4864 \do{03BD}{LGR}{\text{nu}}%
4865 \do{03BE}{LGR}{\text{xi}}%
                                                                                                     % GR. S. L. XI
                                                                                                     % GR. S. L. OMICRON
4866 \do{03BF}{LGR}{\text{textomicron}}{o}%
4867 \do{03C0}{LGR}{\text{textpi}}{\pi}%
                                                                                                     % GR. S. L. PI
4868 \do{03C1}{LGR}{\text{textrho}}{\text{ho}}%
                                                                                                     % GR. S. L. RHO
4869 \do{03C2}{LGR}{\textvarsigma}{\varsigma}% % GR. S. L. FINAL SIGMA
4870 \do{03C3}{LGR}{\text{xtsigma}}{\text{sigma}}
                                                                                                     % GR. S. L. SIGMA
4871 \do{03C4}{LGR}{\text{texttau}}{\text{tau}}%
                                                                                                     % GR. S. L. TAU
4872 \do{03C5}{LGR}{\text{textupsilon}}%
                                                                                                     % GR. S. L. UPSILON
4873 \do{03C6}{LGR}{\text{textphi}}{\phi}
                                                                                                     % GR. S. L. PHI
4874 \do{03C7}{LGR}{\text{chi}}%
                                                                                                     % GR. S. L. CHI
                                                                                                     % GR. S. L. PSI
4875 \do{03C8}{LGR}{\text{textpsi}}{\psi}%
4876 \do{03C9}{LGR}{\text{cmega}}%
                                                                                                     % GR. S. L. OMEGA
```

```
% CY. C. L. IO
4877 \do{0401}{T2A}{\CYRYO}{}%
4878 \do{0410}{T2A}{\CYRA}{}%
                                               % CY. C. L. A
4879 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%
                                               % CY. C. L. BE
4880 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%
                                               % CY. C. L. VE
                                               % CY. C. L. GHE
4881 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}%
                                               % CY. C. L. DE
4882 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%
                                               % CY. C. L. IE
4883 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%
4884 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%
                                               % CY. C. L. ZHE
                                               % CY. C. L. ZE
4885 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%
                                               % CY. C. L. I
4886 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%
                                               % CY. C. L. SHORT I
4887 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%
                                               % CY. C. L. KA
4888 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%
                                               % CY. C. L. EL
4889 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%
                                               % CY. C. L. EM
4890 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%
4891 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%
                                               % CY. C. L. EN
4892 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%
                                               % CY. C. L. O
4893 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%
                                               % CY. C. L. PE
                                               % CY. C. L. ER
4894 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%
4895 \do{0421}{T2A}{\CYRS}{}%
                                               % CY. C. L. ES
4896 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%
                                               % CY. C. L. TE
4897 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%
                                               % CY. C. L. U
                                               % CY. C. L. EF
4898 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%
4899 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%
                                               % CY. C. L. HA
                                               % CY. C. L. TSE
4900 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%
                                               % CY. C. L. CHE
4901 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%
                                               % CY. C. L. SHA
4902 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%
                                               % CY. C. L. SHCHA
4903 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%
4904 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%
                                               % CY. C. L. HARD SIGN
4905 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%
                                               % CY. C. L. YERU
                                               % CY. C. L. SOFT SIGN
4906 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}\%
                                               % CY. C. L. E
4907 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%
4908 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}%
                                               % CY. C. L. YU
                                               % CY. C. L. YA
4909 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%
4910 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%
                                               % CY. S. L. A
                                               % CY. S. L. BE
4911 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%
4912 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}%
                                               % CY. S. L. VE
                                               % CY. S. L. GHE
4913 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%
                                               % CY. S. L. DE
4914 \do{0434}{T2A}{\cyrd}{}%
                                               % CY. S. L. IE
4915 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%
                                               % CY. S. L. ZHE
4916 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%
4917 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%
                                               % CY. S. L. ZE
4918 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%
                                               % CY. S. L. I
4919 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%
                                               % CY. S. L. SHORT I
                                               % CY. S. L. KA
4920 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%
4921 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%
                                               % CY. S. L. EL
                                               % CY. S. L. EM
4922 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%
4923 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%
                                               % CY. S. L. EN
                                               % CY. S. L. O
4924 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%
4925 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%
                                               % CY. S. L. PE
```

```
% CY. S. L. ER
4926 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%
4927 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%
                                               % CY. S. L. ES
4928 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%
                                               % CY. S. L. TE
4929 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%
                                               % CY. S. L. U
                                               % CY. S. L. EF
4930 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%
                                               % CY. S. L. HA
4931 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%
4932 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%
                                               % CY. S. L. TSE
4933 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%
                                               % CY. S. L. CHE
                                               % CY. S. L. SHA
4934 \do{0448}{T2A}{\cyrsh}{}%
                                              % CY. S. L. SHCHA
4935 \do{0449}{T2A}{\cyrshch}{}%
                                               % CY. S. L. HARD SIGN
4936 \do{044A}{T2A}{\cyrhrdsn}{}%
                                              % CY. S. L. YERU
4937 \do{044B}{T2A}{\cyrery}{}%
4938 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}%
                                              % CY. S. L. SOFT SIGN
                                               % CY. S. L. E
4939 \do{044D}{T2A}{\cyrerev}{}%
4940 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%
                                              % CY. S. L. YU
4941 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%
                                              % CY. S. L. YA
4942 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%
                                               % CY. S. L. IO
4943 \do{00A7}{TS1}{\text{\mathsection}}\% SECTION SYMBOL
4944 \do{00A8}{TS1}{\text{textasciidieresis}}}
                                                % DIAERESIS
4945 \do{00B0}{TS1}{\textsc{SIGN}}
4946 \do{00B1}{TS1}{\text{textpm}}{\pm}%
                                               % PLUS-MINUS SIGN
4947 \do{00B4}{TS1}{\text{textasciiacute}}
                                               % ACUTE ACCENT
4948 \do{00B6}{TS1}{\textparagraph}{\mathparagraph}% PILCROW SIGN
                                               % MULTIPLICATION SIGN
4949 \do{00D7}{TS1}{\text{texttimes}}{\text{times}}
4950 \do{00F7}{TS1}{\text{textdiv}}{\text{div}}%
                                               % DIVISION SIGN
4951 }
```

\mathdegree 面倒なので補っておく。

 $4952 \providecommand*{\mathdegree}{{}^{\circ}}$ 

\ifbxjx@gcc@cjk [スイッチ]「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにするか。 4953 \newif\ifbxjx@gcc@cjk

\greekasCJK 〔公開命令〕「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにする。

4954 \newcommand\*\greekasCJK{% 4955 \bxjx@gcc@cjktrue}

\nogreekasCJK 〔公開命令〕「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

4956 \newcommand\*\nogreekasCJK{% 4957 \bxjx@gcc@cjkfalse}

\bxjx@fake@grk \bxjx@fake@grk{⟨出力文字⟩}{⟨基準文字⟩}: ラテン文字で代用される数式ギリシャ文字の出力を行う。⟨基準文字⟩(mathchardefの制御綴)の数式クラスと数式ファミリを引き継いで、⟨出力文字⟩(ASCII 文字トークン)の文字コードの数式文字を出力する。例えば、\Piの意味が \mathchar"7005 である場合、\bxjx@fake@grk{B}{\Pi} は \mathchar"7042を実行する。

※フォントパッケージ使用時の再定義を考慮して、〈基準文字〉が mathchardef であるかを 検査し、そうでない場合はフォールバックとして単に〈出力文字〉を実行する。

```
4958 \def\bxjx@tmpdo#1\relax{%}
4959
                \def\bxjx@fake@grk##1##2{%
                      \expandafter\bxjx@fake@grk@a\meaning##2#1\@nil{##1}{##2}}%
4960
4961
                \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@nil##3##4{%
4962
                     \ifx\\##1\\%
                           \bxjx@cnta##4\divide\bxjx@cnta\@cclvi
4963
                           \multiply\bxjx@cnta\@cclvi \advance\bxjx@cnta`##3\relax
4964
4965
                           \mathchar\bxjx@cnta
                     \left\{ else \#3\right\}
4966
4967 }\expandafter\bxjx@tmpdo\string\mathchar\relax
     ■pdfTFX・upTFX の場合
4968 \times 0^{1} p\ \quad \quad
              • \[bx jx@KC/(符号値)]: その文字が「特定曖昧 CJK 文字」に該当する場合に定義済
                     になる。
          まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。
    ※「既定 UTF-8 化」後の LATeX においても、必ず「inputenc が明示的に読み込まれた」
    状態になる。
4969 \ensuremath{\texttt{0ifpackageloaded\{inputenc}\{\}\{\%else\}\}}
               \RequirePackage[utf8]{inputenc}}
4971 \def\bxjx@tmpa{utf8}
4972 \ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname
               \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname
                   {Input encoding changed to utf8}%
4974
4975 \inputencoding{utf8}%
4976 \fi
          upT<sub>F</sub>X の場合に、「特定曖昧 CJK 文字」を含むブロックの和文カテゴリコードを変更
    する。
4977 \if u\bxjx@engine
4978 \kcatcode"0370=15
4979 \kcatcode"0400=15
4980 \kcatcode"0500=15
4981 \fi
```

各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。

 $4982 \ensuremath{$\def\bxjx@tmpdo#1{\%}}$ 

4983 \@tempcnta="#1\relax

4984 \expandafter\bxjx@tmpdo@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}

 $4985 \ensuremath{ \mbox 14985 \mbox{ \mbox 1}} 4985 \ensuremath{ \mbox 1} 4985 \ensuremath{ \mbox 1}$ 

引数 =  $\[ bxjx@KC/\langle 符号値 \rangle ] \{\langle fontenc \rangle \} \{\langle LICR \rangle \} \{\langle bxjx@KC/\langle fontenc \rangle \} \{\langle bxjx@KC/\langle f$ 

4986 \ifx\\**#**5\\%

4987 \def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%

〈数式 LICR〉が英字である場合は \bxjx@fake@grk で出力する。大文字なら \Pi、小文字なら \pi を基準文字にする。

```
4988 \else\ifcat A\noexpand#5%
```

- 4989 \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
- 4990 {\ifnum\uccode`#5=`#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%

それ以外は〈数式 LICR〉をそのまま実行する。

- 4991 \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
- 4992 \fi\fi
- $4993 \qquad \def\bxjx@tmpb{\bxjx@tmpdo@b{#1}{#2}{#3}{#4}}\%$
- 4994 \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}

以降はエンジン種別で分岐する。upTFX の場合。

- 4995 \if u\bxjx@engine
- 4996 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%

引数 = \[bxjx@KC/〈符号値〉]{〈符号値〉}{〈fontenc〉}{〈LICR〉}{〈数式中の動作〉}

当該の Unicode 文字の動作は「テキストでは〈LICR〉、数式では〈数式中の動作〉」となる。 LICR は現在エンコーディングで有効な定義がある場合はそれが実行されるはずである。(つまり、現在が LGR である場合はギリシャ文字は常に欧文扱いになる。)それ以外の場合は LICR を \bxjx@ja@or@not に帰着させる。この際に、和文用の定義として当該の kchardef を使用し、その制御綴として \[bxjx@KC/...] を流用している。

- 4997 \kchardef#1=\@tempcnta
- 4998 \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{#1}{#3}{#4}}%
- 4999 \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}

- 5000 \else\if p\bxjx@engine
- 5001 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%
- 5002 \mathchardef#1=\@tempcnta
- ${\tt 5003} \qquad {\tt NeclareTextCommandDefault\{\#4\}\{\bxjx@ja@or@not\{\UTF\{\#2\}\}\{\#3\}\{\#4\}\}\%}$
- $5004 \qquad \verb|\DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{\#5}}}|$
- 5005 \fi\fi

以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。

5006 \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list

\bxjx@DeclareUnicodeCharacter \bxjx@DeclareUnicodeCharacter を改変して、「特定 CJK 曖昧文字」の場合に再定義を 抑止したもの。

- $5007 \verb|\@onlypreamble\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter|$
- $5008 \verb|\label{lem:codeCharacter}| DeclareUnicodeCharacter| DeclareUni$
- $5009 \verb|\colored] bxjx@DeclareUnicodeCharacter|$
- $5010 \ensuremath{\mbox{\sc bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2f}\%}$
- 5011 \count@="#1\relax
- $5012 \qquad \texttt{\expandafter\ifx\csname\ bxjx@KC/\the\count@\endcsname\relax}$
- $\verb|\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}||$
- 5014 \else

```
5015 \wlog{ \space\space skipped defining Unicode char U+#1}% 5016 \fi}
```

\bxjx@ja@or@not \bxjx@ja@or@not{\和文用定義\}{\対象 fontenc\}}{\LICR\}: \[no]greekasCJK の状態に応じて和文または欧文で文字を出力する。

5017 \def\bxjx@ja@or@not#1#2#3{%

\greekasCJK の場合は、無条件に 〈和文用定義〉 を実行する。

5018 \ifbxjx@gcc@cjk #1%

\nogreekasCJK の場合は、対象のエンコーディングに変更して LICR を実行するが、その エンコーディングが未定義の場合は(フォールバックとして)和文用定義を使う。

- 5019 \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%
- 5020 \else \UseTextSymbol{#2}{#3}%
- $5021 \fi\fi$

\DeclareFontEncoding@ \DeclareFontEncoding@ にパッチを当てて、\DeclareFontEncoding の実行中だけ改変 後の \DeclareUnicodeCharacter が使われるようにする。

- 5022 \begingroup
- 5023 \toks@\expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}
- 5024 \xdef\next{\def\noexpand\DeclareFontEncoding@##1##2##3{%
- 5025 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd
- 5026 \the\toks@
- 5027 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd}}
- $5028 \endgroup\next$
- $5029 \def\bxjx@swap@DUC@cmd{%}$
- 5030 \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter
- $5031 \verb| \label{lem:codeCharacterbxjx@DeclareUnicodeCharacter}| \\$
- 5032 \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa
- 5033 \let\bxjx@tmpa\relax}

以上。

## ■X∃TEX · LuaTEX の場合

 $5034 \le \inf 0 if x\bxjx@engine1\fi\if 1\bxjx@engine1\fi>0$ 

各文字について、数式中の動作を定義する。

- $5035 \ensuremath{\mbox \mbox{ } \mbox$
- 5036 \bxjx@cnta="#1\relax
- 5037 \begingroup
- 5038 \lccode`~=\bxjx@cnta
- 5039 \lowercase{\endgroup
- 5040 \bxjx@tmpdo@a{~}}{#1}}
- 5041 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%

〈数式 LICR〉が空なら何もしない。空でない場合、 $upIAT_{EX}$  の場合と同じ方法で"数式中の動作"を決定し、当該の文字を math active にしてその動作を設定する。

- $5042 \qquad \verb|\ifx\\#5|\\| let\bxjx@tmpa\relax|$
- 5043 \else\ifcat A\noexpand#5%

```
\edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
5044
                       {\inv {\in
5045
5046
             \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
             \fi\fi
5047
              \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
5048
                  \mathcode\bxjx@cnta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
5049
             \fi}
5050
    「Unicode な数式」の設定が行われているかを(簡易的に)検査して、そうでない場合にの
    み、以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。
5051 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
5052 \verb|\ifx\bxjx@tmpa\pi \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list \fi
         次に、テキストにおいて「特定 CJK 曖昧文字」の扱いが \[no]greekasCJK で切り替わる
    ようにする。
         LuaTeX の場合は、LuaTeX-ja の jacharrange の設定を変更する。
    ※ "範囲 2" がギリシャ・キリル文字、"範囲 8" が Latin-1 の記号。
5053 \if 1\bxjx@engine
5054
             \protected\def\greekasCJK{%
                  \bxjx@gcc@cjktrue
5055
5056
                  \ltjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}}
             \protected\def\nogreekasCJK{%
5057
5058
                  \bxjx@gcc@cjkfalse
                  \ltjsetparameter{jacharrange={-2, -8}}}
5060 \fi
         X¬T¬X の場合、xeCJK は X¬T¬X の文字クラス定義を参照しているので、対象文字の文字
    クラスを変更する。
5061 \if x\bxjx@engine
             \let\bxjx@gcc@cjk@list\@empty
5062
              \def\do#1#2#3#4{%
5063
                   \edef\bxjx@gcc@cjk@list{\bxjx@gcc@cjk@list
5064
                       \noexpand\XeTeXcharclass"#1\bxjx@cnta}}
5065
              \bxjx@grkcyr@list
5066
              \protected\def\greekasCJK{%
5067
5068
                  \bxjx@gcc@cjktrue
                  \bxjx@cnta=\@ne \bxjx@gcc@cjk@list}
5069
              \protected\def\nogreekasCJK{%
5070
                   \bxjx@gcc@cjkfalse
5072
                  \bxjx@cnta=\z@ \bxjx@gcc@cjk@list}
5073 \fi
         以上。
5074 \fi\fi
```

#### H.4 初期設定

「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

5075 \nogreekasCJK

#### H.5 完了

おしまい。

5076 %</cjkcat>

## 付録 I 補助パッケージ:bxjspandoc 🚳

Pandoc の IATEX 用標準テンプレートをより幸せに使うための設定。BXJS クラスの pandoc ドライバのコードの中の、"汎用的"に使える部分を切り出したもの。つまり現在の pandoc ドライバはこのパッケージを読みこむ。

%テンプレートの  $T_{EX}$  コードより前に読み込む必要があるため、専ら文書クラス内での読込に限られる。

#### 1.1 準備

5077 %<\*ancpandoc>

5078 %% このファイルは日本語文字を含みます.

5079 \def\bxjsp@pkgname{bxjscjkcat}

## \bxjsp@engine エンジンの種別。

5080 \let\bxjsp@engine=n

 $5081 \verb|\conlypreamble\bxjsp@do|\\$ 

5082 \def\bxjsp@do#1#2{%

 $5084 \ \edgh{\mbox{bxjsp@tmpb{\meaning#1}}\%}$ 

5085 \ifx\bxjsp@tmpa\bxjsp@tmpb #2\fi}

5088 \bxjsp@do\pdftexversion{\let\bxjsp@engine=p}

 $5089 \verb|\bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=1}|$ 

## 1.2 パッケージオプション

english オプションが指定されている場合、\ldots の調整を抑止する。

※つまり、「グローバルの english オプション」が指定されている場合も抑止の対象になる。BXJS クラスの英語モードを想定しているが、それ以外の場合でも、一般的な  $I \not \sim T_E X$  の 習慣として、グローバルの english は「その文書の基底言語が英語である」ことを示す。

5090 \newif\ifbxjsp@english

5091 \DeclareOption{english}{\bxjsp@englishtrue}

オプション定義はおしまい。

 $5092 \ProcessOptions*$ 

#### I.3 パッケージ読込の阻止

\pandocSkipLoadFile \pandocSkipLoadFile{ $\langle ファイル名 \rangle$ }: 特定のファイルを (\@filewithoptions の処理に関して) 読込済であるとマークする。

 $5093 \verb|\Qonlypreamble\pandocSkipLoadFile|$ 

 $5094 \verb|\newcommand*\pandocSkipLoadFile[1]{%} \\$ 

 $\verb|\colored| \verb|\colored| \end{|\colored| \colored| \colored$ 

5096 \def\bxjsp@skip@load@file@a#1#2{%

 $5097 \ \ifx#1\relax$ 

5098 \def#1{2001/01/01}%

5099 \PackageInfo\bxjsp@pkgname

5100 {File '#2' marked as loaded\@gobble}%

5101 \fi}

\pandocSkipLoadPackage \pandocSkipLoadPackage{\( パッケージ名\) }: \pandocSkipLoadFile の機能を用いて パッケージの読込を阻止する。

 $5102 \verb|\gray| and ocSkipLoadPackage|$ 

 $5103 \mbox{ }\mbox{newcommand*}\pandocSkipLoadPackage[1]{}\$ 

5104 \pandocSkipLoadFile{#1.sty}}

#### I.4 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは fixltx2e パッケージを読み込むが、最近(2015 年版以降)の  $\LaTeX$  ではこれで警告が出る。これを抑止する。

LATeX カーネルが新しい場合は fixltx2e を読込済にする。

 $5105 \ifx\CincludeInRelease\Cundefined\else$ 

5106 \pandocSkipLoadPackage{fixltx2e}

5107 \fi

## 1.5 cmap パッケージ

エンジンが (u)pIAT $_E$ X のときに cmap パッケージが読み込まれるのを阻止する。(実際は警告が出るだけで無害であるが。)

5108 \if j\bxjsp@engine

5109 \pandocSkipLoadPackage{cmap}

5110 **\fi** 

## I.6 microtype パッケージ

警告が多すぎなので消す。

5111 \if j\bxjsp@engine \else

5112 \PassOptionsToPackage{verbose=silent}{microtype}

5113 **\fi** 

エンジンが (u)pIATeX のときに microtype パッケージが読み込まれるのを阻止し、さら にテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は standard ドライバでこの処理を行っていたが、元来は Pandoc 用の処理なので、1.5 版で pandoc に移動。

5114 \if j\bxjsp@engine

5115 \pandocSkipLoadPackage{microtype}

5116 \newcommand\*\UseMicrotypeSet[2][]{}

5117 \fi

## I.7 Unicode 文字変換対策

Pandoc で LATEX 形式に書き出す場合は、元データ中の一部の Unicode 文字を「LATEX の表記」に置き換える。その中には日本語文書で問題になるものが含まれる。

$$\cdots \rightarrow \exists \{\} \quad ' \rightarrow ` \quad ' \rightarrow ! \quad " \rightarrow ` : \quad " \rightarrow ! !$$

日本語  $\LaTeX$  では「 $\LaTeX$  の表記」は欧文扱い、Unicode 文字は和文扱いとして使い分ける 習慣があるので、このような置換が行われるのは好ましくない。

これらの置換のうち、後の 4 つは Pandoc の --no-tex-ligatures オプションを指定すれば抑止できるが、「…」の置換を抑止する機能はないようである。そこで、「\ldots を『…』に戻す」という処置を行う。

\pandocLdots Pandoc 用の \ldots の実装。非数式である場合は代わりに … を実行する。

※以前は「Pandoc が必ず \ldots{} の形で書き出す」ことを利用して後続に {} があるかで「元が … であるか」を判断していた。ところが、Pandoc 2.7 版で {} を必ずしも付けなくなったため、1.9f 版で非数式の \ldots を全て … に戻す動作に変更した。

 $5118 \verb|\DeclareRobustCommand{\pandocLdots}{\cite{MondocLdots}}$ 

5119 \relax\ifmmode \expandafter\bxjsp@org@ldots

5120 \else \expandafter\bxjsp@ja@ellipsis

5121 \fi}

5122 \def\bxjsp@ja@ellipsis{...}

5123 \let\bxjsp@org@ldots\ldots

\ldots の実装を置き換える。

※ Benglish オプション指定時は置き換えない。

5124 \AtBeginDocument{%

5125 \let\bxjsp@org@ldots\ldots

5126 \ifbxjsp@english\else \let\ldots\pandocLdots \fi}

\ldots の直後の文字が非英字の場合、Pandoc は「\ldots。」のように空白を入れずに並べて出力する。「Pandoc は非英字と見なすが  $X_{\overline{A}}$  TeX ・Lua TeX は英字と見なす(または将来その可能性がある)」文字で、特に日本語文書に現れるものについて、非英字扱いにしておく

※ Pandoc は「Unicode 7.0 で GC が Letter」な文字を英字と判定している。

5127 \chardef\bxjsp@cc@other=12

```
5129 \label{lem:condition} $$ 5129 \end{condition} $$ \end{condition} $$ 5129 \end{condition} $$ \end{condition} $$ $ 129 \end{condition} $$ \end{
                               \@tempcnta"#1\relax \@tempcntb"#2\relax
5131
                                \loop\ifnum\@tempcnta<\@tempcntb</pre>
5132
                                           \catcode\@tempcnta\bxjsp@cc@other
5133
                                           \advance\@tempcnta\@ne
5134
                               \repeat}
5135 \ifnum0\if x\bxjsp@engine1\fi\if 1\bxjsp@engine1\fi>0
                               \catcode"1F23B=\bxjsp@cc@other
5136
                                \bxjsp@makeother@range{9FCD}{A000}
5137
                                 \bxjsp@makeother@range{1B002}{1B170}
5138
                                \bxjsp@makeother@range{2B820}{2EBF0}
5139
5140 \fi
```

## I.8 PandoLa モジュール

インストール済であれば読み込む。

- $5141 \verb|\IfFileExists{bxpandola.sty}{{\%}}$
- NequirePackage{bxpandola}\relax
- 5143 \PackageInfo\bxjsp@pkgname
- $5144 \qquad \{ \tt PandoLa\ module\ is\ loaded \backslash Qgobble \}$
- 5145 }{}

## I.9 完了

おしまい。

5146 %</ancpandoc>

補助パッケージ実装はここまで。

5147 %</anc>